

ブラジル伝道の半生記

松田已代志



日本教文社

ブラジル伝道の半生記 松田巳代志

日本教文社



著者紹介 松田己代志(まつただ・みよし)
明治44年、熊本県御所浦島に生れる。昭和7
年9月、兄・夫二郎氏の農園を手伝うため。
渡伯。昭和9年、生長のみ教えにふれ。
以後、五十年もの長きに亘って、ブラジル全
土で情熱的に光明化運動を展開する。昭和29
年に本部講師拝命。昭和57年には、オールド
ン・ド・イピランガ勲章受章。現在南米教化
総長として、第一線で活躍中。

一九八八年七月五日
松田己代志に寄贈

BIBLIOTECA
DA
SOCIEDADE BRASILEIRA
DE CULTURA JAPONESA

贈呈

ブラジル日本文化協会 展

松田己代志

著者紹介

松田己代志 (まつただ・みよし)

明治44年、熊本県御所浦島に生れる。昭和7年9月、兄・大二郎氏の農園を手伝うため、渡伯。昭和9年、生長の家のみ教えにふれ、以後、五十年もの長きに亘って、ブラジル全土で情熱的に光明化運動を展開する。昭和29年に本部講師拝命。昭和57年には、オールドン・ド・イピランガ勲章受章。現在南米教化 総長として、第一線で活躍中。

本書によせて

徳久 克己

ブラジルへ、はじめて私が行きましたのは、昭和二十七年でした。当時は、まだ日本人の一世が、とても元気でして、日本人同士の間で、勝ち組と負け組とに別れて、物凄い争いがあつた時で、生長の家の信徒も、二つに別れて争っていました。こんなことは、今では、とても、考えられないことですが、大きく分けますと、お互いに、母国である日本を、心から愛していて、天皇陛下のおいになる、日本が負けるはずがない、と信じた人と、日本が負けて困っているから、はやく何らかの援助の手を、さしのべようという気持ちの人とが、お互いに争っていたのです。ですから、両方とも、もとは日本を愛する、共通の心を持っているのですが、愛する方法がちがうために、争いになっていたのです。当時の、ブラジルの日本人は、明治時代の気風をもっている、と言われていましたが、とてもマジメで、気骨があり、働き者であつたことは、間違いありません。私自身が、多くのブラジル人から、直接に、「日本人は、世界一、正直で、勤勉である」と言うことを、聞いています。これは、明治の末期に移民した、日本人の行動をみて、ブラジル人が日本人を、評価した言葉である、と思い、私は心から日本人の、移民の人々に感謝しました。

生長の家は、戦前からブラジルに、教えが伝わっていました。そのことも、生長の家が文書伝道である、という特色によるのであります。日本の本部から、講師が派遣されたのは、私がはじめてでありましたが、『生命の実相』は早くから、ブラジルにわたっていたのであります。そして、それを読んで、奇蹟的なことが起こり、熱心な信徒がいて、組織をつくり、私を呼んでくれたのであります。はじめて、ブラジルへ行きましたので、無我夢中でしたが、私が帰った後を、どうすればよいか、ということを考えながら、講演をつづけていました。とにかく、今後の、ブラジルの生長の家の運動の、中心になる人物をさがしました。そして、私は松田己代志先生を発見したのです。将来、ブラジルの中心となつて、光明化運動をする人はこの人だ、と信じて、日本へ来ることをすすめました。家族を残して、また金も自分でだして、日本へ来るぐらいなら、本物だと思い、そんな条件で、来ることをすすめたのです。これは、松田先生にとっては、まことに苦しい条件であつた、と思いますが、それを乗り越えて、日本にやってきました。そして、谷口雅春先生のお許しをえて、飛田給の道場にきて、私と一緒に日本の各地を、講話をしてまわりました。そして、日本の生長の家の運動を、いろいろとみてまわり、講話もしてもらいましたので、松田先生の講話を、私が聞くことができ、とてもスバライシことも、よくわかりました。一年間も練成道場に生活し、とても真面目に「行」をされ

ますし、人柄もすばらしいですから、多くの人から好かれます。谷口雅春先生の講習会にも、できるだけ多く、受講するようにしましたし、先生の前でも、話をしてもらいました。松田先生は、当時は、まだ四十一歳でしたが、それ以来、ブラジルの中心となって、今日の発展をもたらしてくれました。これは、ひとえに、松田先生の、スバラシイ人格によるものであります。

最初から、人類光明化運動として、人類全体を光明化し、世界を平和にする運動として、はじめられた生長の家ですから、ブラジルにこんなに生長の家が、発展してきたことは、本当に喜ばしいことであります。今度、松田先生の本が、発行されることは、まことにスバラシイことであると同時に、これは、ブラジルの生長の家の、発展史でもあり、世界への発展の最初の一ページでもあります。これから、ブラジルを拠点として、世界中に生長の家のみ教えが、ますます、伸び発展することを、心から祈ります。

昭和六十二年十二月九日

はし が き

この度、伝道本部の理事会の皆様より、ブラジルにおける生長の家光明化運動史の尊い記録になるのだから、私の自叙伝的なものを書いて欲しいとの度々の要請がありまして、自分の事を書く事はなにかおこがましいような気がしますし、学力とてない私のことでありますので大分考えたのでありますが、よく考えてみますと、渡伯以来五十六年、二十三歳で『生命の実相』にふれて以来、生長の家のみ教えで半生を生き通してきました。そしてみ教えは日系社会から伯人のあらゆる分野に拡がり、広いブラジルの全土に伸びて参りました。私が担当しております光明講座も到るところ超満員の盛況で喜んで頂いております。

キリスト教国であるブラジルで、その信者達がキリスト教を改めることなく、むしろ、キリストの教えが深く理解出来たといつて喜んで幸福生活を生きて下さる伯人信徒の姿を見る時、み教えの偉大さと、その実力をしみじみうれしく思うのであります。

そして、自分を振り返ってみて、ようこそここまで生き貫いてきた、という生き甲斐と、人生を克ち取ったという勝利感とに言い知れぬ喜びを感じているのであります。

生長の家の真理はこのように人生必勝の秘訣であります。

すので、この道を歩いてきた私の事がブラジル光明化史に残すなんらかの意義を考えまして三十年も昔の草稿を見つけ出して筆を執ってみました。その草稿は、昭和三十年、夢にまで見た尊師との会見で一応終わっています。が、その後のブラジルの光明化運動の輝かしい足跡は、折々に尊師にご報告申し上げました。そのうち「明窓淨机」欄でお取り上げ頂いた私の手紙を時系列にそって配することによって、補わせて頂きました。

もちろん現象的にはなんらの学力も才能もない私ですが真剣に実相無限力を念じつつ書きました。

この本を出すに当たり今日まで、否永遠に導き下さいますであろう尊師谷口雅春先生に、このようにお導き下さいました事を満腔（まんこう）の感謝を捧げます。

なお、出版に当たっては伝道本部企画・資料室の進藤次夫氏並びに生長の家本部国際部の皆様、日本教文社の皆さんになにかと大変お世話になりました事と、装幀には思い掛けない木暮光孝画伯のご愛念を頂きました事に深き感謝を捧げます。

一九八七年七月

松田己代志

ブラジル伝道の半生記 目次

本書によせて	徳久克己	4
はしがき		7

ふるさと 「火の国」		15
------------	--	----

父と母

転校

その周辺

兄の渡伯

夏の船旅

埋れ草

テンマ（小舟）

薮医者

さつまいもの弁

浣腸

憧れの国でみ教えを知る		46
-------------	--	----

門出

耕地へ

祖国よさらば

耕地の生活

航海

「友の奴め」

憧れの国

隣人を愛す

キリスト我れを救わず

大いなる体験

珍しい宗教

狂者癒ゆ

兄病床より起つ

三つの希望

『生命の実相』を読む

クラドール・ジャポネース

父の死と私の結婚

斉藤繁一氏のこと

法子が生れた

父の病氣治癒

兄の計画

父の死

不焼の山

お父さん！

青年会をつくる

見合い

法子往きて帰らず

おまかせ致します

断腸の賦

私を助けてもらいたい

勝ち組・負け組

130

「二寸来い！」

乱れゆくコロニア

「新生」誌をつくる

流言蜚語

松田さん頼むよ

練成道場のはじまり

第二次大戦とコロニア

「日本は勝っています！」

棄民とは何事ですか

「陸」誌と私

非生産物には金は

使いたくない

宮川大尉

色の黒い日本人

本部との連絡

国のちがいか

二つ目の希望

団体の解散

全伯信徒連合会成る

暁の祈願

尊師にまみゆる

187

本部からの手紙

青年の練成

谷口雅春先生の御親書

決意したら金は出る

宮本由太郎氏のこと

「死んでも帰らない！」

機上の合掌

祈っていたぞ

不滅の実相

ああ、谷口雅春先生

それはちょうど好都合だ

俺が勝ったぞ

母待つ故郷へ

付記・青年道場ことはじめ

尊師への手紙

年表

2
2
1

2
2
7

2
6
9



長崎県

雲仙天草国定公園

●熊本市

天草郡

熊本県

●八代市

上島

雲仙天草国立公園

●御所浦
御所浦島

不知火

●水俣市

ブラジル、サンパウロ州周辺の地図



ブラジル伝道の半生記

ふるさと「火の国」

父と母

私は九州の南、永劫に火を吐く大阿蘇（アソー火山）、久遠の神秘に包まれてあやしく燃える不知火（しらぬい）、御神火（ごじんか）の国と古人が言った熊本の、その中でも、頼山陽（らいさんよう）（詩人）が「雲か山か呉か越か」と覚（ほ）め讃（たた）えて詩（うた）った国立公園天草島、寛永（かんえい）の昔、踏絵の厳しい政治に耐えかねてたった、紅顔の美少年、天草四郎時貞があわれ、はかなくも宗門（キリスト教）の花と散った殉教の哀しい歴史を秘める島、その天草群島の中の御所浦島（ごしようらしま）という、まわりが七里ある小さな島に生れた。この島は昔、景行（こう）天皇が行幸遊ばされたという伝説も伝えられていて、小学校の校歌にも

今から昔二千年

御幸（みゆき）たまひし 景行の

実（げ）にもゆかしき わが里は……

と歌っている。今はこの小さな島にも文化の光りが点ぜられて、電燈は村の隅々（すみずみ）まで行き渡り、大きな村には水道が引かれ、自動車道路が作られて、都会となんら変わりない生活に恵まれているが、私の小さい時分まではそれこそ絶海の孤島のようなものであった。

私の家は百姓であつた。父は養子で、生家は村でも旧家であつたらしいが、私が青年になりかける時分から没落して鹿児島県の米之津（こめのつ）という町に引越してしまった。ここで私は八人兄弟の七人目の子として生れ、土にまみれて大きくなったのであるが、小さい頃の記憶はあまりない。ただ私の家の上に大きな屋敷があり、大きな家があつたが、その家の人達がどこかへ引越して、私の一家がそこに移り住むようになった時、とてもうれしく思い、誇らしげに思つた事を憶えている。その家は今もあつて、私の長兄が後を継いでいるが、屋敷は広く、大きな杉の木が二本夫婦（めおと）のように裏庭の土手に高くそびえ、椿の大本が何本と繁り、その間から真夏にも滑（か）れた事のない清水がコンコンと湧いて、その水を二カ所に溜めて上のを飲料に、下のを洗いに使うようにしてあつた。真夏炎天下に汗水流して働いて来ても、その泉の所に行くとヒヤツとして一時に暑さがなくなり、スーツとした生き返つたような快い気持ちになれたものである。家の前には大きな梅の木があり、柿、ザボンの大きな果樹もたくさんあつたし、椿も

多かったので五月椿の花の咲く頃は、裏や表の椿の木に目白がたくさん集まって来て盛んに囀（さえず）っていた。

家の前はすぐ海で、入江になっていたので波は静かだし、沖には小さな島が点在し、その島々には枝ぶりの美しい松がその姿をうつして美しく、お百姓や漁師の舟が朝夕に出入りして、まことに夢のような絵のような自然の眺めであつた。今は国立公園に指定されて、天草松島と呼ばれている。

私の父は若い時分は大変体も丈夫で、村相撲などもやつたらしく、子供の教育にも厳格であつたそうである。兄達は囲炉裏（いろり）の火箸が曲がるほどに叩かれて大きくなつたという事を言っていたが、私が生れた頃は体が弱くて、常に病気になつていたので、「自分の体が動かぬのに子供にだけやかましく言つても駄目だ」と言つてきつい教育もしなかつたし、あまり口で言う事もなかった。時々間違つた事をする、「善い事と悪い事とは自分で知るようにならなければいかん」と言つていた。私はこの父が大変好きだつた。

たまさか父の体の具合がよく、畑に行つて仕事をする時があると、私はいつもついて行つてなにか手伝うのが楽しみだつた。そんな時、父は夜、囲炉裏を囲んで皆んなの前で私を賞（ほ）めてくれた。

賞められると特にうれしくなり、また手伝いたくなつ

たのである。

私の母もまたやさしかったが、なかなか強いものをもっていたようである。私のすぐ上の兄と姉とは私の幼い頃死んでしまい、残った六人兄妹も、長兄がただ独り家に残っただけで、後は台湾に二人、ブラジルに三人来てしまったのだが、可愛い子供を次から次へと遠い所へ旅立たせても、仕方がなかったとはいえ、その子供達と遠く離れねばならなかった母はつらかったのではないかと思うのであるが、子供を信じて遠くへ離れた母は強かったと思う。往年、二十二年ぶりで日本に帰った時、母は私に言った事があつた。「よく余所（よそ）の人に、『ばあさんは子供らを遠くへやってしまつてあきらめのよい人じゃ』と言われるけれど、仕方がないもんなア」と。この母から私は子供の頃よく「使いが上手じゃ、使いが早い」と言つて賞（ほ）められたものである。私は小さい時、父からも、母からも賞められた記憶しか残っていない。今、生長の家に導かれ、人間の神性を教えられ、賞める教育がいかにこの神性、仏性を伸ばすのに大きな力であるかを知る時、幼時の父と母とをしみじみ思うのである。

その周辺

私は祖母とすぐ上の姉を知らない。私が赤ちゃんの時に死んだらしいのである。私が物心ついてから、祖父が

死んだ。今まで生きていたのが物言わなくなつて、頭を
そられて、棺桶の中に移される時、皆んな泣いていた。泣
いている父母や兄たちや、多くの親類の人達の顔を見て
いると自分も泣いていた。なにも分らずに泣いていたよ
うである。

その後間もなく、私のすぐ上の兄が死んだ。

学校では成績がよくて、一年生を級長で通して二年生
になつてから死んだのである。学芸会で朗読をして、そ
れを聞いていた母が、兄の朗読が終わつた時、「周囲の人
達が『あの子はどこの子だろうか』と言つてささやいて
いたので、鼻が高かつた」という事を言つていたが、そ
の兄が忽然（こつぜん）と死んでいった。兄の亡きがら
を見つめながら、日独戦争から帰つたばかりの長兄が、
なにか学用品をとられたとか、なくしたとかいうので、
きつく怒つていた時の小さな兄のさびしい、悲しそうな
姿が目にとらつて、それが思い出されてさびしかった。
そのように家に不幸が続いていたので信仰心が自然強
かつたのかもしれないが、私の父母は大変な信仰家だつ
た。朝晩の毎日の仏前の読経は一度もやめた事がなかつ
た。朝は顔を洗えば仏前に線香やお燈明をあげ、新しい
お水をかえ、神前には拍手（かしわで）を打つて拝み、仏
前では鉦（かね）を叩きながら読経してからでない朝
の食事はとらなかつた。夜もまた同じ、仏前のおつとめ
が終わらなければ夜の食事をとらぬのである。私はその

父と母との後に呼ばれて小さい手を合わさせられた。大きな兄たちはやらなかった。父は真宗で、母は浄土宗だった。

なにか他家から珍しいものやお土産など頂くと、必ず仏壇に供えてからでないかと私達は頂けなかったし、親、兄弟や、近しい人、先祖の命日は精進と言つて生ぐさい肉や魚は絶対に食べなかった。私達子供もそれをさせられた。ブラジルに来て、お葬式にも肉が出るのを見て、しばらくは変な気持ちで仕方がなかったものである。

私の家は貧乏で、どうしたのか、山林も畑も、屋敷も、みんな借金の抵当に入ってしまったそうである。でも、家は貧しかったけれども、いろんな不幸が続きながらも、父はなに一つ愚痴（ぐち）も言わなかったし、母は一日、十五日の産土（うぶすな）神社へのお詣（まい）りは欠かさなかった。だから、家庭の中は貧しいながら、和やかだった。特に父はどの宗教の坊さんが来ても説教を聞きに行った。そうして、どの宗教の教えも悪くないから、よく聞かねはならんと、母とよく話していたのを憶えている。

また、よく田舎を廻つて遍路の人や、行商人が来ると、父も呼び止めて宿を貸してやった。家は広かったのでお客様があつても因る事はなかった。あまりに父母が深切に旅人をもてなすので、何日も何日も家族のように泊り込んで、いよいよ出て行く時は泣いて行く人もあつた。

今も思い出すが、浄土宗の開祖法然上人の亡くなられ

た日を毎年お通夜をして供養する晩の事だった。母は、人間は神仏を信仰する事や、決して人の好かない事をするものではないという話を次のように聞かせてくれた。

それは私の祖母が亡くなつてから間もなくの事である。ちようど私達の村の墓場から真向いに見える隣りの村に私の叔母が住んでいた。その叔母が、ある日母の所へやつて来て「うちの母の墓から幽霊が出るといふ噂があるので、そんな事があるかと思つて、夕べ氣をつけて見ていると、本当に、母の墓のあたりにポツカリと青い火が出たかと思うと、それがしばらくユラユラ揺れていたが、ポツと消えたかと思うと途方もない所にポカツともつて、またユラユラ揺れていたが、母は迷っているのじゃなからうか」と、私の母に語つたというのである。氣の強い母は、そんな事があるものかと次の晩そうつと調べに行つて見ると、あまり性(たち)のよくない家があつて、その人が提燈(ちようちん)に里芋の葉をかぶせて、それを祖母の墓のところでユラユラゆすつて見せたり、ポツと消して途方もない所で火をつけたりして、いたずらをしていたという事が分つたそうであるが、その人が死ぬ時、砂糖をたく釜小屋のはりに吊下(つりさが)つて死んでいたそうだと言つて、決して人が知らぬからといって悪い事をする、このような報いを受けねばならんと話して聞かせてくれていた。恐い事は聞きたがるのが子供心、目を丸くして半分こわがりながら、そんな事があるものかなア、と思つたりして聞いたもの

である。

私の信仰心は、こうして父母から子供心にうえ付けられていたようである。

夏の船旅

私の小学校は家から一キロほど離れた隣り村にあつた。御所浦村大浦分校と言つていた。一年から四年までこの学校で学び、五・六年、高等科は一里ほど離れた本校に通わねばならなかつた。

学校の先生は二人で、福岡勝一という太つた先生が一・二年を担当し、花里貢という先生が三・四年を担当していた。二人の先生とも僕は好きで良い先生だった。花里先生は神主もしておられて、村々のお祭りには必ずお出になつて、神主の帽子と衣裳をつけて、祝詞（のりと）を上げておられた。

隣り村ではあつたが、僕の家からあまり離れていない所に木下正雄という同級生がいた。やはり貧乏な家だったが、この木下なかなか勉強がよく出来て、一年から四年までとうとう級長で押し通した。この木下がある時、福岡先生と本気になつて泣きながら喧嘩をしていた。私はそれを遠くの方で見っていた。近くで先生と生徒とが喧嘩しているのを見たくもなかつたし、その喧嘩の原因を知ろうとも思わなかつた。でも子供と本気になつて喧嘩している先生もおかしいと思つたが、先生に泣きながら

食いついて喧嘩している木下を勇気があるなアと思ったが、素晴らしいとは思わなかった。私はこの木下と仲のいい友達であつたがどうにかして学校の成績を追い越してやろうと思つた事もあつたが、どうしても追い越す事が出来なかつた。

その時分、私の長兄は三十トン積みほどの運送船をもつていた。他に船員を雇わず、夫婦で県内の港や、鹿児島県、福岡県等の港から港へ荷物を運んでいた。

二年生の時の夏休みに、私は子守にといつて、その船と一緒に連れて行かれた事があつた。海には馴れていたのに、恐いとは思わなかつたが、明けても暮れても小さい子供を負わされるのには閉口した。時々背中でおしっこや、うんこを流される時の気持ちの悪い事は本当にいやだつた。時折、あまりいやな時は罪もない赤ちゃんのお尻をソーツとつねつて、静かにしている赤ちゃんを泣かせては、赤ちゃんを背中から下してもらつたりした。

その夏の船旅は、熊本県の一番南にある日本窒素肥料株式会社のある水俣（みなまた）という町から、福岡県の三池炭鉱の坑木を積みに行った。水俣の町には、町の中の中央を水俣川が流れていて、その川に大きな木の橋がかかつていた。その橋に夜になるとひとりで燈がつき、朝になるとひとりで消えるのであつた。それが都会に出た事のなかつた私には不思議でならなかつた。馬車や牛車ならなにも不思議には思わなかつたが、大きな

車がひとりで走っているのも不思議だった。それは自動車であり、橋の灯りは電燈だった。電気のない島国の子は、電気の知識がなかったので、行った先々の町々で見る物、聞く物が皆んな珍しかった。そうして町に住む人達はいいなアと思った。

今の運送船はほとんど機械で走っているが、その時分はほとんど帆船で、時たま小鰯（こいわし）の捕れる頃鹿児島県の鰹（かつお）船がカツオ釣りの餌にする小鰯を買いに来る事があったが、その鰹船は大きな機械だったので珍しかった。

帆船船は風の力で走るのので、風がなかったり、あまり強すぎて海が荒れたりすると、港に何日も逗留（とうりゆう）しなければならなかったりして、日数がかかるのであった。また、荷を積んで行った先で、都合わるく帰りの荷がなかったりすると荷を下しても、帰りの荷を見つけたりするの何日もかかる事があった。私が子守に行った時、そのような事があって夏休みが終わっても村に帰れず何日も学校を欠席せねばならなかった。私は学校が好きであつたので、気が気でなかったが、どうにもならなかった。

その年の卒業式の時、福岡先生が私にソーツと、「君が欠席しなかったら、今年は級長で進級出来たのだが残念だった」とおっしゃった。先生より私の方が残念で、くやしくて仕方がなかった。

テンマ（小舟）

私の家のすぐ隣りに小さなテンマ（小舟のこと）があつた。大人が力で漕（こ）ぐとへさきの方が高くなつて、白波立てて走るのを見ていても気持ちがよくつた。それを見る度に、子供の私はいつも乗つて漕（こ）いでみたいなアと思つたのだつた。

私は学校から帰ると、畑の手伝いをさせられるか、子守をさせられた。その日は子守だつた。

夕方になつて家に帰つて子供を下して外へ出てみると、ちようどそのテンマが岸につないであつた。海は静かだつたので、私のいつも心の底で思い込んでいた願ひに矢も楯もたまらなくなつて走つて行つて、私は持ち主にも誰にも無断で飛び乗つた。少しは怒られはしないかという不安もあつたが、思い切つて沖の方へ漕ぎ出してみた。スースーと軽く走るので気持ちがよくつた。「心の中の切なる願ひは必ず形に現れる」と教えて頂いているが、子供の切なる願ひはとうとう実現したのである。私は喜びで一杯だつた。得意になつて舷（ふなべり）に足を踏みかけて、力一杯漕いでみた。白い泡が小舟の両側に波打つて流れて行く。愉快ともなんとも例えようもなかった。ところが、その喜びも束の間、プツツと音がしたかと思うと私は仰向けにドブツと大きな音を立てて海の中に放り込まれた。舷の「ろ」をつないである綱が切れたのである。テンマは力で漕いでいたその惰力で遠くへ流

れて行つてしまふし、私は子守した重い着物を着ていたので、少しは泳げる私であつたから手をバチャバチャさせて泳いでみたけれども、着ている着物はぬれていよいよ重くなつてどうにもならないのである。それに溺れる、死ぬと思うと、もう必死になつてもがき、大きな声で浮きつ沈みつ助けを呼んだらしいのであるが、私の力は精も根も尽きはてて、両手をあげながら海の底へ沈んでいった。私はそれを憶えている。その時はもう苦しいとは思わなかつた。妙な諦めのような、俺はこれで死ぬのだな、と思ひながら沈んでいった。

地獄の何丁目を歩いていたらうか。どこからか、誰かが、かすかに私の名を呼んでいる。誰だろう。どこかしらん、それはかすかではあるが懐しい声であつた。私は深い眠りから覚めて重い瞼（まぶた）を開けた。すると姉が泣きながら大きな声で私の名を呼んでいたのを知つた。ぼうつと眼に映るのは私の家であつた。もう夜になつてゐるらしく外は暗かつた。父も母も泣いてゐた。家には隣り近所の人が一杯いた。そうしてみんなが、「ああよかった、よかった。生き返つた」と言つて喜んでおられた。私は瓶（かめ）の上のような所から、静かに床に移された。私は妙に体がだるくて、また静かに眠つた。

幾時間経つたか知らぬが、私は目を覺ましていた。モ―ローたる意識が段々ハッキリしてきた。もうこれで死ぬと思ひながら、海の底に沈んでいった私

は、今誰かに助けられて、一時気を失っていたのが幸にも甦（よみがえ）ったのであるという事が解った。

後で元気づいてから、元氣の良かった姉からさんざん怒られながら、助けられた次第を教えて貰（もら）った。隣り村のお百姓の荒木さんが船で畑に行つて夕方の帰り、船を港に入れてともずなを結ぼうとしていると「助けてくれー、助けてくれー」という声が聞えてきたので、荒木さんはともずなを結ぶ手をやめて、今頃、なんだろうと思つて沖の方を見ると、主のなさそうな小舟が流れているので、きつと誰かあの小舟に乗った人が溺れているに違いないと思い、結びかけていたともずなを再びほどこいて、碇（いかり）をあげて小舟の方へ船を漕いで行つた。するとその小舟より数メートルの手前に両手を上にあげながら沈んでいく私の姿が目にと止つて、荒木さんは早速はだかになって飛び込んで助けて下さつたのである。でもその時既に私は人事不省であつたので、私の家に連れ込んで人工呼吸やなにかで大騒動をした甲斐があつて、息を吹き返して助かつたというのである。

人間の生死というものは、不思議なものの手にゆだねられているのであろうか。それから、もう七十年近くも私は生きているが、もしあの時、荒木さんがちょうど畑から帰っていないかつたら、また例え来合せていて、助けに来て頂いても、ちょうど私が沈んでいきつつある所へ、その上に来合せず、違つた所を探して下さつたら私はこの世にこうして生きながらえる事は出来なかつたである

うと思う時、そうしてこのような「人間神の子」の尊いみ教えにふれる事が出来ず、人類光明化の聖なる運動に参加するという悦びと、生き甲斐を味わう事が出来なかったであろうと思う時、我々は我々の生の背後に大いなる力を感じずにはおれないし、与えられたこの尊い生命を無駄にしたり、浪費したりする事なく、人類のため、社会のため、より偉大なるもののために捧げる尊い生き方に努めなければならぬと思う。

往年、私は在伯二十二年ぶりで祖国を訪れた時、私を助けて下さった荒木さんも年老いて静かに余生を送っておられたので、僅かばかりの手土産を持って御礼に行く、当時を思い起こして「そうだったか、そうだったか、でも忘れずによく憶えていてくれてうれしい」と、大変悦んで頂いたが、二度目の訪日の折はもう他界しておられた。

さつまいもの弁当

四年を卒業した私は御所浦村の本校に移った。朝早くに起こされて、さつまいもの弁当を片手に、母に見送られて山坂越えて通学した。母は姿が見えなくなるまで田圃（たんぼ）の先から見送ってくれていた。この文章を書きながら当時の母の姿が臉（まぶた）に浮んでくる。そうして、西条八十先生の「母を讃ふ」という詩を想い出す。その詩は次のように詩（うた）う。

我が学びに通う日は

星影あはき あかつきの

くりやに小さき 火おこして

つくり給いし 弁当を

本校へは多勢の生徒が賑やかに組をなしてはしやぎながら通学したが、「類は類をもつて集まる」という真理がこの少年達の世界にもはたらいて、自ら好きな者同士が集まって、その中に親分のような者が出来て、隣り村では六年生の白倉幸夫というのが総大将だった。私達の村では関安昭という、私と同級の独眼の友が親分だった。この二人が大将になって、学校の帰りにはよく喧嘩をしていた。私達の村は小さかったので、勢いも少なかったが関君は負けなかった。私は喧嘩や多勢の人中に混じるのが嫌いだったので、その仲間には入らず、気の合った二人の友と、見晴らしの良い草原や大きな松の木蔭で作文を作ったり、図画を描いたりするのが楽しみだった。

私は作文、図画、習字、国語、歴史等が好きで、一番嫌いだったのは体操と唱歌だった。その中でも唱歌はいよいよ嫌いだった。大きく口を開けて、アー、エー、イー、オー、ウーと、発声の稽古などがいやで、それに先生が若い女の先生だったので、馬鹿にして習いに行かなかった。だから通信簿の体操と唱歌はいつも乙だった。丙を取ったこともある。

ある時、唱歌嫌いの二、三の友と相談して、廊下にくるを塗り、知らぬ顔して先生を迎えに行き、からかうと

先生は怒って追って来てろうが塗ってあるとは御存じないので、ズデンドウとすべって転ばれ、いよいよかんかに怒らせてしまった事がある。その時の成績が丙だった。

五年も終わらんとする頃のある日だった。ある社会教育家の講演会が学校で行われた。講堂は教室を仕切る大きな戸を取りはずして、二教室を一つにして、上級生・全幹部、父兄の人達と一緒に聴いた。今、その内容は忘れてしまったが、その講師はたしか親心の事を語っていたように思う。

壇上で泣きながら話した。生徒達も母親達もみんな泣いていた。私も無論泣いていた。私はそれまで、家が貧乏なので大臣とか大将とか、偉い人にはなれないと思っていたし、なろうとも思わなかった。でもその時の話を聞いて、泣きながら話している講師が途方もない偉い人のように思えてならなかった。自分もあんな人になって、人から喜ばれるような人間になりたいものだアと思った。これほど多勢の中で話しながら泣いている。そうして皆んな泣くほどの感動を与えている、なんと美しい光景だろうと思ひ、その講師のような人を真剣に憧れるようになった。それまで希望などなかったように思うが、その事があつてから私の心にあのよう人間になりたいと、切なる希（ねが）いが力強く芽はえてきたように思う。

思えばこの感じやすい少年の日に受けた感激が、私の

潜在意識に強くうえ付けられ、私の今日までの人生をひそかに力強く支配していたのだ、と『生命の実相』に教えられ、幼少年時代のやわらかい精神に、大いなる感動を与える教育をする事が、いかにその人の一生を支配するものであるかという事を思うのである。

転 校

小学校六年を卒業した私は、貧しい中から高等科に入れて頂いた。勉強したい気持ち一杯だったのでうれしかった。

その当時、三人の兄達はそれぞれ自分の志すところに向ってバラバラになっていた。長兄が家にいて農業と運送業とを兼ねてやり、次兄は水俣町で理髪店を開き、三番目の兄は遠く台湾に渡って鉄道局に奉職していた。その二番目の兄から、学校に出してやるから私をよこすようにとの話が父にあつて、私は高等科へ入学後間もなく、懐しい田舎の学校から水俣の町の学校へ転校した。初めて親の元を離れるのも、住み馴れた田舎と別れ、友達と別れるのも淋しい思いだったが、町の学校で勉強出来るという事で私はうれしかった。

水俣の町は、幼時兄の船で子守に連れて来られたことのある町なので懐しかった。兄の家は栄町にあつたが、学校は陣の内町の山手にあつた。素晴らしい大きな学校で、がっちりした校門を入ると植込みがあり、二階建て

の大きな校舎が幾棟もあった。田舎の貧弱な学校に比べて大きく立派なのに驚きもし、内心得意でもあった。

私の教室は、校門を入ると一番最初の校舎の二階だった。生徒が多いので一教室に五十人位でA・B・Cと分れていた。私はA室だった。内気な私はここでも生徒に馴れるのがなかなか手間取ったし、友達も出来なかった。相変わらず静かに一人登校し、一人静かに帰っていた。この学校には実科女学校と、実業補習学校とが、別棟ではあったが同じ校庭に並んで建てられていた。立派な制服を着て通学するそれらの上級学校生徒のサッソウたる姿は、私達の向学心をいよいよそそったものである。

テニスが好きだった私は、放課後校庭内のテニスコートで、テニスをやっている女学校の生徒達の中に友達と割り込んで行ってコートを占領し、テニスをして遊ぶのがなによりの楽しみだった。

こうして楽しい学校生活が始まったけれども、その時分兄はまだ独身で店をもっていたので毎朝私は早く起きて店を掃除し、御飯を炊き、味噌汁をこしらえてから、自分一人で御飯を食べ弁当をこしらえて学校に通った。味噌汁はスジ向いに豆腐屋があつたので、豆腐を買って来て簡単に作った。兄は商売上夜は遅く朝も早かった。学校から帰ると、汚れた食器類を洗い、また夕飯を炊いて、御飯を食べたらあと片付けをし、自分の勉強をするというのが毎日の日課だった。学校には出して貰ったが、なんの事はない女房役を仰せつかったようなものだった。

夏はそうでもなかったが、冬の炊事はいやだった。夏でも兄は扇風機をもっていなかったので、暑い夜など勉強を止めてウチワでお客さんをあおいであげたり、蚊を追ったりして手伝わねばならなかった。ちょうど店の真向いが料理屋で、あやしげな女たちが夜ともなれはものすごい厚化粧で化けて出て、媚（こ）びを、笑いを売ってあやしげな男たちにジャレていた。そうして、時折そのような所を遊んで歩く男たちの間で喧嘩が夜遅くある事があった。妙な世界があるものだと思った事もある。

高等科二年に進んでから兄にお嫁さんがきたので、私の炊事夫修業は卒業出来たし、店も料理屋のある所から、製材所の前に移転し、おまけに二階だったので、私は二階の一室で静かに勉強する事が出来た。そうして、高等科を出たら中学に行きたいものだと考えていた。

兄の渡伯

その時分、当時ブラジルで成功しておられた農田源行氏が帰国して、ブラジル事情の講演をして歩いておられた。兄はその講演を聞いてブラジル渡航の決心をしていた。もう自立の生活をしていた兄が、なぜブラジル渡航を思い立ったかというのには、一つの理由があった。それは農田氏の講演を聞いてブラジルは金が儲かるところと解ったから、その金儲けに行きたいというのが原因であるが、その金はなんのために欲しかったかというのと、

父が貧乏して田畑もほとんど抵当に入っているような有様だったので、ある時、ある金持ちに父が金借りに行つた時、その金持ちが、「金はあるがお前らに貸す金はない」と断わられた事があつた。きかぬ気の兄はそれが癪（しゃく）にさわって「金がないばかりにこのような侮辱を受けるのか、おのれいつの日か金を儲けて、お金で仇を討つてやる」と思っていたところに、ブラジルの金儲けの話を聞いて一度にブラジル渡航の決意をしたのであつた。



兄・松田大二郎氏

当時、ブラジル渡航は十五歳以上の三人家族でなければ行けなかったの
で、子供のない兄は妹を
連れて昭和二年博多丸で
渡伯した。私は兄があま
り好きでなかったし、日
本でなんとか勉強したかつたので、高等科二年は卒業し
たけれども一緒に行かなかつたのである。

埋 れ 草

高等科を卒業した私は中学へ行きたかつたけれども、兄はブラジル渡航の準備をするし、実家では出してくれる力はないので、やむなく故郷へ帰って来た。都会に比べて田舎はなにかに不便であり、つまらないとは思つた

が、父母の元を離れて再びその膝元へ帰ってみれば、やはりやさしく暖いものを感じるのであった。父母と働く野良仕事も苦にはならなかった。菜種（なたね）に舞う蝶も、梢（こずえ）に囀（さえず）る小鳥も長閑（のどか）だったし、入江の小舟も美しかった。ただ、もっと知りたい、学びたい心の疼（うず）きを癒してくれるものがないのがたまらない淋しさだった。田舎に帰った私は農事を手伝ったり、網漁の仲間に出たり、あるいは魚の仲買船に乗ったり、あるいは帆船の運送船の船員になったりして働いた。少しでもお金を作って、もう大分体の弱っている父母を楽しませるのはうれしかった。

村の青年会に入って青年会の改革を叫んで修養会を始めた。村の青年会は小学校を卒業すると、多くが大阪の紡績会社の女工に勧められて稼ぎに行き小金を送るので、大阪へ大阪へと出て行ってしまつて、それが帰って来ると、青い顔して労働をいとい、外見を飾り、田舎の青年達を小馬鹿にするというような悪い傾向があり、知識を博め、精神の修養をするという事にはほとんど無関心の状態に

あつたので、そのような女子青年の覚醒運動を始めて戸別訪問をし、夜学等を勧め、帰りは青年幹部が責任をもつて送り届けるというような事等したりした。ちょうど私の隣家に、同じ松田の姓の、私より一つ年上と年下の青年がいて、大変仲良く兄弟のようになしていたので、この二人とよく相談して力強く押していったので、私達の発言は重視され、会はほとんど私達の言う通りになった。こうして田舎に埋れること三年、私が十九の年、大阪の紡績女工として働いていた山下江津代という娘が帰村して来た。当時彼女は十六歳だった。眼のパツチリとして落谷虹児の描く少女絵のような、うるんだ目差しの子であつた。ある雨の日、私は友達とその少女の家に遊びに行つた事がある。彼女は私達に「向上」という小さな雑誌を見せてくれた。希望社の後藤静香先生のものであつた。それには次のような短い詩のようなものが書かれてあつた。

第一歩

十里の旅の第一歩

百里の旅の第一歩

同じ一歩でも覚悟が違ふ。

三笠山に登る第一歩

富士山に登る第一歩

同じ一歩でも覚悟が違ふ。

どこまで行く積りか？

どこまで登る積りか？

目標が其の日を支配する。

今のままで

お前は確かに生れた。

何の為に生れたのか。

お前は確かに生きて居る。

何を為せばよいのか。

お前は確かに死ぬ。

今のままで死んでよいのか。

等の短かい力強い言葉が若い魂にグイグイ喰い入るような迫力で書かれてある。なにか魂の糧を求め、しかもそれに飢え切っていた私は、この小冊子の一句一句がたまらなく気に入った。著者は後藤静香と書いてあった。私は彼女に頼んでしばらくその雑誌を借りて、ほとんどその小冊子を書き移してしまった。そして言うに言えない魂の悦びを感じ、この人の所に飛んで行って教えを受けたいものと切に考えた。その小冊子を彼女に返しに行った時、この「向上」誌を中心に彼女といろいろ語り合った。会社はこの希望社の講師がお出になってお話を聞いた事、グループがあつて、あるいは講師を中心に、あるいは「向上」誌を中心にお互い魂の向上のために語り合う事等、彼女は詳しく話してくれた。そうしてこの「向上」誌が縁となつて、彼女と私とは度々語り合う機会が

増えていった。彼女の境遇は二人の親がありながら、その父とも、母とも共に暮す事が許されず、伯父なる人と共に生きねばならぬ寂しい境遇の子であったが、魂は実に純で美しかった。都会の生活をしてきても、毫（こ）うも高ぶる事なく、境遇がさせるのか、やはり魂の向上を求めてひたむきな彼女であった。私と彼女とはやがて相思の仲となり、はるか未来の夢を語りつつ将来を誓う間になつてしまったのである。

その時分、台湾で結婚し、既に部長級に昇格していたすぐ上の兄が夫婦で面会に帰郷し、私が田舎でくすぶっているのを見て、台湾に来るように、そうして今からでも遅くないから勉強して鉄道局に入るようにと勧めてくれ、父も許してくれたので私は雀躍（こおどり）して喜んで台湾行きの準備を始めた。まず鉄道員養成講義録と井上英語講義録とを取り寄せて勉強を始めた。未来への明るい希望が輝いている、傭員、雇員、別任官、助役、駅長、恩給、しかもその希望実現への大きな、優しい力となる彼女、私の心は一度に春が来たような喜びだった。

兄は今年年を取つてお正月に来るようにと一週間の台湾航路の旅程をくわしく教えて台湾に帰った。私がこうして喜びに満たされ、希望に輝いて毎日を過ごしていたある日、ブラジルに渡っていた兄からも父のもとへ手紙が届いた。内容はブラジルはお金が儲かるが、人手が少ないから思うようにいかぬ、ここに少しばかり金が出来たから送金するから、この金で借金を払い、弟をブラジ

ルによこして貰いたい、と言うのであった。

そうして当時の金で二千数百円のお金が届けられたのである。父も母も大変喜んで、でも台湾に行くようにもなっているし、ブラジルからも来いというのでどちらにするか、お前の行きたい方へ行くがよいと父は言ってくれた。私は台湾へ行きたかった。台湾の兄は優しい兄だったので、自分の事だけ考えると台湾の方がよかったけれども、父や家の事を思うと早くお金の儲かるブラジルがよいと思って、珍しい外国に行けるという好奇心も手伝って、せつかく台湾行きの準備をしていたのも断念し、ブラジル行きに決めた。どちらにしても若い魂は喜びに満ちていた。

薮 医 者

私のブラジル渡航の手続きは呼び寄せであったため案内外に進んで行った。健康診断を受ける必要があったので、私は私が小学校四年生の時、臨時に教えて頂いた事のある多少遠い親戚に当たる森光徳さんが当時大学を卒業して、水俣町の赤星病院の副院長をしておられて、大変評判が良かったので少し恥ずかしかったが診てもらった。結果は完全無病であった。

いろんな渡航手続きも完了し、渡航日も決まっていよいよ出発を待つばかりになっていたある日、畑の手伝いに行っていると妙に体が熱っぽく、だるくなるので少し

変だなアと思うながらも、俺が病気になるものか、もうすぐ海外旅行だ、ヘナヘナしていられるかと、自分自分の心に言いきかせてみるのだが、どうしても仕事をする氣力がなくなつて、仕方なしに家に帰つて蒲団を被つて寝てしまった。すると、体がポカポカ熱くなつて氣も遠くなるような氣がするのであつた。あまり体の丈夫でなかつた父は、毎日家でブラブラ遊んでいたが、私が体の具合が悪いと言つて寝込んだので心配して、自分で隣り村のお医者さんと呼ばびに行つてくれた。

しばらく経つて父に案内されてお出になつたお医者さんは聴診器を耳にさし込んでいろいろ計つてみたり、体温計を脇の下に差し込んでみたりしていたが、静かに私の蒲団をかけながら心配そうに側で見ていた父に向つて、「コレは腸チブスです。熱が四十二度もあります。もう大分進んでおりますから私の手には負えません。どこへなりと貴方のお好みの所に入院させられて早く治療をせられなければいけません」と語っている。私はそれを聞きながら、ブラジル行きがことが目前に迫まっているので、「そんな事があるものか」と心の中で言っていた。父は大變驚いて、しばらく考えていたが、「私たちの現在の有様ではどこへといつて入院さして治療してやるだけの力がございませんから、どうかお願いでございます。死ぬるも生きるも先生におまかせしますから、先生のお力で治して頂けませんでしょうか」と言つて、腰をかがめて願つていた。首をかしげながら考えていたお医者さんが、

「それでは私の出来るだけの力を尽してみましよう」と引受けて、また明日来るからと言つて歸つて行つた。それからこのまじめな田舎の老医は降つても照つても毎日同じ時間に通つて来て、「すぐよくなる。ブラジルに行く日までは必ず治るから」と言つて診察して歸つて行くのだが、私の病気はよくなるどころか、連日のものすごい熱のため、だんだん私の体は衰弱していくばかりだった。ブラジル行きの船が神戸を出帆する日が段々近づいてくるので気が気でなかった。お医者さんが歸つた後で私はいつもブリブリ八ツ当たりに憤つた。

「あの藪医者、治る治ると言つてひとつも治りやしない。もうあと幾日もないのに」ということを繰り返していた。「治る治る」と言うことがなにか自分の無力さを言い訳しているようでもあり、気なぐさみに言っているようでもあり、腹が立つて仕方がなかった。黙つて一所懸命看護してくれていた父がひとり言のように、「お前がそんなに憤るから治らんのだ、あのようにして毎日毎日通つて下さる事に少しは感謝するような気持ちでなければいかん」と言うけれど、それはそうかもしれないが、私は治りさえすればそれが有難いのだから病気が治らないとお医者さんの有難さはわかるどころか、下手だから治し切らないのだと不平にばかり思うのだった。自分の事だけしか考える事の出来ない人間はまことに哀れである。

浣腸

ついこの頃の健康診断を受けた時まで完全に健康であつたのに、どうしてこんな病氣を掴（つか）んだものであろうかと、私は病癒えぬままに病床の中で考えてみた。その時分、アチコチに腸チブスが流行して病んでいるとか、死んだという話は聞いていたし、私の家の前の三十歳位の青年が病んでいた事も知っていたが、病氣など私には縁遠い世界の事のように考えられていた。何月何日には神戸から大きな船に乗つて外国旅行への出発だ、海また海の幾日かを過ごしてお隣りの支那の国香港、南の夢の国シンガポール、インド洋を渡つてダーバン、ケープタウン、そして大西洋の波を乗り越えて日本の真裏側のブラジル、そこにはバナナが実り、コーヒーが薫る、そこで一所懸命働いて十年、シツカリ儲けて洋装いかめしく故郷に錦を飾る。どんなに村人が驚くことか、どんなに彼女が喜んでくれるか等々、未来への希望の虜（とりこ）にされている者には、病氣の事など考える暇もなかったし、別世界の出来事のようにしか考えられなかったのに、思い掛けなくもはるかの国の出来事が自分に降りかかつてきてしまった。しかもそれはあまりに痛ましい姿であつて、あの輝かしい希望を、夢をその実現間近にして全部もち去ろうとしているのではないか。一体これはどうした事であろうか。病菌が寄生しているのであつたら取り去ればよいだろう。伝染するというの

だったら誰でも病気になってよい筈ではないか、選り好んである人には伝染し、ある人には家族の中の人でさえ伝染しないじゃないか、医者は専門に研究しておりながらどうしてそれが解らぬのだろうか、薬はなぜ効き目がないのだろうか、こんな事を考えながら私はある日、隣り村に用事があつて行つた事を思い出した。ちようど食事だつたので無理に勧められてそこで食事を頂いて歸つた事があつた。

そこに腸チブスの病人が寝ていた事を後で聞いたが、私はでも伝染（うつ）るとは思つていなかったので平気でいたけれども、知らぬ間に否、その日頂いた御飯に腸チブスの病菌がしがみ付いていて、私の体で繁殖したのかもしれない。もしそうだとすれば、あそこの家も家族全部揃つて病気になってよい筈だし、私の家でも特に体の弱い父など早速その病菌に侵されて、この私以上にひどい病気になる筈であるのに、まさにその反対であつた父が、私の看病をするようになってからかえつて健康になつてゐる。一体、病気の正体つて何であらうか、解らない事ばかりであつた。

私の病気は、午前中はさして痛くも苦しくもなかった。でも午後になるとポカポカ熱が出てきてどうにもならなかつた。意識も朦朧（もうろう）となつて、このまま私はどこか遠い世界に行つてしまふのではないかと思うくらいだつた。殊に腸の病気であるから何も食べられないのである。毎日毎日おカユをやわからに煮て、それを布

で漉（こ）し、その汁だけを飲んでいた。時折り病気が早く治るようにと、いい薬だからといって何か判らない物をも飲まされた事もあったが、病気が治って後から聞くとそれらの名薬はミミズや、よく田舎の土間の物の下に白いカビが生えたようなゾウリ虫というのがいるが、その虫を煎じて飲まされたのであるといって皆んなは大笑いをするけれども、私はそれこそニガ虫を噛みつぶしたような顔をしたものである。

そのようなあやしげな薬もなんらの効き目もなく私はただ衰弱の一途を辿って行つた。やがて骨と皮とにやせ衰え、熱のため頭髮は抜けてしまい、抜けた毛に大きなシラミが走り廻っていた。しまいには私は用便にすら立つことさえ出来なくなつてしまつた。私はもう死ぬと思つていた。死んでからどうなるかなどということは考へなかつたが、せつかくの海外への輝かしい希望がとうとうおじやんになつたかと思うと淋しかった。

私の病状が悪化していくのと正反對に父の看護はいよいよ真剣味を加えていった。確かに死なしてなるもののかの親心だつたと思う。夜も寝なしの看護が続いた。日頃の弱い父ではなかつた。母は義姉がちょうどお産をしたので産褥（さんじよく）にあつた産婦の看護から、炊事、せんたく、掃除と忙しくしていたので、私の看病は父が全部してくれた。その父の生命（いのち）を賭しての手厚い看病のお蔭で、生死の境をさまよっていた私の病気は快方に向き始めた。

病氣がいくらかよくなりかけたある日、便秘になって排便がなくなったのを心配した父が浣腸をしてくれた。その甲斐があつて排便したその汚物を父は、わが事のように喜んで始末をしてくれた。小さな子供ならいざ知らず、徴兵適令期にもなっている青年が病氣のためとはいえ、自分でも汚ない物を、それを父親に始末して頂く事は恥ずかしくもあつたが、つらかつた。私は父を拝みたい思いがして心の中で泣いていた。

私は、「あアよかつた、よかつた」と言つて便器を持つて始末してくれる父親の姿を病床から眺めながら、誰ならばこの私の汚ない物を喜んで始末してくれる人がこの広い世の中にいるであろうか、お金を貰つてならする人があるかもしれない、でもお金のためでもなく、夜も寝もやらず、疲れも忘れてひたすら我が子の生命（いのち）助けんがため己が生命を捧げる思いで看護して下さる人はおそらく広い世界に親以外にないのではなからうか。ああ、親心の有難さよ、尊さよと思つていると私の両方の眼から大粒の涙が止めどもなく流れてくるのであつた。部屋に入つて来た父に私は精一杯の感謝を込めて、「お父さんすみません！」とだけ言つた。後は涙で言えなかつた。すると父が、「子の面倒をみるのは親の務めじゃないか、それより助かつて俺もひと安心じゃ」とさもうれしそうであつた。「子供の面倒をみるのは親の務め」かもしれない。でも、単に親子の關係をもつて生れたというだけでおのれの生命捧げて子を生かさんとする親の心、親

の愛情は一体どこから生じてくるのであるうか。私はこの父親の愛情故に一命を取り止め、死生の境を彷徨（ほうこう）してゐた重病から癒されたのであるが、その尊い親心の正体は解るべくもなくブラジルに渡って行つたのである。

憧れの国でみ教えを知る

門 出

昭和六年九月十九日、二十年住み馴れた故郷の地を親しい友や親兄弟と別れて遠く旅立つ日がきた。海外への旅行という好奇心と、若い希望とでそれまでなんともなくはしゃいでいたけれども、いよいよ別れとなるとつかつた。父は普段、「お前が親不孝して家を出るのじやないから、親孝行のためだから、私は泣かないよ、喜んで送つてやるよ」と言つていたが、いよいよ旅立ちの時がくると、眼を真赤にして、身も世もあらぬという姿で泣いてゐた。母も泣いた。兄弟も泣いた。私も泣いた。友達も泣いた。もう恥も外聞もなかった。船の出る波止場で村の人も泣いて送つて下さつた。それまで汽車にさえ乗つたことのない小島の海の子は、いよいよ古巣を離れ

て、しかも試練は遠く海外の地に飛ばんとするのである。その志やよし、されどその別離の悲しさよ……

私は船で九州本土の佐敷駅まで送ってもらって、そこから鹿児島本線の汽車に乗り込む事になっていた。母と兄とが駅まで送ってくれたが、私の乗った汽車が動き出すとプラットフォームで泣いていた母が白い手拭を打振りながら、汽車を追いかけて来て、狂うように泣いていた姿があまりにも哀れであった。

生れて初めての汽車の旅、疾走（しっそう）する汽車の窓から眺める自然の眺めは美しく、町々も珍しかったが、今まで愛のふところに温かく育み下さった両親の膝元を離れ、親しい友と、故郷の山や川と別れる事はあまりに淋しく、痛ましかった。私はただ一人顔をうずめて泣いていた。泣きはらした瞼（まぶた）に、弱々しい体の父の泣き顔、プラットフォームの端まで追いかけて来てハンカチを打振っていた母の泣き顔、とうとう泣くだけで何も言わずに別れた友達、山や川や家が、なやましまでに明滅するばかりだった。それと、これから先、まだ経験した事のない海外への旅に対する不安と喜びともごっちゃになって……

祖国よさらば

神戸の山の手にあつた移民収容所で一週間、身体検査や荷物の検査、その他いろいろ渡航上の教育を受けて、

いよいよ九月二十七日午後、我々七百数十名の移民を運ぶ「さんとす丸」は神戸の港を出帆することになった。雨が降って海も少し荒れているということで、出帆が氣遣われていたが、予定通り出帆することになった。でもまだ小雨が降っていた。

埠頭には多勢の見送りの人が来ていた。お天氣がよい時は小学校の生徒まで見送りに来てくれるとの事だったが、雨のため来ていなかった。埠頭で、船内で、親兄弟やら親戚の人々であろう、別れを惜しんで泣いている。私には誰一人見送りの人はいなかった。故郷の方からは遠いので来れなかったし、彼女は大阪に働きに来ていたので、手紙を出して置いたが、どうしても行けないからという返事が来ていた。

やがてドラが鳴り出した。見送りの人達は急いで船から降り始めた。埠頭と船とに五色の別れのテープが投げ交わされて美しかった。でも私に投げってくれる人は一人もない。私は妙に胸が迫まる思いがして、人の少ない上部甲板に上って、静かにこの別離の悲しい光景を空（うつろな目差しで眺めていた。故郷の山が、父母の姿が幻に浮かんでくる。胸をしめるようなさみしさである。すると、ぽつと誰が投げたのかテープが飛んで来た。おそらく縁もゆかりもない人の、ゆかりある人に投げたのが間違って飛んで来たに違いないのだった。私は急いでそれを取ってまた投げ返してやったが、誰が投げたか、誰に届いたか判りようもなかった。判っても誰一人知る

人もないのである。でも私はそのテープをしつかりと握っていた。

ドラが盛んに鳴り始め、「蛍の光」の音楽が哀調をおびて奏されると、船は静かに岸壁を離れ始めた。人々はいよいよ声を大きくして別れを惜しんでいる。次第にテープは切れて段々と船が沖へ沖へと離れて行く。私はただ一人上部甲板に立っていた。大粒の涙が次から次へと流れるばかりだった。故郷の山や畑や父や母、友達の事が走馬燈のように現れてくるばかりだった。そうしてこれらの懐しい人々と村と、そうして祖国といよいよしばしの別れである、と思うとまた新しい涙がこみあげてくる。港外へ出ると海は少し荒れていたが、七百余の希望を乗せた「さんとす丸」は悠々と西の方へ速力を速めて波を切って行く。

やがて夕闇が船の上にも迫まってきて、陸の電気の光がぼんやりと見えるようになった。あたりには誰一人もいなかった。私は船内の私の部屋に入って行った。

この祖国解纜（かいらん）の日九月二十七日が、奇しくも我らの尊師谷口雅春先生が神戸住吉の地において「大調和の神示」を受けられた日であることも、今日になつてみるとなにかしら深いゆかりが目に見えない世界にあるような気がするのである。

翌日、船が東シナ海へ乗り出して祖国の影が見えなくなる、あの神戸港の別離の涙はとうの昔忘れたかのように人々ははしゃいでいる。私の部屋は後部のDP室という隅の小さい部屋であつて、そこには独身者ばかりが集められてあつた。大きな船といつても狭い船の中のことであり、限定された世界にいるので人々はすぐ仲良しになつて嬉々と語り合っているけれども、内気な私には友達も出来ない。ただ独習ブラジル語の本やその他二三の本が毎日の友達だつた。

船が香港に着いた時、夜景がものすごくきれいだったので上陸してみたいなアと思つたが、その頃既に日支の風雲にただならぬものがあつて上陸は危険であるという事で許されなかつた。支那の商人が変な 艚（ろ）の漕ぎ方をしながら小舟で物売りに来たので、私は煙草をたくさん買った。心の淋しさ、孤独のやるせなさを煙草でごまかそうと思つたのであつた。船が南シナ海を南下している時、煙草を吸いながら甲板に出た拍子に、私はフラフラツとして倒れようとした。確かに煙草だなあと思つたので、それからやめてしまった。

船がシンガポール港に碇泊中の事であつた。ある日、甲板を一人でブラブラ歩いていると、特三食堂の方から歌声、それも合唱の声が聞えてくるので、なにごとかと思つて食堂に行つてドアを開けて見ると、ちょうど、在シンガポールのホーリネス教会の牧師が船内伝道に来ていて、讃美歌を歌っているところだつた。私がドアを開

けるや否や、一人の信者らしい人がただちに私の手を取って内に引き入れるようにして、今ここを歌っていると言つて讃美歌の本を貸してくれた。深切だなアと思つた。讃美歌が終わると、牧師が『聖書』をひろげて、「汝ら、汝らを愛する如く汝の隣りを愛すべし」の聖句を用いて福音を語った。その内容はくわしく記憶していないが、その聖句の「汝ら、汝らを愛する如く汝の隣りを愛せよ」という言葉がたまらなく気に入った。それまで私はキリスト教の事は一度も聞いた事はなかったし、宗教書なども読んだ事はなかった。でもこの聖句で私はキリスト教が好きになった。自分が可愛くない人はこの世の中に一人としていないであらう。皆んな自分が可愛い筈だ。何かの記念の集団写真が出来上った時、お友達とピクニックに行つた時の写真が出来たといつて、喜んで手に取つて見る写真は一番先に誰に目がいくであらうか。分りきつたことである、自分自身である。そのように自分の隣人を愛していったらこの世の中は美しい世界が現れる。争う者もないだらう、憎む人も怨む人も、従つて戦争などありやうがない。

こう考えた時、このキリストの聖句が大きな魅力をもつて私に迫まりくるものを感じてうれしかった。素晴らしい教えた。もつともつと深く知りたい。信じてみたいという気がしてならなかった。幸い、高級船員にキリスト教信者がいて、チョイチョイ逢つてキリストの話を聞かせて下さつた。その人から新旧約の『聖書』を分け

て頂いて、それからの私の毎日は、『聖書』を読む事と、ブラジル語の独習が日課となった。

憧れの国

懐しい祖国をおさらばして四十三日目の十一月十日、憧れの希望の国ブラジルの首都、リオ・デ・ジャネイロ港に着いた時の喜びはたえようもなかった。長い船の旅でようやく唯一人友達になった山形生れの黒沢君と甲板の上を子供のようにかけ廻っていた。いよいよ憧れの国、希望の国に着いた。しかも第二の故郷となるこの国の港の美しさ、素晴らしさ、支那の香港の夜景も美しかったが、このリオ港の美しさはまた格別である。それと蜜柑の美味しかった事は今でも忘れない。上陸は許されたが、なにか手続きがうるさいとの事で私は上陸しなかった。

サントスに入港する時、日本移民を歓迎するつもりであろう、日の丸の旗がアチコチに立てられてあったのは言い知れぬ感激であった。

親の有難さは親の膝元から離れてみると分る、というのは同じく、祖国の有難さも祖国を離れてみるとしみじみ有難く感ぜられ、その祖国の象徴である国旗を外国で見る事は懐しくうれしく、有難いものである。

船が岸壁に着くと多勢の日本人の顔が見える。外国に

こんなにくくさんの日本人がいるのかと思うとこれも驚きであり、また喜びであつた。でも岸壁から船を見上げている日本人の顔の浅黒くコゲている事も驚きの一つであつた。

私の兄も迎えに来てくれたが、相も変わらずよく焦げていた。黒沢君の兄さんが、バナナをひと房持つて乗りこんで来た。「食べよ」と言うのである。日本にいる時は残念ながら食べた事もない。それも菓のような高価なものと思われていたバナナをこんなにたくさん食べられる。食う事は抜け目のない私だっただけに黒沢君と食べる食べる。とうとう大半二人で食べたので黒沢君の兄さんも私の兄も驚いていた。

荷物検査に暇がかかるというので、私達に兄達がブラジル特産のコーヒーを飲ませると言つて私と黒沢君は兄達に連れられてバー（バー）に行つて大きなコーヒー茶碗になみなみとつがれたドス黒いコーヒーを飲ませて貰つた。ひと口飲んだ私はあまりニガイので吐き出してしまった。こんなニガイものをみんな美味しいと喜んで飲んでいるのかと思うと、その気持ちが分らない思ひだつた。その後私はあまりコーヒーを美味しいと思つて飲んだ事はない。

税関の検査が済まないというので私達はサントスに泊る事になった。日本人経営の「潮ホテル」に泊つて夕食を済ませていると、サントス・ホーリネス教会の牧師さんが今夜集会があるからと言つて迎えに来て下さつた。

私はどうして、どこから連絡があるのかびつくりしたけれども、その深切なのに引かれて教会を訪れた。〇〇牧師が説教をしておられた。しばらくして説教が終わると皆んなひざまづいて祈りが始まった。実に敬虔そのものであった。キリスト教の教義については船中ズウツと『聖書』を読んできたけれども、ハッキリしたものを掴む事は出来なかつたし、牧師の説教も充分判らなかつたが、牧師も信者達も真剣に祈るその態度には清い敬虔なものがあつて好きだった。別れる時〇〇牧師が私の手を握つて、「松田さん、しっかりやつて下さいよ」と、念を押して言つて下さつた言葉が印象深く残っている。

耕地へ

その時分、兄が働いていた所はパウリスタ延長線のドウアルチーナという駅から三十四キロ離れたリベロン・ボニートという所だった。汽車の中で一夜を明かしてドウアルチーナに着いたのは昼頃だったろうか。あのブラジル第一日目のリオ港の美しさはもうどこへやら、なんら変化のない見渡す限り大ウネリの大陸をウネリクネつて走る汽車の窓から見る自然は殺風景であつたが、珍しいものばかりで退屈ではなかつたけれども、落着く所はどんな所かそれが気がかりであつた。ドウアルチーナの町で終わりかと思つて日本人のホテルでアルモッサ（朝食）を済ましていると、今日パトロンがバウルーに米

を積んで行っているから、その帰りの自動車に乘せて貰うのだと言って随分待たされた。

夕方になって自動車が来たので、乗せて頂いた。外人がたくさん乗り込んだ。運転をしているそのパトロンという人はブラジル語で盛んに外人達と話している。いいなアと思った。船の中で少しブラジル語の本を読んで来たつもりなのに、ひとつも分らない。外人とどんな話が出来るようにならなければ。それにしても私の兄はほとんど話さないのが少し変に思われた。四年もブラジルにいるのだから充分話せる筈だと思われるのに、外人が話しかけても氣のない返事をするだけであつた。

そのうち日はとっぷり暮れてしまった。ようやく人家のある所に車が止つた。着いたわけである。そこで車の上に乗っていた皆んなはチリヂリに別れ、私は兄に伴われて家に連れて行かれた。

どんな家かもはつきり分らない。ランプが薄暗く光っている。妹と義姉が飛んで来て迎えてくれた。家に入つた。土間を見ると山ほどサッコ（袋・麻袋）が積んである。フエイジョン（金時豆に似た小粒の豆で米飯に混ぜて常食するブラジル特有のもの）だという。大したものだと思つて驚いた。

まずなによりもジャンタ（夕食）だといふので食事をする事になったが、白い御飯にいろんな御馳走が作つてある。それにお餅までついてある。日本ではお餅はお正月だけあるものと思ひこんでいたので、ブラジルはお餅

がいつでも食べられるのかと思つて驚いた。

兄達は四年前に夫婦で妹を連れて来ていたので、その間の日本のいろいろな話で夜も更けてきて寝（やす）もうというので、僕は妹の隣りの部屋に連れて行かれたが、なにかしらベッドがガサガサ音がするのでおかしかったけれども、旅の疲れでその夜は前後不覚眠ってしまった。

耕地の生活

夜が明けてみて驚いた。実にみすばらしい掘立小屋である。壁は椰子（やし）を割つてそのまま針金でくくりつけてある。屋根はトタン葺（ぶ）き、昨夜寝る時ベッドがガサガサしていると思ったら、それはミリーヨ（トウモロコシ）のパーリヤ（トウモロコシの皮）を割いて作つたコッション（かいば桶）なのである。

話を聞いてみると、原始林を切り倒してそれを二、三カ月乾かし、火をつけて焼き払い、その後家を建て、コーヒーを植え、コーヒーとコーヒーとの間にいろんな作物を作つてコロノ生活、あるいは三年とか五年とかの契約農生活が始まるという事だった。

兄は四年契約で入り、立派にコーヒーも成長して、来年からコーヒーが成るという年に霜が降りて大半を枯らしたので六年契約に延ばしていた。そしてその契約が終わると、自分で土地を買うか、借地をするかなので、そ

れまでは立派な家など建てられないという事だった。無理もない事だと思った。

私は毎日朝早く起きて働いた。馴れない仕事ではあったが体が丈夫だったのになにひとつ苦にならなかった。一日中汗みどろになって働いて夕方家に帰って豚にミーリヨ（トウモロコシ）をやつて、夕飯を頂き、風呂に入つて、古い雑誌などを繰返し読んだり、ブラジル語の独学をしたりして、十一時頃床に就く。夜が明けると昨日と同じ事がまた繰返される。多少仕事が変わるだけで来る日も来る日も同じような生活が繰返されていくに過ぎない単調な耕地生活の毎日である。

耕地に着いて二、三カ月の間は生活が珍しいので、知らぬ間に過ぎてしまったが、段々馴れるに従つてこの単調な生活がいやになってきて仕方がなくなってきた。一所懸命働いて金を儲けて大きな耕地を買つて、牧場をフォルマ（造成）して、きれいなパスト（牧場）で牛乳を搾（しぼ）つて、自家用車を買つて、素晴らしい女性と結婚して、などとそんなはなやかな希望はどうしてか私には全然もてなかった。毎日毎日こうして働くのはよい。しかし何のために働くのか、我々が働くのはお金を儲けるためであるという事がその目的の全部なのであるか。お金がなくてはならぬような今日の社会の制度だからそれはいくらあつてもよいだろう。しかし、それが我々の人生の全部であつてはならないのではなからうか。それが我々が毎日汗みどろになって働く目的であつてよ

いのであろうか。

働かねばならない、それは判っているのだけれども、もつと心の底から喜べる生活があつてもよいのではないのか。誰かに私の存在を喜んで頂けるような人間でありたい。

日本人家族は僅かに二、三家族に過ぎなかったし、恋愛の対象となる女性もないし、外国人にはいたけれども言葉が通じないし、働くだけでなんらの娯楽もない単調な環境と境遇とであつたから、このような考え方をするようになったのか、私は毎日毎日心中の悩みを感じて夜は明け、日は暮れていった。

勉強がしたい、もつともつとなにか勉強して自分というものを人類社会に捧げたい。このままで死にたくない。世を終わりたいくない。勉強だ勉強だと思うのだけれども、日本に帰るわけにもいかず、だからといってサンパウロへ出て勉強することも出来ない境遇を思つては、青春の輝かしい希望を胸一杯描いてみても、私の場合、それは哀れはかない空想であつて、私は一人の百姓として土にまみれて働いて死んでいくような運命を背負つて生れているのではなからうか。青年らしい明るい希望や輝かしい理想を描いても、それはなんら実現性のない流れに消えゆくうたかたのごとくはかないものに思われて淋しくて淋しくて仕方がなかった。

ブラジルで自分を伸ばしていくには、ブラジル語も習得しておく必要があると考えて、辞書を買ひ求めて夜の

更けるまで自習独学してみるのであったけれども、朝から晩まで畑で働いて、ようやく畑の行き帰りに出逢う外人と「ボン・ジイア」（お早ようございます）「ボア・タールデ」（こんにちは）と、きまりきった二、三の会話を語るくらいでは上達しそうもなかった。日曜日には習い覚えた単語を外人の所に遊びに行つて稽古するようにしたらよいと思うのであったが、さてその日曜日になると、外人の中で間違つた言葉を使つて笑われている姿が恥ずかしく、遊びに行く元気もなく家の中で引込んでしまうような意気地のない自分であり、その意気地のない自分を思うとまた情けなくなるのであった。

「友の奴め」

その頃から満州事變を契機として日支の間には不幸にも干戈（かんか）を交えて戦いが始められていた。仲の良かった友達、兄弟が、兄は佐世保の海兵団に入り、弟は近衛歩兵に選ばれて軍服凛々（りり）しい写真を送つてくるのであった。彼らとは国を出る時、十年を一期として誰が早く出世するか外国と日本とで出世競争をしようと言つてきた。私は外国に行くからと言えれば彼らは軍人になると言った。そうして彼らは思い通り誉れある帝国軍人となり、出世の第一歩に雄々しく出発している。私の心はますます動揺せざるを得なかった。

軍人にとって戦争は生死の境に身をさらす危険なこと

であるとはいえ、また一面名誉と成功の登龍門でもあるといえる。運よくは胸間に勲章を下げ、長刀をつり、美髯いかめしい天晴れ国家の干城として男子の誉れと出世が出来るし、またたとえ武運つたなく戦場の露と消ゆる事があるうとも、それは護国の英霊として靖国神社に神と仰がれる。どちらにしても男子の本懐これに過ぐるものはない、と思うと「友の奴め、うまいことをしやがった」と、うらめしく写真を見つめながら、さてこの自分はこの友とどのように出世を競うのか、金を人生の目的と考えていない自分には競うべき何物もないように思われてみじめであつた。たとえ十年努力して帰国することがあつても、国家の危急に生命捧げて名誉ある地位に微笑（ほほえ）んで立つ友の前に、暖国の太陽にやけて色黒く立つ自分のみすばらしい姿が想像され、打ちのめされた敗北者のようだと思うだに耐えられない苦痛を感じるのであつた。

勉強したい。勉強したい。誰かに喜ばれる人間になりたい。でもこの切なる願いがいつかなえられるであろうか。おそらくそれは永遠にかなえられることなく、土を相手の毎日が続くのではなからうか。しかもこの労働の報いの哀れさよ、みじめさよ。私はだんだん物言わぬ、明るさを失つた青年になつていった。

隣人を愛す

一日の労働を終わって更け行く夜のかぼそい燈を頼りに、私は船内で手に入れた『聖書』に読みふけてみた。心の中の淋しさ、やるせなさを含めて神のみ心の言葉で慰めようと読んでみるのであったが、なんらの慰めにはならなかった。チラホラと神の姿が私の心にふれるようにも思われたが、その神は遠くはるかなる有るか無きかの世界に姿を消していくのであった。またキリストの神はなにかしら外国の神のように思われて我々日本人には縁の遠い神のように思えて仕方がなかった。

船内で初めて知ったキリストの聖句「汝ら、汝らを愛する如く汝らの隣りを愛すべし」。感激を受けたこの聖句を生活に生きてみよう、我が家の者には憂鬱なままを丸出しにして隣りの家、特に娘のいる家の人々には「汝の隣りを愛すべし」を行じて、隣りの人々からは深切だと喜ばれたけれども、自分の家庭の中で物言わぬ、晴れやらぬ憂鬱な生活を続けていては心からなる喜びも感じないし、神から祝福されたという感じもしなかった。かえって何物かにせめられているような不安な感じがするばかりであった。『聖書』を読んでみても、そのままを行じてみても私の魂は何の喜びも感じないとするならば、救いの聖業であるキリストのみ教えは私のこの沈みゆく魂を救う事は出来ぬのであろうか。キリストは何のため

に十字架に自分を釘付けたのであろうか。キリスト教の人々は本当に神を知り、喜びに満たされて信仰しているのであろうか。

隣家にその頃四、五人の力行（りつこう）会（キリスト教の団体）の青年が来ていたので、ある日私は彼らを訪問して「キリストの十字架はなにを意味するか」と尋ねてみた。彼らは「我らの罪の償い」だと答えた。それではキリスト生存中「十字架を背負うて我に従え」と言ったのはどういう意味かと聞き返しても、ブラジルに渡航する一つの方法として力行会を通って来ただけの信仰の彼らには、深いキリスト教の真理を私に解釈してくれるだけの力はなかった。キリストが我らの原罪の身代りとなって死んだのであるとするならば、どうして罪を作る人達が多いのだろう。なに故に救い難き悩みに苦しむ人がいるのであろうか。また、人の魂を救うという宗教がどうして他の宗教では救われぬというのであろうか。他の宗教では救われぬというのであればその人達はどのようにして救われるのであろうか。他の宗教の人は救う事の出来ない哀れな力しかもたないのが神なのであろうか。それで全智全能という事が出来るのであろうか。あまりに矛盾したこの事実が宗教なのであろうか。分らぬ事ばかりであつて、私の憂鬱性はいつ晴れるとも分らなかつた。

キリスト我れを救わず

私は好んでいろんな書物を読んだ。自分では持つていなかったもので、数多くもない二、三の隣家から盛んに借りて来た。『善の研究』も読んだ。賀川豊彦氏の本もたくさん読んだ。明治文豪の本も読んでみた。この賀川氏の本の中に、『巡礼と彷徨』という本を読んだ時は少なからぬ感銘を憶えた。その序文の中に、「私は聖書を片手に、片手には藁籠を提（さ）げて北海道の端から台湾の果てまで、ある時は農夫と共に耕し、ある時は漁師と共に沖に出てすなどりながらキリストの福音を伝えて歩いた。今日本は私の外にあるのではなく、私のうちに日本がある想いがする……」と書いてあった。私はうれしかった。なんという素晴らしい事であろう。神の福音を伝えんとして日本国中を『聖書』片手に農夫と共に耕し、漁師と共にすなどりながら神の福音伝道の旅を続けておられる賀川先生の姿が聖者のように思われ、自分もこのような人間でありたいと切に憧れてみるのだが、現実の自分はそのような人間としての資格があるかどうか、再び失望の鉄槌で打ちのめされるよりほかない私であった。しかも、この敬虔な救霊の聖者の賀川先生が片手に『聖書』を、それはよい。

だがどうして片手に藁籠を持って歩いていられるのであろうか。キリストは『聖書』の中に「汝の信ずる如くなれ」と言つて病氣を治している。それを信じて伝えん

としているこの神の使者は、なに故に身体に十二の病を得て、その病気のまさかの場合を予想して薬籠を片手に用意して歩かなければならないのであろうか。キリストの使徒であり、神の救霊の使者であるならば、キリストは「われを信ずるものは、われより大いなる業をなさん」と説いているが、キリストの弟子たる人がキリストのみ教えを信ずる事が出来ないものであろうか。それで弟子といつて道を伝える資格があるのであろうか。ここにも分らぬ事ばかりで、キリスト我れを救わず、と嘆く私であつた。

日曜毎にパスト（牧場）から馬を引出して来てはくらを置いて高原を逍遙（しょうよう）する事が私のせめてもの楽しみとなつた。好きな難しい本を持って見晴らしの良い高原の木蔭に駒をつないで読書しつつ思索にふけてみるのであつたが、なんらの結論は出てこなかつた。「ああ自分はどのような立派な希望を描いてみても、所詮それははかない夢であつて、なんら実現不可能であつて、自分はやはり早朝から日が暮れるまで真つ黒になつて働いて死んでいくことが生れながらに運命付けられているに違ひない。私はこのような暗い運命論に落ちていくよりほかなく、しかしこのような宿命的人生観は思うだに戦慄するような淋しさを感じるのであつたが、それより外に結論は出ないし、淋しい限りであつたが、それでも誰か一人でもよい、私がこの世に生きていたという事を喜んでくれる人がいたら、私は喜んで死んでい

こうと考えていた。

地平線の彼方に太陽は沈んで、夕映えが西の空を美しく彩っていたが、そのきれいな夕映えの地平線の彼方に何か私を待っている幸福があるように、それが私を手まねいているように思えるのであるが、それさえも夕映えとともに はかなく色あせて消えていくばかりであった。

珍しい宗教

灰色の雲が天日を蔽（おお）って暮れていく冬の日のような淋しい諦めの日々が続いて、二、三年の月日が過ぎてしまった。

昭和九年であつた。その頃日本から来られたばかりの方が二家族私達のコロニアに入植して来られた。どちらも静岡県の方で、どちらにもきれいな娘さんがおられたので、殺風景なコロニアにもなにかしら活気が出てき、私の心の中にもなにかしら不思議に明るいものが感じられてきた。

その中の一軒が大城糸次郎氏といって――私達に生長の家を教えてくれた人だが――二宮尊徳先生のみ教えを深く学んでおられるお方だった。私は自分の魂が求めているものを満足せしめてくれる人が欲しかったので、いろいろ話を聞くのが好きだった。また異性が恋慕されていた時分の事でもあり、毎土曜や日曜の晩にはいつも遊びに行つては、若い人達とカルタや花札やトランプをして

遊んだりしていた。いくらか暗く沈みがちな私の心も晴れやかになってきたようであるけれども、それでも生き甲斐のある人生は私には分らなかった。

二宮先生の教訓もそれはいいなアとは思っただけでも、だからといって力強く私の心を揺ぶるほどではなかったし、私の人生を明るく導く燈台とは思えなかった。

若い青年の方や娘さん方とのカルタ遊びも、それは楽しみであった。うれしかったけれどもただ時間つぶし以上の何物でもなく、遊びが終われば、またもとの寂寥感（せきりようかん）がひたひたと押し寄せてくるばかりだった。

それは確かに僅かばかりのコーヒーの採取が済んでいた頃の九月のある土曜の晩であつたと思う。いつものように、大城氏の家に遊びに行くと、大城氏が、「松田さん、この頃日本で珍しい宗教がはやっていますよ。生長の家っていうのですがね、人間は神仏の子だ、と教えているのですが……」

と言いながら、革表紙金文字入りのズッシリした本を持って来て、

「静岡の報徳会の仲間に千葉という友人がいるんですが、その千葉さんから是非読むようにといって送ってくれたのです。まだ私も全部読んでいませんが、持って行って読んでみませんか」と、その『生命の実相』を机の上に差し出されたので、私はその御本を手に取り、一ページを繰りながら、

「珍しい宗教ですな、人間が神様や仏様の子だなんて、そんな事あるものでしょうか」

それまで人間というものに対して深く考えた事もなく、目に見えるこの肉体を見て我れなり、人間なりと思い、その人間は偉い人もいるが、つまらぬ人もいるし、病む人も、悩む人も、哀れな人も、争う人もいる。現に自身自身が今自分でも好まない姿で悩んでいるではないか。この人間が神仏の子だなんて途方もない話だ。もし人間が神仏の子であるならばこんな人生の病悩苦や家庭の不和が生ぜず、戦争などがある筈はないし、人間が神仏の子だったらもつと素晴らしい世界であつてよい筈なのに、神仏の子でないからこそ、このように苦しみ悩まなければならぬのではないか。

人間が神仏の子だなどと、とんでもない宗教があるものだ……と思つたけれども、黒皮表紙に金文字のズッシリした本の莊重さは、なにかしら人の魂にふれる魅力があつた。なにか難しい本が読みたくて仕方がなかつたのと、御本の終わりの方に詩が書いてあつたので、詩が好きだった私は貸して下さるという御厚意をそのまま受けて、その御本を借りて歸つたのであつた。

兄病床より起つ

翌日私はその『生命の真相』をメーザ（テーブル）の上に置いたまま畑に出かけた。

夕方、仕事から帰ってみると、アマーバ赤痢で病んでいた兄が床から起きているのである。はじめ治ったかなアと思っていたが、いよいよ夕げの時間になると、私を読むべく借りて来た『生命の実相』の御本を片手に持って、いかにも感激深く語り出したところによると……兄は私が畑に行った後で用便に出てその帰り、メーザの上の黒皮表紙の本を見て心引かれるままにその御本を病床に持って行き、病の苦痛も忘れて読み始めたというのである。そしておそらく十ページほど読んだであろうかと思う頃から体の具合がよくなり、一日中引きつけられるような思いで読んでいるうちに、さしも血便をして苦しんでいた病気が快（よ）くなってしまったというのである。おかしい事もあるものだと思いつつも、今日の前に快（よ）くなって顔も紅潮して感激しながら語っている本人を目の前にしては、それを否定する訳にもいかなかったのであった。

前に述べたように、兄が渡伯した目的はほとんど全部の移民がそうであるように、金儲けが目的であった。しかも、兄の場合はそれがまことに深刻であったのである。私はまだ助かったので記憶にはないのであるが、父が事業に失敗して大変金に窮した事があった時、ある金持ちに金借りに行つて、

「金はあるがお前達には貸す金はない」

と言つて大變侮辱されたことがあるそうであるが、それを後で知った兄は、いきなりはだしになつて飛んで

行つて復讐するというのが、父が、

「この俺が我慢して帰つて来たのを、なにもお前が怒ることではないではないか。お前が怒つてなにかしでかしたら、俺が我慢してきた甲斐がないではないか」

と諭（さと）されて齒を喰いしぼりながら……

「おのれ、いつかはお金をしつかり儲けてその札束を目の前に叩きつけて、お前のお蔭でこの金を儲けさして貰つた……と、お金で復讐してやる」

煮え返るような腹を押えて我慢したものの、それから金儲けの事のみが脳裏を支配し、どうしたら金儲けが出来るかとそればかりを考えていた折、熊本の豊田源行氏が錦衣帰郷（きんいきききよう）、県下をブラジル事情についで講演をして歩かれたのを水俣の町で聞いて矢も楯もたまらなくなり、ブラジル渡航を決意し、子供はないので妹を連れて昭和三年に渡伯していたのであった。そして石にかじりついても金を儲けずにおくものかと、頑張っていたのである。その腹の煮え返るような憤りが、結局お腹の病気となり、アメーバ赤痢となっていたのであったということが『生命の実相』を読んでいるうちに解つてきて、人間は神の生命であるから病気というものは本来ないのであるけれども、その人間を神と知らぬ心が迷いを生じ、迷の心の影としていろんな病気が現れてはいるが、病気は本来ないのであった。自分の病気も、父を辱めたといつてある人を憎んできたその心の影であったのだ。

しかし考えてみると、その人を憎んだが故に病気をし、病気をしたが故にこの素晴らしい教えに導かれたのだと思えば、その憎い人は私をこのみ教えに導く動機を作ってくれた人であつた。今までの憎しみの心が消えて、反対にその人を許し、感謝する気持ちになった時、忽然として病気は消えていたのであるという。

まことに今まで聞いたことのない夢のような事ではあるが、全然嘘でない証拠が目の前に語っているのだから、私たちはただ呆然として聞き入るばかりだった。

『生命の実相』を読む

このような予備知識のもとに私は『生命の実相』を読み始めた。先ずページを開けば「七つの燈台の点燈者の神示」というのがある。

「……神に感謝しても、父母に感謝せぬものは神の心になわぬ……」とあるところに驚いた。続いて「はしがき」の中に「……凡そ、宇宙に生命が発現する限り、そこに道があり、法則がある。

この道こそ『生長の家』の生きる道である。『道』とは宇宙にミチ（満ち）て存するコトバ『生命の波動』であり、遍在する大生命の創化の原理であるから、それは如何なる宗派とも衝突しないで、また如何なる宗派の人々と雖（いえど）も踏み行わねばならぬ生活の原理である……」と書いてある。驚きは驚きを加えて私は息をも吐

かぬ思いで読んでいった。「生命の創化力が完全に発現すれば健康となり、平和となり、豊富なる供給となり、個人及び家庭社会等の生長となるのであるが、生命の創化力が完全に発現しないとき病氣、窮乏、その他凡ゆる人生苦となるのである。何が生命の創化力を妨げるかといえば、転倒妄想（自己を無限力ある仏性、神我、靈又は生命と自覚せず、自己を物又は肉体と観る妄念）である。転倒妄想は一つの逆の想念（波動）であるから、生命の創化力（生々の波動）を妨げる。転倒妄想を去るとき、この妨げは除かれ、生命の創化力はおのずから発現して病氣は消滅し、法界無限の供給はその人の必要に従って流れ入り、凡ゆる人生苦は自滅するのである」

それまで人とは何ぞやと瞑想してみたこともなかったし、教えてくれる人もなく、ただ目に見えるこの肉体を人間だ、自分だと思い込み、従って、不幸や病氣や悩み苦しみ、あるいは争いというものがあるものと思い込み、物質的に豊かな生活が人間の生き甲斐ではなかるうかと思ってみたり、ただそれだけでは人生の目的ではないのではないかと思ったりしてきた自分であった。それがここにはハッキリ人間は「生命」であると教えている。生きていく事は知っていた。しかし人間を生命とハッキリ考えてみたことはない。その生命が完全に発現すれば健康となり、平和となり、豊富なる供給となり、個人及び家庭社会の生長となる。物質的にはともかくとして精神的にもっともつと生長したい。誰かのお役に立つような

人間になりたいものと考えていた折の私の心に、この「はしがき」のお言葉は大きな歓喜であり魅力であつた。我々のこの生命の創化力を妨げるものは自分を無限力ある神我、仏性、霊または生命と自覚せず、自己を物または肉体だとみる妄念であるとするならば、私は今まで、環境や境遇が悪いから、その悪い環境にこの肉体なる自分が縛られてどうにもならないのだ。自分がどんなに輝かしい希望を描いてみても、理想に燃えてみても、それは断じて実現の見込みなく、哀れはかない夢でしかない」と諦めて人生に希望を失っていたのではないか。自分は生きている。生きているのは肉体でなく生命であつた。生命は無限生長がその顕現の法則であるのだ。その無限生長を妨ぐるものは、環境でもなければ境遇でもなかった。自分自身だつたのだ。しかもその自分は、自分を無限力ある神我仏性、霊または生命と自覚せず、物または肉体だと見る妄念でしかなかったのである。自分の無知から自分の心で自分を苦しめ、自分の力を押さえる。なんと愚かな事であろうか。

私の魂はいまだかつて経験したことのない欣（よろこび）を感じるのであつた。

私は夜の更けるのを忘れて、つかれたもののよう読みふけた。読んでは静かに瞑想してみた。自分が一個の生命であつたのか。

目をとじて自分というものについて考えた。生きている、不思議である。呼吸している、不思議である。しか

もその呼吸作用は、空中（目に見えない世界）から酸素を吸収し、炭酸ガスを排出すると教えられている。その呼吸作用によつて体内の血液が浄化されて健康が維持される。不思議である。動物が吐き出した炭酸ガスを植物が吸収し、動物に必要な酸素を植物が排出する。自然の世界は生かし合いの世界である。誰がこれを司っているのであろうか。人間ではない筈である。不思議である。

我々は食物を食べて生きている。胃で消化され栄養素となつて血となり肉となる。必要でないものは体外に自然に排出される。誰の仕業であらうか。たしかに人間ではないのである。目で物を見、耳で聞く。鼻で物を嗅ぎ、口で味わい、語る。何ものの仕業であらうか。断じて自分ではない筈だ。自分は何も知らずに夜の床に寝（やす）んでいてさえも、心臓も胃も腸も働き続けている。どのような仕組みになっているのか、誰の力で働いているのか。生きていることが不思議で不思議で仕方なくなってくるのであった。

ああ、生かされている。生かされている。僅かな力、つまらない力で生きていると思つていたのは大きな間違いであつた。生かされているのだ。不思議なもののに生かされている。しかもこの自分の内に働いている解し難き力がこの宇宙をも動かし生かしている。その宇宙の力と私の生命はひとつである。なんというよろこびであらうか。

私は雀踊（こおどり）せんばかりの欣（よろこ）びに

打ち震えていた。なにかしら明るい前途が見えるような気がする。

私の暗い人生がしらじらと明け始めた喜びであった。私はその時分のノートにその時分の自分の喜びを次のように書いている。

「幼な児は、ふくよかな母の乳房を口にふくんだまま眠っていた。長い眠りである。

ふと幼児は何に驚いたのかはげしく泣き出した。

母は幼な児の衣を縫う手を休めて、優しい目差しを幼児に向けながら、

『おお坊や、眼が覚めたの、泣いちゃいけないよ。坊やは夢を見ていたのよ。なんでもないのよ。

御覧、あんなに太陽が輝かしく照っているでしょう。そら、あんなに美しい花も咲いていますよ』

優しい母の言葉に泣き止んだ幼児は、周囲を見廻しながら、夢の世界と現実の世界を心の中で見比べているのだ。そして恐いものは皆んな夢だったと解って安心するのであった。

それよりも幼児のうれしかったことは、自分が今もなお母の暖かい愛のかいなに抱かれて、限りなき恵みの乳を吸いつつ生かされている母と一つなる生命であるという事だった。

ああ、人間は自分で生きているのではない。光りに光りを仰ぎつつ生かされている神のいのちであるということは、なんという尊い、なんという生き甲斐であり、

喜びであらうか」

この拙（つたな）い文章の日付が一九三四年十月五日となつている。翌々年のノートに「二九三四年九月七日、私は導かれて今や地上天国建設運動の旗押し立てて、すべての暗黒を光明化しつつある『生長の家』の信仰に入ることが出来たのは、まことに幸福の限りである」と書いているから、私の生長の家入信は昭和九年九月七日となつている。生長の家発祥して僅か四年目であつた。

大いなる体験

それからの私は生きていることが喜びであつた。生きていくことが喜びであつた。朝コーヒーを飲む時も、畑に行く時も『生命の実相』を離さなかつた。夕飯を食べながら読んでいた。

私の人生観も、人間観も、なにかも変わってしまった。自分自身が明るくなつた。見るものも聞くものもうれしかつた。ちぎり残されたコーヒーの真赤な粒にも、おお生命の兄弟と優しく声をかけてやりたくなつた。引く鍬にも自然に力が入つたし、疲れも感じなくなつた。西の空をあかね色に染めて沈んでいく太陽も美しいばかりになつた。灰色に見えた青空も聖者の瞳かと思われて憧れるように美しく見えるのだつた。

その時分の文章に「路傍の花」と題して次のように書いている。

「暖かい春の陽ざしが路傍にヤシの影を映して輝いているある日曜日の午後だった。

なす事もないままに私は愛馬に乗ってとあるカンポ（野原・草原）を散歩していた。ふと見ると路傍に一輪の名も知らない花が人馬に踏みにつられながらも可憐な姿に咲き出でて、音なき風に馥郁（ふくいく）たる芳香を周囲に投じている。

駒止めてしばらく見つめていると私の胸の奥深く喜びが湧いてくる。限らない神の愛はこの名もない小さな路傍の花にも恵みを垂れ給うて、めぐり来る春の陽に咲きほころびているのだ。

神の愛のいと寛さよ、豊かさよ

神の知恵のいと深く、偉大さよ

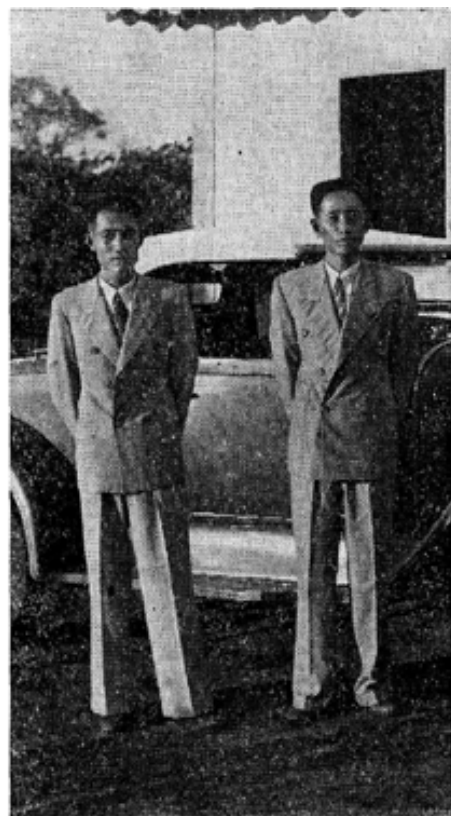
しかも、この一茎の名もなき草花が、人馬に踏みにつられながらもなおかつ神を信じ、愛を信じて咲き出ずる努力の尊さよ。この努力の中にもまた神がいますのであらうか」（一九三四年十一月）

み教えに導かれ、このようにして人生が変わり、喜びの日々を送っていたある日のことであつた。当時バウルで発行していた「聖州新報」紙を手にとって見ると、三面に「弟は兄を励まし、兄は弟を慰めつつ涙ぐましい闘病生活の兄弟愛物語」というような見出しの記事が載っていた。兄弟二人で希望に燃えて渡伯し、十五アル

ケールの土地を買ってコーヒーを植え奮闘していたのが開拓半ばにして二人とも肺病に犯され、頼るに親戚もなく、金は使い果たして、僅かのお米をせめてもの生命の綱として闘病生活をしている……、というかわいそうな記事であつた。

一読した私はもうジイツとしてそれを他人事のように考えられなかつた。『生命の実相』を知つて頂いたら治るに違いない、生命の創化力が完全に発現すれば健康となり……とある。きつと治つて頂くに違いないから知らせてあげようか、どうしよう。

誰も先輩のいない時のこととて、私は御本で読んだ神想観を行じて神啓を受けてみようと思ひ真剣に祈つてみた。すると、知らせてあげるがよい、という気がしてきたので、私は自分では充分解らないので、『生命の実相』の「はしがき」を書き写して書いて送つた。宛名はグアラペス駅リベロン・クラーク植民地と新聞に書いてあつたのでそのまま書いた。祈りを込めて書き、祈りを込めて送つた。そして神が必ず救ひ給うと祈りながら返事を待っていた。一カ月経つてからまさに返事が来た。その時私はこの人は救われたという実感がし、急いで開封してみると、「私達のつまらない事が新聞に載つて恥ずかしく思います。でもあの新聞を読んだ人は幾人いるか知れませんが、手紙を下さつたのは貴方一人です。今の私には他人のようには思われません、兄弟のように思う



著者の激励の手紙に瀕死の床から
3日で立ち上がった大前勝・潔兄弟

から、その『生長の家』のみ教えについてもつと深く
わしく教えて欲しい」というような文面であった。

そこで私は自分では解らぬので、『生命の実相』の中
から特に肺病に都合のよいような所を抜き書きして、便箋
に六枚ほど裏表に書いて送った。感謝の返事が次々と来
た。

その時分、大城氏は既に月刊の神誌を取っておられた
ので、お願いして古いのを頂いて送ってあげたりした。
大前さんからは、

「あなたの御手紙を一所懸命読んだり、書き写したりして
いるうちに御飯がこげてしまう事もあります」というよ
うな愉快的手紙も来るようになって、とうとうこの御二
人は間もなく、寄りつく人もなかったという肺病から、
死の直前に『生命の実相』によって救われたのである。

狂者癒ゆ

私が大前氏と通信して、その驚くような奇蹟的治病体

験と、み教えの偉大さに驚いているうちに、兄はコロニアの外人達に、あやしげなブラジル語で真理を話してあげて、いくらも病人を治していた。

ある日、私達はコーヒーの収穫でおそくなつて、薄暗くなつてから家に帰つてみると、家の前に二、三の外人が私達を待っていた。用件を聞いてみると「クラドール・ジャポネース（日本人の心霊治療師）の家はここか」と言うのである。変なことを言うと思つてよくよく聞いてみると、兄がアチコチの伯人病人を治していることから、兄のことを「クラドール・ジャポネース」と言っているということが判つた。

「自分の家内が気が狂つてあばれているから治して貰いたい」と、頼みに来ているのであつた。兄は急いで夕飯を済ませて、自分ではブラジル語が充分でないから、お前も行こうというので、私もお供して出かけて行つた。私はブラジルで生きていくにはブラジル語が必要だと思つて、独りでブラジル語の勉強をしていたので、兄より幾らか上手に話せるようになっていた。

外人の家は四、五キロほど離れた所のイスパニア人のシチアンテ（小農園主）だつた。お産の肥立ちが悪くて発狂したのだということであつた。行つてみると、家の内から、外から隣り近所や親類の者であろうか、多勢集まつて心配そうに話し合っていた。私は初めてのことで内心少なからず不安であつた。家は低い土壁で、壁に塗つたカール（壁に塗る石塊）もはげてしまつてブチ

になつて汚ない家だつた。けげんな顔をして私達を迎える人々の間を通つて部屋に入つてみると、ダブダブに太つた三十ぐらいの婦人が汚ないベッドにかけたまま、うつろな眼で虚空を見廻しながら、ものすごい形相をしている。そして、「ここにはピッシヨ（害虫・けだもの）が一杯いるから、自分はここから出て行く」と叫ぶかと思うと、自分の着ている着物のスソを口にくあえて、ジャーツ、ジャーツと引き裂いているのである。子供達はオロオロしながらそのアラレもない母親にとりすがつて「ママイ、ママイ」と泣いている。せつかくのクラドル・ジャポネースも、なすすべもなく、しばらく呆然と立ちすくむばかりであつた。兄は何も語らないし、私も無言だつた。外人達はクラドル・ジャポネースが来たからなんとかして治してくれるだろうというような顔や、どうして治すのだろうか、果たして治し得るのだろうか、というような複雑な表情をして、広くもない家の中に足の踏み場もないほど入つて来て、私達二人の行動を見つめている。

私と兄とが、『甘露の法雨』を読もう、と一緒に言つた。どうにも『甘露の法雨』に頼るよりほか仕方がなかつたのである。そこで私は外人達に向つて「人間はもともと神さまの子だから病人や狂人はいない。この人もきつと治るから皆さんはあまり心配しないで静かにして下さい。これから私達がサントストラ（『甘露の法雨』のこと）を読みますから、皆さんは合掌して聞いていて下さい」

と、おごそかに？ 宣言して日本語の『甘露の法雨』を外人達の中で声高々に読み始めた。外人達は、言われるままに合掌してなにも解らぬ日本語の『甘露の法雨』をまじめに聞いていた。私達はそれこそ一所懸命だった。治らなければクラドル・ジャポネースの名だけでない、日本人の不名誉だと言わぬばかりに、氣狂いがいるのも忘れて懸命に読んだ。驚いたことに、『甘露の法雨』を読み終わった時は、その氣狂いは完全に治ってしまつてキョトンとしてベヅドに腰かけていた。

『甘露の法雨』の偉大な功德を目の前に見た最初の体験であつて、治つた本人より私達の方がただ驚きと喜びで一杯だった。外人達も涙を流して喜んでくれた。この婦人はそれっきり治つて健康になつたのだが、それからますますクラドル・ジャポネースの兄の名は外人間に伝わつていったようである。私達もまた次々に起こるこれらの体験によつて、真理が間違ひなく実証されていくので、み教えに対する信頼は確固不動のものになつていたのである。

三つの希望

兄や大前さんの死生の境をさまよつていた大病を克服して起ち上つた体験や、外人たちの驚くような体験に、私のみ教えに生きようという考えは炎のように燃え始めた。み教えをとやかく批判したり、疑つたりする気持ち

は更々なかつた。むしろ驚くべきみ教えであるとの信念は動かすことの出来ないものになっていくばかりであつた。そして、私の心の中に大きな三つの希望がクッキリ描かれた。それは実に鮮明であつた。その希望は将来何年か経つて実現する夢ではなかつた。既に私の心に打ち立てられた実現した夢であつた。思えば人生に生きる希望を失つていた私が、大きな明るい夢を描いて、しかもそれは既に私の心に、否神の世界に実現している事実として描くことが出来る、夢を描いて生きる人生を発見して喜びに雀躍（こおどり）して生きていけるということ、はなんとという喜びであろう。その三つの希望とは、

一 ブラジル全土の青年にこのみ教えを伝えて歩く先達となる（無論講師になることであり、後でこの希望は講師になるなら百姓から出た本部講師になる、という希望に変わつて行つた）。

二 青年道場をこしらえる。

三 日本に帰つて教育を受け、谷口雅春先生直々のお弟子になる。

人間が宇宙の大生命なる神の生命を頂いて生きているということとはなんとという喜びであろうか。

この喜びと信念で生きるならば、この世は心の現れる世界であるから、その心が現れて極樂、天国が地上に現れる。なんとという輝かしい、明るい、偉大なみ教えであり運動であろうか。それが単なる机上の空論でなく、実現を伴わない抽象論でなく、力強い実証を伴う真理であ

る。自分自身においても既に信仰前の自分と、今日の自分はまさに雲泥の違いを感じず。とするならばこの真理を多くの人々に伝えて、人間の死後の世界にはなく、地上に天国、極楽を打ち立てるこの運動に自分の全身全霊を、私の一生を捧げよう。それが私の人生を革命し人間最高の喜びに導いて下さった導師谷口雅春先生への御恩報じの幾分の一にもなることであり、小我を去って大我に生きる日本人最高の絶忠の道であり、生の勝利であり、生き甲斐であるということになるのではあるまいか。

特に将来ある若き世代にこれを伝えて、青年の純情な胸に美しく燃える希望を、我れ神の子なりとの強き信念と信仰とによつて導けば、一人一人の志す道は違うとも己が志す世界を完全に生き切り、戦い取つて天晴れ勝利者として栄光輝く生き甲斐の人となることが出来る。そして、その人達が喜びに満ちて神を親とする神の子の兄弟姉妹として手をつなぎ、国境をこえ人種民族をこえ、言語をこえて喜びを謳歌する時、地上に天国が実現するのは必然である。

神の子の生命の兄弟である地上の人類が一つの生命につながり、生かされておりながら悲惨極まる戦争を起こして尊い人命を多量に殺し合い、人類が長い間の知恵と努力を積み重ねて作り上げた文化を爆弾によつて一朝にして破壊し尽すということは、あまりに矛盾しているとともに、あまりにも無知であると考えられる。

純情無垢にして、しかも美しき熱情と意気とをもつ若

き世代の尊き力を、悲惨と無知の姿なる戦争にかりたてることなく、喜びと調和と繁栄の地上天国の建設に捧げて頂くことは、地上のいかな

る大事業よりも偉大であり、価値あるものでなければならぬ。そのために私は私の全生涯を捧げて、少なくともこの南米全土をかけめぐって、み教えを若き世代に伝道する使徒として生きよう。

私はこう考えて身内に疼（うず）くような、身震いを感じずにはいられなかった。

そのためには単にみ教えを伝道して歩くだけでなく、道を知った、道を求める若き人々が人類光明化の地上天国建設の情熱に燃えて集い合い、語り合い、霊をみがき合う道場を作らなければならない。だから自分は、日本人の多くが新しい土地を求めて、奥地へ奥地へと行くのに反し、逆行してブラジルの中心地たる大サンパウロに出よう。そこに青年道場をこしらえよう。私はそう考えた。

そして、この有史以来不世出の大聖者——私はいつもそう思っている。なぜなら、尊師の存在はそれは確かに釈迦、キリストと等しく大生命なる神の権化であり、応化であることは間違いないからである。釈迦は仏教を創（はじ）め、キリストはキリスト教をお創めになり、二千年、三千年の人類の魂の救い主であるが、今日慈悲を説く仏の教えと、愛を説くキリスト教とが宗教の名において相争うという矛盾。悲しくは同じ釈迦を教祖と仰ぐ仏

教の諸宗諸派が、群象盲従式に相争い、同じキリストを教祖と仰ぐキリスト教の諸派が、犬猿もただならぬ間柄である、ということが宗教の世界に果たして許されてよいであろうか。

キリストと現れ釈迦と応化して、または数多くの聖者と現れ給うて、人類の迷いを浄めんとの大生命なる神の大愛は、慈悲心は、いかにあるであろうか。しかも、極むれば宗教の極致は一つにしていろいろ説き方が違うかに見えるのは、違う所にその無限智の輝きがあるのであり、だからこそ愛であり、慈悲であると言えるのであり、人の気持ちを考えず十把一絡（から）げの考えで救いを成就せんとするは、かえって智なき働きとして神、あるいは仏の真の姿を冒瀆（ほうとく）することになる。

だからこそ大神はここに宗教の真髓を説き明かして調和せしめんと現れまししが尊師の姿であるとするならば、なんとという莊嚴なる尊師の姿であろう。

ああ、自分はなんとという恵まれた存在であろうか。自分の性格としてもし釈迦の時代に生れ合せていたならば、行きて釈迦のみ弟子にならせて頂いたであろうし、キリストの時代に生きていたならば、行きてキリストを師と仰がせて頂いたに違いない。今史上の二大聖者と仰がる釈迦、キリストが成し遂げ得ざりし万教統合の大聖業を成就せんと現れましし大聖者に我れひれ伏して尊師と師弟の契りを結んで頂くことこそ、今死すとも悔いしないことではあるまいか。必ず尊師生きてまします祖国に

帰って、直接の御指導を私は受ける。私の心中をかけめぐるこの明るい三つの希望が私の毎日を支配するのであった。

しかもこの希望が未来に実現したい、して欲しいというようなアヤフヤなものではなく、既に出来上った、実現している、神の世界にあるものが私を通じて現れるという力強い動かすことの出来ないものであったことは、まことに驚くべきことであって、このことだけでも私は尊師にどれだけ感謝してよいかわからないものを感じるのである。

私は、この二つの希望を生きるために、先ず最初に『生命の実相』をひっさげてブラジルの邦人コロニアを行脚（あんぎや）してみようと考えて、ある日、その許しを兄に求めたが、兄は許してくれなかった。

ブラジルでひと旗あげるためには人手が足りないからと呼び寄せた私が出て行ってしまうならば、またもとの女相手になる。それは出来ないことであつた。それを後で考えてみると、兄もまた私と同じようなことを考えていたのであると思う。

クラドール・ジャポネース

私の願いが兄に許されず、なんと訳の分らぬ男であるうかと癪（しゃく）にもさわったが、それでも自分で独り飛びだす勇氣もなく過（すご）していたある日、ドウアル

チーナの町近くの日光植民地から、久保さんという人が兄を訪ねて来られた。「母が胃下垂で病んでいる。サンパウロで治療したけれども快（よ）くならないので、今自宅で養生しているがなかなか治らないので困っている。ある外人からクラドール・ジャポネースがいると聞いて、なんとか助けて貰いたいと思ってお願いに上りました」とのことであつた。

面白いことに兄は数日前から、充分解りもしないブラジル語で外人にこのみ教えのお話をしてどんどん病気が治るなら、言葉の解る日本人にこのみ教えをお伝えしたら、きっと喜んで頂けるに違いない、と考えて毎日神想観の折に、「神様、日本人で医者にも薬にも見放された重病人を与え給え」と、祈っていたということであつた。兄にとつてはまさに祈りが聞かれた訳なので、兄は喜び勇んで出かけて行つた。

数日経つてから歸つて来た兄の話は、その一つ一つが驚くような奇蹟の連続であつた。

久保さんのお宅に着いた兄は、病人の枕許で真理の話を語り続けた。二時間ほど話してから、

「おばあさん、あなたはその年になつてもまだなにかクヨクヨつまらぬことを心にためているのですか。人間は皆んな神様の子だから全部許してあげなさい」と、いかにもおばあさんの心を見透かすような言葉に、おばあさんはビックリしてちやうど催眠術でもかけられたかのようにすべての心のかたまりを棄てて、すべてを許し、すべ

てに感謝せられるような気持ちになった時、さしもの医薬がなんの効果をも現わすことの出来なかった病気が忽然と消えてしまったのである。立合っていた家族の人々の驚きにもまして、御本人の喜びは飛び立つ思いであつたろうと思われる。

喜びのあまりジツとしていられず、そこから少し離れた所に斉藤繁一氏が一家枕を並べて病んでおられる所に行つて、「クラドール・ジャポネースのお話を聞いたらこのように治つてしまったから、貴方も来てお話を聞きなさい」と勧めに行つたというのである。

この斉藤氏は日本で薬剤師をしておられた方であるが、ブラジルにお出になつて日光植民地で棉作りをしておられるうちに、氏は腸の病、奥さんがそこひ、子供さんがアメーバと枕を並べて病んでおられるという不幸な御家族であつた。御自分の薬剤師としての知識も技術も、日本からたくさん持つてお出になつた高価な薬も、なんらの役にも立たず苦しんでおられたのである。溺れる者は藁（わら）をもつかむというが、現代唯物的知識を学んでいる斉藤氏も、そのクラドール・ジャポネースに診てもらおうと思われるのだが、さて御自分は衰弱して立てず、奥さんは目が見えずで行けそうもない状態にあつたのだけれども、窮すれば通ずるのとえのとおり、目の見えない身体の達者な奥さんが、目は見えるけれども身体の弱っている御主人をおんぶして、二人が一人となつてお出になつたという。切に道を求むる所には道は開か

れるのである。

そのようにして久保さんのお宅まで来られた御夫婦が、真剣にみ教えを聞いておられる内に、お二人ともいつの間にか快癒されていたというのである（その辺のくわしいお話は谷口雅春先生が「自鳩」誌上にお書きになっていられる）。

久保さんのおばあさんや、植民地のインテリであつた斉藤氏御一家の、この素晴らしい奇蹟的治癒が植民地の評判にならぬ筈がない。次から次へとこのことが宣伝されて、病気やその他、いろんな人生問題で悩み苦しんでいる人達が盛んに訪れるようになり、兄は招かれては出かけ、出かけたら一カ月位は帰らず、帰ってくると癒された人々が一緒に連れだつて多勢押しかけてきて、門前市をなすという状態になり、喜びは喜びを生んで多くの人々が癒されていった。その兄について竹本清光氏はこんな風に書いておられる。

「松田先生の個人指導は独特であつて、大喝一声、立ちどころに奇蹟を演じた。その大喝が今もなお、多くの人々から懷しまれ、温かい微笑ましい話題を提供しているのである。」

家庭の問題、人生の問題が解決され、難病が消える奇蹟が宣伝され、生長の家は世の人々の渴仰的となつて多くの人が救われていった。それらの人々が報恩感謝のために謝礼を捧げられると、松田先生はそれを私せず、そつくり清野夫人に渡されて積み立て、御本部へ奉納な

さったのである。誠心の人、清廉潔白な先生は、何事も神の栄光に帰し、谷口雅春先生の御徳の然らしむるものであると恭謙（きようけん）な行者の姿勢を崩さず、その生涯を生き抜かれたのである。又清野夫人も良く夫君の心を知り家政をととのえて内助の誠を尽され、松田已代志先生は事業面を受けもたれて、布教活動に挺身せられる先生の後顧の憂いを除き、一家一丸となつて、生長の家のために、世のため人のために尽されたのである。独自の境地を毅然（きぜん）と生き抜かれた先生は、時流に浮いて大衆におもねつて布教しようとはしなかつた。それだけ谷口雅春先生のみ教えが最高峯であると信じ切つていられた。一度法の座につくと、峻厳なる気魄が堂を圧することもあり、又相好をくずしたお父さんのような感じもあり、禅機の妙諦（みようとてい）を自由奔放に發揮して指導し、深い真理をお説きになった。峻厳な中に人一倍愛深く、思い遣（や）りの厚い人、叱咤（しった）つた）されても後味の好い懐しい思い出を残す人、ただひと筋にみ教えを純粹に生き抜かれた先生であつた」

その時分、私達はコーヒーの契約農を終わつて、近くの既成のコーヒー園を二十七アルケール買つて移つた。そして家を作り、山を切りつつ、綿や米を作つたり、桑を植えて養蚕をしたりしていたが、兄はほとんどみ教えのために身を捧げ、ほとんど家の仕事が出来なくなつてしまつたのである。

このようにして兄がみ教えのために働くようになったので、私は私が伝道しようということを断念した。それは兄として思う存分活動させたい。兄と私とは本来一体である。兄がみ教えに働くことは私が活動することだ。でも兄が家のことを心配しながらみ教えに働くようなことでは充分力が出ないであろう。今の自分の光明化運動は、家庭や仕事のことは兄になに一つ心配をかけないように私がやっていくことである。

自分はやがて伝道の第一線に立つであろう。しかし今この与えられた境遇を完全に生き切ることが出来なかつたら、私は多勢の前に立つ資格は許されないであろう。将来、自分が自分の希望通り生きるためにも、自分は今外へ出て伝道することをしばらく断念し、家庭で仕事に全霊を打ち込むことにした。

でも、心の炎は益々燃えるばかりであつた。

父の死と私の結婚

斉藤繁一氏のこと

コーヒーの契約農を終わつた私共は、ほど遠からぬ所に大城氏と共に土地を買つて、家を作り引越した。

少しばかりのコーヒーの成樹もあつたが、コロノ（農場主が食糧を支給して収穫時に精算する歩合作者）がい

たので、コーヒーの方は外人にまかせて、私達は原始林を切って綿や米を作ったり、家の近くに桑を植えて養蚕をしたりした。

その頃、み教えによつて一家全部が救われて、喜びに満たされていた斉藤繁一氏は、感激のあまり一身を捧げてみ教えに尽さんと決意せられて、日本から持つて来ておられた高価なお菓も、棉作も一切を捨てて、もつともつと深く『生命の実相』を極めたいと、一家をあげて私の家に移つて来られた。

私達の家の一部屋をおあげして、家族のように起居も、寝食も、仕事も共にして働くことにした。

堅いものは箸とペンとしか持ったことのないであろう斉藤氏は、荒山のロッサ（伐採の下刈り）も、堅いペロバ（楠に似た常緑喬木）のデルバ（伐採）もカマラーダ（使用人）や私達と一緒に働かれた。見ていて、かわいそうなこともあつたが、人間神の子の真理を生きる修行の絶好の機会として強く生きられた。

奥さんも妹さんも家族と一緒に棉の中の除草も採取も、テレーロ（乾燥場）の仕事もやつて頂いた。

人間神の子の真理も単に頭の中で分つて、觀念の空まわりであつてはならない。それは力強く毎日の生活の中に生きなければならぬ。毎日の生活のそこに、神の子の天国が生活出来なければ、人類光明化のかけ声も、空念仏に終わってしまう恐れがある、というみ教えに従つて、まことに真剣な生活であつた。



前
に、ブラジル生長の家に残した松田大二郎氏(左)と同氏の右腕とな
った斉藤繁一氏。

兄は相変わらず招かれては旅に出て行き、帰りには多勢のお客様を連れて来ては、夜おそくまで真理の話で賑わうことが多かった。斉藤氏も、お客様がない時は、夜おそくまで『生命の実相』と取り組んで勉強せられた。お客様がある時は、昼は一所懸命働いて、夜は真理を語って真剣であった。

こうした一カ年の生活と勉強を終えられて、み教えの理解も深く、人類光明化への献身の自覚も、み教えに対する強い信念も出来て、いよいよ積極的にみ教えに立ちあがり、み教えの伝道布教に前進すべく、私の家を去つて、同じパウリスタ線のガリヤの町からいくらない所に既にみ教えに導かれ、先達として熱心に信仰生活に入っておられた、金子嘉三氏の隣りに移って行かれ、それから勇敢に伝道に着手せられ、幾多の奇蹟的救いを起こしながら精進せられた。真理の炬火はいよいよ、えん

えんとパウリスタ線からブラジル各地に燃え拡がっていった。

光明植民地青年会の副会長として敏腕を振っていられた城信夫講師も、その頃み教えによって肺病を克服し、斉藤氏の片腕となつて活動を始められたのである。

父の病氣治癒

話は少しさかのぼるけれども、私達が自分の土地に着いた時分のこと、日本の長兄から手紙が届いて、ふだん、身体の弱かった父の病氣が悪化して、年も年だから今度はあぶないかもしれない——という内容だった。私は少なからず驚きあわてた。というのは僕がブラジルに来たのは、父の生存中にどうかして父を喜ばせたかったからであつた。私は父が好きであつたから、金の儲かるというブラジルに来て、兄を助けて一所懸命働けば、十年のうちには多少お金を持って日本に帰り、貧乏な父を喜ばせてあげたい——私はただそれだけが望みであつて、そのほかに別の望みはなかった。無理に言うなら、どんなに働いても、金を儲けても、ただそれだけが人生の全部ではないと思つていたので、一所懸命働きながらも、なんとか立派な人間——金持ちになることとは違ふ——になりたいということだけは、私の脳裏から離れないでもつていた。

その父があぶない。あぶないということは死ぬかもしれ

れぬということである。私は私が日本に帰るまで父に死んでもらっては大変だと思い、死なせてはいけなと思うた。でも、私はいつ日本に帰るか分らないし、父の病弱は私が故郷を出発する前から悪かったのだから、ひよつとすると本当に死ぬかもしれない。どうしたらよいかと思うとジツとしておれない思いだった。

一日の仕事が終わって夕食の後で私共家族四人でいろいろ話合ってみるけれども、なんらなすべきすべもなかった。私は思い切って、「この二十七アルケールの土地を売払って、その金を全部持つて日本に帰って欲しい」と兄に言った。僕は『生命の実相』一冊を持つておれば、どうしても立派にやっていけるといふ自信があつたら、そうしなければ父は死ぬかもしれない。死んだ後で、たとえ巨万の金を儲けて日本に帰ってもなんの喜びがある。父が生きているうちにこそ、少しの金でも喜んで頂けるのだ。と、そういう気持ちで兄に泣いて願ったけれども、兄は兄で、「そんな僅かな金を持つて日本に帰っても仕方がない。それにお前や妹を父親から預かっているのだから、お前たちを放って行くわけにもいかない」と言つて聞いてはくれなかつた。

ではどうしよう、ということになった時、間に合うかどうか分らぬけれども『生命の実相』を送つてあげようということに相談は決まつた。

先ず「生長の家本部」に金を少し送つて、本部から父の許に『生命の実相』を送つて頂くということになり、

それは直ちに実行された。

朝夕の神想観にも、父の健康を祈り続けながら、故郷からの返事を不安のうちに待っていた。

二カ月ほど経ってから、日本の兄から手紙が届いたので、急いで封を切り、家族全部で顔をのぞき合せて読んでみると、「父は快（よ）くなった」と書いてある。私達はびっくりして喜んだ。なんとも言えない喜びだった。ちようど私達がブラジルで『生命の実相』を本部から送って貰おうと相談し、送金した時分病んでいた父が夢を見たというのである。その夢というのは、病んでいる父の枕許に一人の白髪自髯の神主のようなお方——と書いてあった——が現われて祈祷をして下さったという夢を見て、その翌日父は治っていたというのであった。不思議なこともあるものだと思うことより、父が治ったということだけがうれしかった。例えようもない喜びであった。

私にとって父の生存は私の全部であった。父あることが私の喜びであった。父なくば私は生きる望みさえないと思うほど私は父が好きだったから、父の病気が治ったということは言い知れぬ喜びだった。

その後、父は不思議にも健康を完全快復して青年も及ばぬほどに達者になった。

それにしてもあまり不思議な病気の治り方だったので、大方は『生命の実相』を読んでいたもので、その原理は“念の感応”であろうと思っていたが、念のために本部にお伺いしてみたが、それはやはり念の感応現象であると、

山口の萩の人が気が狂ったので、その兄になる人が本部に御指導のためにお伺いしているいろいろ御指導を受けているうちに、萩で気の狂っている本人が治ってしまった体験をつけ加えて書いてきた。み教えの素晴らしさがこうした体験でいよいよ裏付けられていくばかりだった。

父の死

奇蹟的に病気の治った父は、その後ますます元気になつて、達者で若い者のように働いているという便りが兄から度々来ていたので、私達も安心して働いていた。

ちようど斉藤氏もガリヤに移転せられて、賑やかだった家が急にひっそりしていたある日の日曜に、私はお隣りの大城氏のお宅で遊んで帰る夕方、町に行つて来たという竹越氏―大城氏の土地でお店をしていた人―から、「日本からお手紙が来ていますよ」と言つて、航空便の日本の封筒を渡された。日本からの便りはうれしく有難いもの、私は急いで封を切り、帰る道すがら読んで帰ろうと思つて、読み始めたけれども、その便りは喜びの手紙ではなく、父の死を知らせた世にも悲しい嘆きの手紙であつた。目の前が真暗になつた。歩みを止めて立ち止つて「父が死んだ」とつぶやいてみたものの、だからといってどうするすべもない、ここは日本を遠く離れたブラジルである。私は「仕方がない」と諦めのような、やけのような思いで力なく家に帰り、「パパイは死んだよ」

と言つてその手紙を渡した。兄は「エーッ……」と受取つた。コジンニヤ（炊事場）でそれを聞いていたらしい姉と妹が驚いて出てきたようだった。私はたまらなくなつて私の部屋に入つて戸を閉めて、骨のないもののように椅子に腰をおろして、机の前に放すことなく置いてあつた父の写真をジーツと眺めてみた。優しいばかりの父の姿が微笑えむかのように私を見つめている。

「ああいい父だった」「好きな父だったのに……」私の両眼には耐えきれぬ涙があふれ出た。それなのに、この父の姿は永遠にこの世界から消えてしまったのだ。私がどんなに働いて金を儲けて、またどんな立派な人間になつて故郷に帰る日があるうとも、「おお、よう帰つた。待っていたぞ」と喜んでくれる父はもういないのだ。何のために、おれはこの遠いブラジルに来たのか。ただ父の喜ぶ姿をこの世でひと目見たかつたからではなかつたのか……。喜ばせてあげたかつた……。

ブラジルに来る前に、腸チブスに罹（かか）つて、生死の境をさまようほどの病氣をした時、自分の病氣を忘れて看護してくれた父の姿が思い出され、目に浮かぶ。父のあの我れを忘れた看護で、私は今ここにこうして生きてゐる。その大恩ある父に、好きだった父に、私は何の御恩返しも出来ず、最後のお礼の言葉も言わずに父を死なせてしまった。父はきつと死の間際まで「ブラジルの子供達はどうしているか、ひと目逢いたいものだ」とやるせない思いで死んでいったのではなからうか。言つ

ても甲斐ないぐちを心の中で繰返していると涙はとめどもなく机の上に落ちるばかりだった。

私はとうとう耐えられなくなつてカーマ（寝台）に体を投げるようにうつ伏し、毛布を被つて思いつきり泣いた。泣くより仕方がなかった。いづごろまで泣いたろうか、夕飯も食わず、思い出しては泣き、泣いては甲斐ないぐちを繰返すばかりだった。

私が大事に大事に、掌の宝石としていつまでも離すまいと考えていたその宝が、永遠に私から消えて行つた。その宝は到底この世ではかけがえない尊い宝であつたのに……

翌日は晴れてきれいな日であつたけれども、私には輝く太陽も、澄み切つた青空も、希望のない灰色にしか見えなかつた。生きてゆく希望さえ失われた思いだった。

父に喜んで貰いたいために、ブラジルに来た。一所懸命働くのも、どんなつらいことがあるうとも、父を思えば私には耐え得る力があると思つていた。

特に『生命の実相』を読んでから、「神に感謝しても、父母に感謝せぬ者は、神の心になわぬ」と教えられ、また、「愛は『生命』の生長に必要な欠くべからざるものである」ということが出来るのであります。しかもこの大生命の愛が生きた肉体を備えて目に見え手で触れることが出来るように現われてきましたのが、両親の愛であります」『生命の実相』携帯版十九頁）と教えられ、それまでど

うして親子の縁が結ばれるのか、ひと度親子の縁に結ばれるや、親は身を粉にして子のために捧げる。なんら報いを求めることなく、ただ与え与えて、子よりよき成長を祈る親子、子を救わんがために、親の生命を捧げて惜しまぬ親心は、一体どこから来てどうした心であろうかと、あの手厚い父の看護で生命をとりとめて親心の有難さを身にしみるほど分りながらも、その親心の正体が分らぬままにブラジルまで来た私が、初めて『生命の真相』を拝読してその親心が、神の愛であると解り、地上の生ける神が父母であると解り、一層父母の有難さが解り、尊敬していた父であつたので、その父が永遠に帰らぬ世界に旅立つたということ、私にとって大きなショックであつた。確かに何か仕事をしたとは思ふけれども、仕事は手につかなかつた。悶々（もんもん）の幾日かが暮れていった。それは既に『生命の真相』を知っていたので、現象に泣かんとする自分と、永遠なるもの・不滅なるもの―真相―を肯定せんとする自分との争いであつた。

その時分、私は「幽明境を異にする父の靈に捧ぐ」という文章を書いている。今読んでみると、当時の私の心境が書いてあるので、次にそれを掲げてみたいと思う。

お父さん！

お父さん！

私にとって最も尊い存在であつたお父さん！

あなたはとうとう二度と逢ふことの許されない世界に旅立つてしまわれた。来る日も来る日も、一日も早くあなたの悦びの顔に逢う日を私の悦びとして、それを胸に抱いた私を後に残して、今は早や帰らぬ、いと高き神のみ許へ歸られた。

あなたの健康と平安を祈りつつブラジルの大地を相手に働いていた私は、あなたの死の報（し）らせを受け取つてただ呆然たるばかりでした。私の尊いものが現世から永遠に姿を消した。人の前では「仕方がありません」——なんと云つてよいのか、妙な諦めの言葉を出しておりましたが、家に帰り、部屋に入つて、優しい眼差しで私を見つめているあなたの写真を見つめ、「生きて再びこの父に逢ふことが出来ぬのか」と思うと止めどもない涙が流れてどうにもなりませんでした。

生長の家に導かれて既に五年の月日が流れて、私も少しは『生命の実相』が理解でき、「人間死んでも死なぬ」の真理が分つているつもりなのに、私は泣けて泣けて仕方ありませんでした。

お父さん！

あなたの死を知る少し前、私は同信の友を天国に送つてしまった父なる方に、お慰みの言葉を書いて送つたこ

とがあります。それはやはり生長の家の立場から、人間は死んでも死なない、本当の人間がいるということを書いたと思うのですが、後で知ったことには、なんでもその父なる方は私の手紙を経文代りに、亡き愛児の墓前に誦して我が子の冥福を祈られたということでした。

いついかなる時にも、この生長の家の信仰と信念とは決して動揺させてはいけなないと、常日頃固く信じているつもりであり、また道を求めてお出になる方々には、ひととおり分ったつもりで真理を語る自分でありながら、またしても無明の闇にさまよおうとする私は、どうしたというのでしょうか。

泣いてはまた気を取りなおし、父は肉体でなく、神と共に永遠に生きる生命であると思い直し、そのかたわら、また不思議に憂鬱になり、泣けてくる哀れな私でした。

一日の仕事を終えて、さてあなたの霊前に捧げんと誦す『甘露の法雨』には、あんなにも力強く、人間は物質に非ず、肉体に非ず、霊なり、生命なり、生き通しなりと書いてあるのに、永遠の輝く真理であり、この真理によつてのみ、人間は永遠の救いを得て、悟りの自道に至ることが出来るのに―それを知っているつもり私なのに。

朗らかになろうと思ひながら、深い憂愁に閉ざされて、日は過ぎていきました。

このような幾日が続いたある日の夕方、二人の青年が私の家を訪ねてくれました。まことに神のみ愛の尊さ、

「無」なる現象に捉われては泣き、泣いてはまた光りを求めて、悟りのはかばかしくない私にも、神の愛のみ手は差し伸べられて「現象に捉われるなよ」と、このお二人を天使としてお便わし下さったのでありました。

このお二人の青年は、この頃兄から生長の家のみ教えを伝えられ、暗黒の世界が極楽浄土に変わってしまったて、毎日感謝と喜びの生活をさせて頂いているので、お導き下さった先生へのお礼と、もつと真理を深く身につけたいから、一週間ほどお仕事の手助けをさせて頂きながら、み教えを教えて下さい、と言ってお出になられたのでした。

私はお二人の求道の真剣な熱情に頭がさがり、ちょうど兄が留守でしたので、昼は外に働き、夜はメーザ（テール）を囲んで真理の話を語りました。お二人はそれぞれ真剣に眼をさらのようにして聞いて下さいました。

ところがお父さん！ 煩惱の闇に惑わされて、暗い憂愁に閉ざされていた私は、その真理を語っているうちに、心がいつしか明るくなり、死んだあなたは永遠の生き通しの生命だ、私の生命の中に生きていらっしゃるのだと実感が、理屈でなしに感じられて、喜びが潮のように押し寄せてきまして、今度はうれしさにまた泣けてくるのでした。この時ほど、このお二人が天使として感じられたことはほかにありません。

お父さん！

思えば私はまだ形あるもののみを見ている習慣から抜

け切らずにいたのでしょうか。生者必滅会者定離、大聖釈尊の千古不滅の大真理をしみじみと味わうことが出来ました。

だからお父さん！ 私はもう泣かない。泣いてはならないのだから、金剛不壊の永遠の真理を求めて求道躍進せんとするものは、移り変わる現象に捉われて嘆き悲しんではいけないのでした。お父さん！ ついこのあいだ、私は谷口先生がお書きになった「梅翁を偲ぶ」という、御文章を拝読させて頂きました（「梅翁」とは谷口先生の御結婚の仲人で日本心靈学界の大先輩）。その中に谷口先生の奥様は、

「現象なしと思ひながら、泣けて泣けて仕方がありませんでした」とおっしゃっています。

谷口先生は、

「かあさん、梅翁は死んではいないのだよ」とおっしゃっています。

今の私にはこの両先生のお言葉が解るような気がするのです。私も求道の旅の一人として谷口先生のように素直に、ハッキリと「人間は死んでも死なないのだよ」と言い得るところまでころんでは起き、起きてほころびつつ進んでいきたいと思っております。

では最愛の父よ！ 今はいと高き靈の世界に住み給う父よ、あなたの霊界における向上と冥福とを、ひたすらあなたの子は地上から祈っております。

そして父よ、導き給え。

（附記）

この手紙を書いて間もなく、日本から届いた新しい神誌をむさぼるように手に取り、開いたところに、「親の死に接して泣かないのが悟りではない。泣いて泣いて後が残らないのが悟りである」と書いてあった。私の心を見透かして、書いて下さったようなこの御文章で、私の心は、見事に現象の父への執着がなくなってしまった。導かれている自分をしみじみ有難く思う。

見 合 い

私の父が亡くなってから間もなく（父は昭和十四年七月十二日昇天、解脱名を西光院児誉浄円大道居士）、その年の暮れ頃、私の結婚の話がもち上った。

私の結婚のことについてはその前、兄と同航海の坂口夫人（前ビラ・プルデンテの自鳩会会長）がご自分の妹さんを日本から呼び寄せて下さるというので待っていたけれども、日支事変が大きくなっていった、その娘さんの兄さんが戦争に行ってしまったので、家の人たちが相談した結果、年取った父母が心配するので、遠いブラジルまでやることは出来ぬ、と断わってきたというようなことがあって、多少遅れてしまって、私はその時二十九歳になっていた。

ある日、ガルサ市で写真業を営んでおられた舟島という人が、ガルサ市から四十キロほど離れたファゼンダ・

ベラ・ビスタに棉作をしている人の所にいい娘さんがいるからと言って、私を見合いに連れて行かれた。

ファゼンダ（大型農場）の事務所のある所でオニブス（乗合自動車）を降りて、それから三キロほどコーヒー園の中の道を歩いて行くと、コーヒー園の下の方に一面の棉畑が見え、その棉畑の中にタブインニヤ（大型の桎）で屋根を葺き、やしを割って壁にした家があった。その家に目指す私の半身になるかもしれないという娘さんがいるというのである。

その家に近づく、家の近くの棉の中で、たくさんの人が草を取っている中に若い娘さんが一人いたが、パリヤ（トウモロコシの皮）のぼうしをかぶって向うを向いていたので、どんな娘さんか判らなかった。私はこのひとかなアと思った。

すると部屋の中で後ろ向きにミシンを踏んでいる若い娘さんが窓越しに見えた。この人かなア、どちらかなアと思いつつながら舟島さんの後ろからついて行った。

年は取っていたが、さすがに生れてはじめての見合いとなると、やはりなにか胸のときめくのおぼえるのであった。



結婚直前の著者—1940年2月

家の中に招じられて入っていくと、頭のはげたまじめ

そうな、この家の主人が出てこられて挨拶が交わされた。話が好きと見えていろいろ話しかけられるが、舟島氏はおとなしい人とみえてあまり話さないのです、つい私が応えて話していると、そのはげ頭のおじさんが、

「この間、うちの息子がフアゼンダ（事務所のことらしかった）に用があつて行きますと、その監督が、この本は誰のものか分らぬが、もう長いことここにある。持ち主が分らぬらしいから、お前持つて行かぬかと言つて、うすい雑誌をもらつて来たのでありますが、それが宗教の雑誌で『生長の家』つていう、実に立派な教えを書いたものですが――この教えをブラジルで誰かやっている人はおられないものかと思つているのですが……」と真剣そのもののように語られるのである。

そこで私もびっくりして、「実は私はその生長の家を四、五年前から信仰させて頂いている者です」と言うと、おやじさんびっくりしたり、喜んだりして、

「やあ！　そうですか、それはそれは」ということになつて、それから生長の家の話に花が咲いて、私は夢中になり、得意になつて話しかけた。おやじさんは目をまるくして、「ホー、ホー」と感心して聞かれるのであつた。

私は完全に「見合い」の事を忘れていたし、一人の娘さんがお茶を汲んで来たらしいが、それにも気が付かなかつた。だからどんな娘さんであつたか残念ながら見合ふ事も出来なかつたし、印象も残らなかつた。

どの位お話をしていたのか、しばらくたつてから、ふ

と私はオニブス（乗合自動車）の帰りの時間を思い出して急いで時計を見ると、あと二十分しかなかったので、それまで私達の話の横で黙って聞いておられた舟島氏に、「もう時間ですから帰らせて貰いましょう」と言うと、舟島氏もあわてて、

「ちよつと待って下さい」と言つて、おやじさんをさそつて外に出られて、なにかボソボソと話していられたが、私は気が気でなかった。

話が終わったらしく二人が入つて来られるや、私は急いで腰をあげて「おじやましました」と言つて外に出た。オニブスに遅れては大変と思つたからである。

おまかせ致します

これが私の見事な「見合い」であつた。

コーヒー園の中を急ぎながら、「変な見合いもあつたものだなア！ それにしても私はハゲ頭のおやじさんと見合つただけで、とうとう相手の娘さんとは見合わなかつたが、あの畑にいた娘さんかしら、ミシンを踏んでいた娘さんかしら……」。そのうち舟島さんがなにか話し出して下さるものと思ひながら、道を急いでいるけれども、いつまでたつても舟島さんはなにも話さないのです、業々にやした私は、

「舟島さん、話は一体どうなつたんでしょうか」と尋ねる

と、

「いや、あちらのお父さんはとてもお氣に入られたようですが、お父さんの言われるには、自分は日本から青年の宿をして、青年と働いてきたから、たいがい話してみるとどのような青年かは分ります。自分としては申し分ないが、結婚という事は、第一本人の気持ちを聞いてみなければ分りませんし、家族とも相談してみなければなりませんので、そのうち御返事を致しますとのことでありました」と言われるのである。

もつともな話である。その大事な娘さんが見たのか、見ないのか、こんな「見合い」つてあるものかと思つたが、先方がせつかくそう言つておられるのに、こちらから「いや」だと言えばこの仲人の顔が立たなくなるであろう。自分は『生命の実相』のみ教えて、自分に与えられる半身がどのような人であろうとも、必ず幸福にしてあげる自信はあるから、自分がとやかく言うより、この人の顔を立ててあげよう——こう決心をして、

「先方がそう言つて下さるのでしたら、一切はあなたにおまかせ致します」と言つたきり、そのまま二人はひと言も語らず、黙つて歸つて来た。

その時、私はこの舟島氏から、「人間は、特に男性は、言うべきところはハッキリ言い得る人間にならねば男の魅力はない。男らしい、魅力ある人間は、言うところはハッキリ言い、黙るところは黙るべきである」ということを、それこそ痛切に教えられた。

舟島氏と別れて、ガルサの井本写真館に着くと（井本氏と舟島氏は義兄弟）待っておられた金子嘉三氏や井本氏が私の話を聞いて、

「そのようなことであれば、先方からご返事がくるのを待っている訳にはいかん。早速、こちらからお願いに上がらなければ……」ということになり、話はほとんど拍子に進められていって、翌昭和十五年の二月十一日、紀元節のまことにおめでたい日本の建国祭の当日、私の新しい人生の門出が出発することになったのである。

谷口雅春先生は、人間の理想の結婚について、「その人の結婚が正しいか否かは、その人の結婚を周囲の人がどのように喜んでいるかをみれば分る……」というような意味のお言葉をお書きになられたことを覚えているが、そのような意味で私の結婚をみる時、昭和十五年といえ、ちょうど紀元二千六百年にあたるので、日本国中はひとつになって、それこそ大きなお祝いのあつた年である。思えば二千六百年のその昔、天祖のご神勅を奉じられたカムヤマトイワレヒコノミコトが、生長の家大神の御導きによって、「東にうまし国あり、まことに国のも中か」と言ってみいくさを進められ、六年の長きにわたり、まつろわぬものどもを平げて大和の国、うねび山のふもとに都を定め給い、第一代の天皇の御位につかせ給い「八紘一宇」「六合一都」の雄渾偉大なる日本建国のいしずえをかため給いし日、いともめでたき日であることを

思えば、私の結婚は八千万同胞、否天地一切やおよろずの神々に祝福されていたとも考えられて有難いばかりであつた。またもうひとつは、既に結婚していた妹が、結婚のお祝いに來て語るところによると、つい二、三日前、死んだ父の夢を見たが、その夢の中で父は「已代志が、私が選んだ娘を嫁に貰うようになったから、私もこれで安心だ」と言われたと語るのであつた。私の父は、その肉体は亡くなつても、死なない魂が靈界から私のことを心配して、私の妻を選んで下さったのかと思うと、どの程度の心靈学的価値のあるものかは判らないにしても、私はそれを事実として有難く感謝せざるを得なかつたのであつた。

だから、私の結婚はこのように恵まれて、めでたい日に式を挙げる事が出来たのも、やはり『生命の実相』の尊い御導きを頂いていたからである、谷口雅春先生の御恩の深さに改めて感謝し、報恩の赤誠を捧げねばと思うばかりである。

私を助けてもらいたい

結婚式のその夜は、兄が生長の家の運動をしていくれたお蔭で、多勢の人がお祝いに來て下さつて、養蚕小屋で盛大な披露宴をして下さつた。

披露の宴が済んで、私達の部屋に入った私は、恥ずかしいばかりの、そして疲れている花嫁を前に、私の抱い

ている理想を、寝もせず語り続けた。

「私の今日あり、また明日あらんとすることは、これすべて谷口雅春先生の『生長の家』のみ教えよりほかはない。だから自分は、自分の一生を谷口先生に捧げる覚悟をしている。自分は今、こうして百姓をしているが、やがていつの日か、このみ教えを伝えてブラジル中を歩く人間になる。そして、今まで信仰は青年となんら関係がないと考えられていた間違った信仰観を打ち破って、将来何事か成し遂げようと希望に生きる青年にこそ、この人間神の子の真理を伝え、強い信念に生きる時、人生は心の影であるから、その人の希望する人生が心の影として現れてきて、生き甲斐のある人生を生きるのであるから、この真理を伝えるために多くの青年が集まる場所、道場をも作りたい。それは道なき所に道を開くのであるから、楽でないかもしれない。時にはつまづき、倒れ、傷つく事も覚悟している。でも開かれた道を喜んで通る人があつたらそれで満足である。また、雅春先生御生存中に必ず日本に行つて、直接御指導も頂きたいと考えている。それは私の性格であり、私の憧れである。人生に希望を失つた私を、このような生き甲斐ある人間に導いて下さつた谷口雅春先生とお会いして、直接のお弟子にして頂きたいというのが私の宿願なのである。自分はこのような理想のもとに生きていくつもりであるから、どのような事があつても強く耐えて貰つて私を助けて欲しい。それがあなたを愛することでもあり、またきつと

あなたを幸福にしてあげることであると思っている」

私はこのようなことを夜の明けるまで話し続けた。そしてこの話は三晩続けられた。家内は「生長の家」のみ教えはぜんぜん知らなかったもので、なにかしら難しいことを言う人だなアと思ったらしいが、結婚してしまったのだから仕方がないと思って、黙ってうなずいて話を聞いてくれたのであった。

四、五日たったある日、私が畑から帰ってみると、家内の姿が見えない。結婚当時は誰でもそうであると思うのだが、妻の姿が門口で迎えてくれるのはたまらなくうれしいものであるのにどうしたのかと思って手を洗って部屋に入ってみると、毛布を頭から被ってフーフー言って熱を出して寝ているのである。どうしたのかと聞いてみると、午後になって妙に寒気がしたかと思うと熱が出てフラフラするので休んでいて申し訳ないと言っている。私は『生命の実相』をなまかじりしているので、ありもしない病気を自分で作って苦しんでいるのは、『生命の実相』を知らないからだと思って、机から『生命の実相』を取り出して、熱でうなっている妻の枕許で朗々と読み始めた。妻の熱はだんだんなくなつて、翌朝はケロリとして起きるので、治つたものと思つて喜んで畑に行き、夕方家に帰ってみるとまたフーフー言つて寝込んでいる。私はまた『生命の実相』を読むということがちやうど一カ月続いた。家内は、人がこんなに苦しんでいるのに薬一服くれないでなにか難しい本ばかり読んで、この人は

少し変なんだと思って、うらめしく思ったこともあったらしいけれど、聞くとともになしに聞く『生命の実相』の真理もいくらか分るような気にもなり、一カ月目にはきれいに治ってしまった。マレイタ（マラリア）だったらしいのである。

私がこのように一途な性（たち）であるので、家内も内心この人についていけるかしら、と人知れず泣くようなこともあったらしいけれど、既に四十余年間、黙ってついてきてくれた。今しみじみ有難いと思っているのである。

法子が生れた

やがて妻は妊娠した。結婚した次の年、昭和十六年三月一日のめでたい生長の家発祥記念日のいともよき日に長女法子が生れた。

その日、兄はガリヤの斉藤氏の所で記念日のお祝いがあるので行っていた。私は畑に除草に行っていたが、今日赤ちゃんが―私の子供が生れる、私もいよいよ父親になると思うと仕事が手につかないのである。私は仕事を止めて家に帰ってしまった。

お隣りの大城さんのおばさんが助産婦代りに来て手伝って下さっていた。私はサーラ（居間・応接間）をウロウロして出たり入ったりしていた。自分で自分の行動

に氣もつかないで歩いていたらしいのである。そのうち元氣な泣き声がして赤ちゃんが生れたらしい。「まあ、大きな赤ちゃん」とか、「おヒメさまですよ」とか言う声がひとり言のように聞えてくる。それまでウロウロ行ったり来たりしていた私は、なにか力が抜けたもののように、どつかといすに腰を下して、さてそれでは男であろうか、女の子であろうか、男ならどこからお嫁さんを頂こうかと考えていたが、今、女の子と分ればどこへご縁があるのであるうかなどと考えていた。

たった今生れたばかりの子供の上に、二十年後の成長した子供の将来を考えている親心を発見して、ああこれが親心なのか――私を生んで育てて下さった私の父母も、この今の私の心と同じであつたろうと思い、今、父親というおごそかな、しかも偉大なるクライを神から頂いて言い知れぬ喜びとともに、親心のはかり難きを体験させられたのであつた。

しばらくたつて赤ちゃんのうぶ湯が済むと、大城さんのおばさんが、

「さあ、先生ももうお父さんですよ、親子の面会をして下さい」

と言つて下さつたので、急いで産室に入ってみると、まるまる太つた、ほんとうに真赤な顔をした赤ちゃんが安らかに目をつむつて母親の側に寝ている。そのかたわらに、今は母親の地位に立つ妻が偉大なる大業を成し遂げて安心し切つて、柔しい眼差しを我が子の顔に注いで

いる。その安らかな母と子の姿から光りがさしているようにさえ考えられて、尊いものに接する気がするのであった。

神の偉大なる聖業を目の前に見て喜びが湧いてくるのであった。

妻よ、母よ！ 有難う！ 子よ、安らかであれ！ おれは夫として、父として強く生きるぞ、と、心の中でつぶのであった。

兄の計画

ガリヤの斉藤氏と共に、み教えのために家に帰るいとまもないようにアチコチとみ教えのため歩いていた兄が、ある日ヒョッコリ帰ってきて、

「今までいろいろお世話になっているバウルの富樫通雄様が南パラナに土地を買って、それを売出されるとのことであるから、幸いその土地売りのお手伝いを、アチコチ旅行の都度させて頂き、特に誌友の方々に買って頂いて、生長の家村を作って、ただお金儲けだけに忙しい生活でなく、新しい土地を開拓して、生長の家の信仰を生かし、自分の郷土として落着いて、お互い助け合い、子弟を教育して、相愛協力の地上天国の手本になる村を作りたい」ということを言い出した。

それは私の理想ではなかったので、あまり乗気にはならなかったが、悪いことでもないので賛成すると、兄は

いよいよ本気になって、まず土地の視察に行ったり、アチコチの誌友に勧めてあげたりして歩き始めた。

人に勧めるにはまず自分が買って入植する必要があるというので、百アルケールを買い、最初に兄夫婦がムダンサ（引越し）し、自分の土地経営はコーヒーの契約者を入れてコーヒーを植え付け、自分は植民地の中央の低い丘を、植民者の共有地として地主より貰い、そこに集会所や学校などを建てて、コーヒーを植えて植民者の共同作業によって耕作し、会のデスペーザ（経費）はそこから生み出すことにして、その共同作業がまた植民者同志の親睦を増すことになり、日曜日にはお互いに集会所に寄り集まって信仰を語り合い、子供達のためには日本語学校とグルッポ（小学校）を建てて、日本人の魂を失わぬ、そしてブラジルの国に役に立つ人間を作る……、という計画を立てていた。

誌友の入植者も何家族か出来て、兄は大変な喜びと希望で張り切っていた。

そこで自分の土地に四家族のエンプレイテイロ（請負人）も入って頂いたが、パラナの方へいろいろ世話に行っていた兄が、まだ入植もしないのにエンプレイテイロとけんかしたといって帰って来た。私達夫婦は今の土地に残っていて、パラナのコーヒーの収入があるようになってからムダンサする話合いになっていたけれども、兄の話を聞いて、これは兄の性格ではいろんな点で人との調和を欠くことが多いに違いない。自分も一緒にムダ

ンサしなければきつとうまくいくまい、と考えて、土地を売ってみんな一緒にムダンサすることにした。

それまで、私は兄の計画に心の底から賛成ではなかった。それというのは、私の入信の覚悟は、どうかして、私の一生を生長の家の運動に捧げたい。そのためには奥地へ行くことを私は好まなかった。ブラジル全土をかけ歩いて廻るには、どうしてもブラジルの中心であるサンパウロに出るべきだと考えていたのである。

多くの人たちは新しい土地を求めて奥へ奥へと行くけれども、自分はそれに逆行して、サンパウロへと出たい。だからこの際、兄のパラナ移転を機会として、兄と別れてサンパウロへ出るぞ、と心ひそかに覚悟をしていたけれども、兄の話の聞いていると、パラナの土地計画も、兄の理想郷作りも、私が行かないとうまくいかないのじゃないかと考えて、それまでの心の中の私のイデア（考え）をしばらく延ばすことにした。

でも私の心は失望もせず、いつかは自分の理想通りサンパウロに出て、必ず生長の家の運動をやるとの信念はびくともしなかった。それはかえって私の理想が実現への一段階に入った。そのための環境の脱皮であると思つてうれしかった。だから、なにもかもすべて神のみ心にゆだねよう、神が私にもっと適当な時に適当な形でお使い下さる時が必ずくると考え、心のうちは朗らかであった。

不焼の山

土地は案外早くよい条件で売れたので、昭和十六年六月住み馴れた思い出のリベロン・ボニートに別れを告げて新しい希望の地、南パラナのイバイチに向って出発した。

すでに作り荒らされた土地ばかりで、原始林などほとんど見当たらない雑草だらけの、しかも起伏のはげしい殺風景な見馴れぬ土地を、ムダンサの荷物の上にパンノ（布地）で屋根をして、その中に入って眺めながら行く道々、私の心はあまりうれしくなかった。それは自分達の行く先に、あまり立派なものが待っているような予感がせぬのである。第一、土地の形があまり高低がありすぎることで、次にその土地がまた湿気が多くて耕作能力が充分出せないのではないかというような気がしてならなかったのであるが、残念ながら、この予感は当たってしまったのである。

植民地の入口に着くと、先着の入植者達がセラリヤから松のうす板を買って来て、それを屋根代りに、かべ代りに両方から立てかけて三角形の原始的な仮小屋を川べりに作り、自分の土地まで自動車が入る道が出来るのを待っていた。

植民地内の道はカボクロ（土着となった移住者の子で、インジオの血を混じえた者が多い）が馬で通る道しかないの、その道の両側を切りはらい、切り崩して拡げて、

自動車を通れるようにと入植する家族の男の人達は総出となって毎日道作りに働いていた。私もこれらの人達に混じって働いた。

新しい道に車が入ると、乾いている時はどうにか通るが、雨でも降ろうものなら、前にも後にも行けず、立往生することが多かったので、そのような時は綱を持って来て多勢で引っぱることが多かった。でも同じ気持ちで来ている人々の心は開拓の意気に燃えていたし、誰も懐しい村人ばかりであって、不平を言う者もなく、誰彼というでなく、お互いに助け合いながら朗らかであった。

私達の土地は植民地でも一番奥だったので、最後まで川べりの仮小屋に辛抱せねばならなかった。毎日毎日、その仮小屋から道作りや、自分達の土地の仕事に通った。雨の日などズブぬれになりながら、しかもサボン（石けん）のようにすべる道を、酒に酔った人のようによろよろしながら行き来するのはつらい思いだった。開拓とは容易ではないとつくづく思ったりした。

やがて道が出来、自分の土地に移っても、ここでもまた仮小屋を作って入った。

山切りは外人のカマラーダ（使用人）に頼んで二十アルケール切らせていたが、その年はとても雨が多くて、山切りははかどらず、また乾かず、切りはじめた方は木の芽が出て青くなってくるという有様で、ようやく山切りが終わり、僅かの日照りを待って山焼きを試みたが、谷間の多い土地なので火も通らず、勢いも出ず、不焼け

に終わった。

四家族のコーヒーの契約者には、それぞれ適当なだけ面積を計って畑を分けてやり、家を作り、コーヒーを植え付けて頂くようにしたけれども、不焼けの山の片付けは容易ではなく、雨は多く、契約者の方々も、山のよく焼けた所に何か植え付けなければ、来年の生活にことかくというので、お米やミーリヨ（トウモロコシ）、フェイジョン（金時豆に似た小粒の豆で米飯に混ぜて常食する）等の植え付けをしなければならぬので、その方が忙しくて、とうとうその年はコーヒーの植え付けは出来なかった。

なにもかもうまくいかないので、一所懸命働きながら、私の心はつゆ時の空模様のように暗かった。

青年会をつくる

このように、我々が植民地作りに懸命になっているうちに、東亜の空は雲暗く、昭和六年柳条溝事件に端を発した日支の争いは十年間も続き、あの広い支那全線に日本はいくさを進めていた。

でも、次々に入る戦争ニュースは日本軍の勝ち続けが知らされていたので、日本神国を教え込まれていた我々は、日本軍の勝利はそれは当たり前前とは思っていたが、やはり胸のすくような喜びを感じたものだった。

私は少年時代からどういうものか、兵隊さんになって偉くなろうと思ったことはなかった。自分の性格が静かで内気であつたからだと思う。

ところが『生命の実相』を読み始めてから、段々と性格が明るく、積極性をもつようになり、み教えが少しずつ解つてくると、日支の戦争に行きたいという気持ちが強く湧いてくるようになった。

私の祖国日本が、あの広い支那の国を相手に戦争している。祖国を護るために日本の国にいる大人は一所懸命に戦っているのだ。私は兵役検査直前にブラジルに渡つた。心底に戦争忌避などの思想的なものがあつてのことではなかつたし、私の祖国防衛に対しての心情は、ひいきチームに力を入れるに似たようなものがあつたが、愛する祖国が戦いに敗けることは潔しとしない青年らしい義憤でもあつた。

このことは、戦争終結後に同胞間に発生した悲劇に通ずる一般的な感情で、純粹な民族意識であると思うが、私は帰国、参戦を真剣に考えるようになっていった。

おのれを捧げて国家に報ずる。なんという喜びであるうかと、所謂（いわゆる）“勝ち組”と言われた人々の行動様式を十把一絡げに、「狂信」等と思想的な迷妄の徒とする風潮は正しい認識ではない。

民族の誇りを失つては異国での生活はまことに味気ないものとなる。誰しもが祖国の弥栄（いやさか）を願い、祈り、もだえ苦しむことがなかったならば、その民族は

亡びる運命を辿ることになるであろう。しかし現実には、私には帰国も参戦もそれは許されなかった。

それは昭和十六年十二月八日、日本が英米に宣戦を布告し、ハワイの真珠湾を不意打ちし、香港・マニラ・グアム・ミッドウエー等、勇ましく爆撃を始め、今までの日支事変は世界大戦に拡大されていった。

ブラジルも昭和十七年の一月二十九日には、米と共同体制をとって日本との国交は閉ざされ、一切の集会、公衆の場所で日本語を使うことは禁止され、今まで日支事変を川向うの火事のように見ていたのが、いよいよ身近に火の粉が降りかかり、燃え始めたような状態になってしまった。そして、サンパウロ州ではアチコチで日本人が不法な圧迫を受けているという噂がどんどん入ってくるようになった。

私達の植民地では、我々が入植してから町のモビメント（動き・商況・動態）が増えたので、町の有力者が大変好感をもっていてくれたので、なんらの圧迫もなく、むしろ、ブラジル人よりよくして貰っていたけれども、日本が世界を相手の戦争を始め、次々に勝ち取っているというニュースが入るとなにかジツとしていられないものがあった、幸い道をはさんで隣りに土地を買って入植しておられた城さん御兄弟（青年会副会長の城信夫氏兄弟）等と相談し、誌友の家庭に呼びかけて十三人の同志で青年会をつくり、名前を「生長の家青年会アウローラ支部」とした。

それは当時すでに日本本部では「皇運扶翼生長の家青年会」が結成されていて、宇山熊太郎少将が会長として活動していたので、その支部という訳だが、国交が閉ざされては本部に登録することは出来なかった。

その時の青年会の役員は、私が会長で副会長に城静織氏（信夫氏令兄）、会計・城信夫氏、班長・鈴木吉之助君、蓮沼新之丞君、等だった。

発会の日はちょうど二月十一日の紀元節の日で、山下将軍がシンガポールを落す日だということで、未明に団員全部勢揃いして日本の戦勝を祈り、明けるのを待って植民地内の幹線道路を修理し始めた。シンガポールを陥落させるつもりでやれ、という意気込みで一所懸命だった。城副会長が、修理が終わって夕礼をし帰る道しながら「生長の家はこんなに働かねはならぬのですか」と、笑いながら語られたが、全くものすごい勢いでよく働いたものだった。

法子往きて帰らず

昭和十六年二月二十日、長女法子がにわかにたった四、五日の病気で、神のみ許に召されてしまった。

まだ土地の開拓もなかばなので、家も仮小屋暮しであつた。生れて満一カ年を過ぎたばかりで可愛いばかりであつた。よく太っていて、それにとってもよく笑うので、隣り近所の子供達が喜んで、引張りあって子守をしてく

れるので、母親のところには、お乳を貰う時と夜だけというほど可愛がって貰っていて、親である私たちに似合わぬよい子供だ、と思つて喜んでいた。土地を開くのに身体のことばかりでなく、いろいろの問題で身も心も疲れて仮小屋のうす暗いランプの光りで食事を取るときも、この法子は私たちの心の中から一切の暗い心をふき消してくれる天女のようなものだった。初めての子供でもあつたし、この法子は私共夫婦の明るい希望であり、私たちの力の泉であり全部であつた。その子が、急にお乳も飲まなくなったり、日頃の笑顔もなくなつてなにか力なく泣くようになったので、ちよつとした軽い風邪ぐらゐに思ひ、そのうちすぐ治るものと思つて忙しいままに私たちは毎日畑に出ていて、夕方帰つてから神想觀をしてみたり、聖經を誦んでみたりしたが更に効き目はなく、だんだん衰弱していくばかりであつた。そして彼女は両親が堪えがたい悲しみの涙を両眼に満たして見守つている心も知らぬかのように一度と帰らぬ世界に永遠に旅立つてしまった。

法子がとても悪いといふので、畑の仕事を止めて家に帰り、あの明るい笑顔がなくなつて、それに代つておれ切つたような顔をしてあえいでいるような我が子の姿を見て、恐いほど私の心は波打ち、荒れ狂うのであつた。

「この子は死ぬのではなからうか、死なしてはならない。この可愛い天使のようなこの子を死なしてはならない。

どうかして助けてやりたい。否、きっと治る」

そう心の中に念じながら、その病む子を私は抱きもせずジーツと見つめていた。私は努めて自分の心を動揺させまい、子供の姿は親の心の影と教えてある。知らずして間違いの心がこの父にあつて罪もないこの子にそのような苦しみを与えているのであるならば、わが子よ、この父を許してよ、と祈る思いでわが子の実相円満健康なる姿を観るようにと、努めてはみるのだが、目に見える姿に捕えられてしまつて、自分でもあまり自信はなかった。

私の兄が（これは後で聞いたことであるが）親身になつて抱きかかえてみてくれたが、私が子供の死ぬのも知らぬかのように何知らぬ顔をしていると言つて、弟には親としての愛情がないのではなからうか、よそ事のように考えているのではなからうか、と思つて、少し氣付くように、行つて叩いてやろうかと思つた……とある人にもらしたそうであるが、私はこのやるせない心の乱れが純な子供の心に映つてはかえつて病氣のよくなるのを邪魔するに違いない、と考へて衰えていく我が子の姿をなすすべもなく見守つていたのであつたが、法子は切なるふた親の祈りも願ひも知らぬかのように、父よ、母よ、さようならとも言わず、どこへ行くとも告げることなく静かに目を閉じてしまつたのである。

断腸の賦

法子はとうとう死んだ。父の死の報を受けた時もつらかった。太陽が光りを失った淋しい感じだった。手の中の宝がいずこともなく失われた淋しさだった。生きてなんの甲斐あらんと思われる切なる悲しみであった。でも父の死は紙に書かれた手紙で知ったので、愛する子が今、目の前にいて、目の前で再びもの言わぬ亡きがらとなつてしまった法子の姿を見つめている悲しみと違う。今は切実に身の切られる悲しさ、淋しさである。

わが子の場合は、今日の前に何物にも代えがたい尊い宝であつたわが子が、父母の目の前にいて、次の瞬間には永遠に帰らぬ姿に変わっているのである。それを見つめている哀れさ。肉体から去りゆく生命を引きとめるなんらの力のない自分の哀れさ……我が子であつた。いとしい我が子であつた。その我が子が今いずこにいる。ああ法子はやはり神のみ子であつたのか。そして神のみ許へ帰ってしまったのか。その神のみ子がどのような深い御縁でわが子と生れ、父と呼ばれる私とむすばれたのであろうか。神の奇しき尊いえにしによつて親子の縁がむすばれたものであるならば、せめて「父よ、さよなら。母よ、往きます」とひと言でも言つて欲しかった。どこが痛い、とだけでも言つて貰いたかった。

僅か一力年の短かい親子の縁を結んで今法子はいずこに往つたのか。帰り来ぬ法子の霊に向つて、なんの甲斐

ない小言を心の中でつぶやきながら、ただ呆然と氣を失った人のようにジイツと今は物言わぬ我が子の仏のよ
うな死顔を見つめていると、両眼から止めどもない涙が
次々とほほを伝って流れるばかりであつた。ああ、死は
ないというのに！

いつの間にか死んだ法子の枕べには線香が立てられ、
ローソクがともされてユラユラと揺れ燃えていた。

ああ、傷心とはこのことか、断腸の思いとはこの思い
であろうか。疼くような痛い涙をふきもせず、私は鉛筆
と用紙を持ち出して、今は亡きがらとなつて安らかに眠
る我が子の顔を描き始めた。

開拓の忙しさに、形見となるような写真一枚も撮つて
ないので、わが子の姿を顔だけでも絵に書き残したい。
いつまでも失いたくない。親のそばにおらせたい、我が
子であつて欲しい。これもまた親心というのであろうか。
そうするよりほかになすすべもなく、慰めもなかった。

この子が生れた時、二度「親心」という不思議な心を
見つけたように思ったが、今この子を神に召されて三た
び「親心」の奇しきにふれた思いであつた。この子はこ
のようにして、私に「親心」を知れ……と教え導くため
に生れ来て、死んで逝つたのではあるまいか。観世音菩
薩の姿であつたのではなからうか。それにしてもこのや
るせなき悲しさよ。どこにもつていくべきところのない
淋しさよ。野辺の送りを済ませ、人去つて、更け行く谷
間の仮小屋に父も母も物言わず、ただホロホロと泣くば

かりだった。

昨夜までは父と母との間に寝かされて、父母の限りない喜びと希望であり、父母のすべてであったあの子は、今はもうここにいないのであるかと思う寢床の冷たさよ。胸しめつけられるように迫まりくる切なさよ。

愛児の霊往きて還らず

地上の生のなげに短かき

親子の縁の奇しきを思い

慕心切々として断腸のなみだ

亡きがらを眺めては抱かんと歎く

傷心あわれ無情のすがた

ただ天空より光りさし来り

人間の不死永住を告ぐれど

法子の死はあまりに痛い悲しみであつたが、父の死後、神誌で頂いた谷口雅春先生のお言葉や聖典のみ教えて、現象の無常とその奥に実相を觀つめることが大切であることを教えられ、子は私のために、生れ来て、私を導かんがために死んで逝つたのだと、天空高く輝く太陽を見ないで移り変わる仮りの姿に心を奪われやすい私を導いて下さる神のみ使いだつたのだと、反省の心も早く、法子が死んで一週間目の夜の青年修養会に私は、私の書いた「断腸の賦」の詩をうたつて、朗らかに青年たちを励ますことが出来たのは、やはりみ教えのお蔭よりほかは

ないのである。

勝ち組・負け組

「二寸来い！」

法子が死んでから間もなくのことであつたろうと思う。たやすくは癒されぬ心の傷手も昼は畑の仕事について忘れて、一所懸命稲叩きをしていたある日のこと、二人の軍服をつけた兵隊さんがやって来て、いきなり「今そこへ隠したのは何だ。機関銃だろう」と言つてきたのでびっくりした。日本と支那との戦争がだんだんはげしくなっている、ということとは聞いてはいたが、いよいよ悪くなつたなア……という考えがピンと来た。でも何もないので「何もあります。機関銃なんぞ持っています」と言うと、「なければ良い。向うでテネンテ（軍人小尉）がお前たちを待っているから早く行け」そして「先に行け」と言つて、彼らは後ろから鉄砲をかついでついて来る。なにも悪いことはしていないので恐いものはない。言われるままに先に歩いて私の仮小屋の前まで行くと、後から兵隊が「君はここに機関銃を隠しているとブラジル人が言っている。持つて来い」と言う。私は機関銃など見たこともないし、無論隠してなどいる訳はないから、「機関銃など隠していません。疑うなら、あなたがた家に

入って探してみなさい」と言うのと、「ないならよろしい」という。案外おとなしい。

私は彼らに言った。「私はブラジルに来てまだピストル一丁持ったことがあります。それというのは、私は人間は神の子だという信仰をもっているのです。神の子の信仰をもっている者に機関銃などなんのためにいりますか」と私が言うと、「そりやそうだ」と言つて馬鹿におとなしくなにも探さないでそのままの方の道路まで行くと、なるほど四つ車の馬車に二、三人の兵隊と隣りの家の兄弟二人が乗り込んでいます。その車のそばには、私の土地に前から入りこんでいてなかなか出ないカボクロ（土着となつた移住民の子インジオの血が混じっていることが多い）がかじりついていて。一番上官らしいのがすぐ私に尋ねた。「君は機関銃を持っているとこのブラジル人が言うが本当か？」

「いいえ、私はブラジルに来てピストル一丁持ったことはありません。なんのために持ちますか」

「本当か、君はこのブラジレイロ（ブラジル人）をいじめているそうだが本当か？」「なにも私はこのブラジレイロをいじめたことはありません。この人が私の土地から出ないだけです」ハハアーこいつ、うまく兵隊さんをアプロヴェイタ（利用）しているのだ、と思つたが知らぬ顔をしていると、

「この土地はお前の土地か」「ハイそうです。でも本当はこの土地はブラジルの土地で、私はそれを買った所有者

です」この答えがテネンテ（軍人小尉）の氣に入ったらしく、今度はなにやら外人にやかましく言っていた。「よろしい。今、日本は戦争をしているから、ブラジル人に悪い事をしてはいかん、バーモス（行こう）」と言って、部下をうながして行こうとするので、私も一緒に行くのかと思つて馬車に乗ろうとすると、「君は乗らなくともよい」と言い終わるや、馭者をうながして四つ車の馬車はガラガラ音を立て、砂煙りをあげて走り去った。

後で判ったことだが、隣りの青年兄弟はその前、地元の警察からピストルや鉄砲は全部届けるように言つて来たのに、それを出さないでしまつておいて、ある日畑に鹿が出て来たのを使つていたカマラーダ（使用人仲間の意もある）と追ひ廻し、撃ちとめた事があつたが、その後そのカマラーダとけんかして追ひ出していたが、運悪くその兵隊を連れて来た馬車引きの外人がその使用人だつたので、「あそこの家はピストルを持っている」と兵隊に知らせた。兵隊は隣りの家に行つて追求すると、それを出して来たので彼ら兄弟はそのまま馬車に乗せられて、その日のうちにジャグライーバの監獄に入れられてしまふということがあつた。

昭和十三年七月、支那の蘆溝橋に始まつた日本と支那との問題が大きくなり、日本は全支那に兵を進めて到るところで勝利をしていたが、それを恐れたイギリスやアメリカが支那を助けて、武器・弾薬を送つて日米戦争は必ず起きると考えられていたので、アメリカの同盟関係

にあるブラジルも結局、ブラジルにいる日・独・伊の三国人を取締まる必要があつたのである。

乱れゆくコロニア

日本と支那との戦争がやがて世界戦争になるのではないか、ということは、我々日本人にとつてそれは重大なことであつた。あの広い支那全土にわたつての戦争でさえ容易ではないのにやがて世界相手となるとそれはただごとでないと考え、しかし世界で強いのは日本とドイツとイタリアと思つていた日本人のほとんど誰でもが日本の勝利を信じていた。

それにドイツにはヒットラーがあり、イタリアにはムッソリーニという英雄がいる。この三国が手をつないで世界を三つに分けて責任をもち、世界の平和をつくると多くが考えていた。血の氣の多い愛国者は戦争に行くのだ、と言つて日本に帰つて行く人達もあつた。そうした氣運の中で生活のためとはいいいながら戦争産業である蚕や、ハツカを値段がよいから今こそ金儲けと言つて盛んにやるような人もいたが、それは敵国に武器を送る非国民のようなやり方である、と言う一部の氣の早い人達が、養蚕産業やハツカを作る人達の小屋を焼いて歩くということがその時分、北パラナのコルネリヤやアサイであちこちに起きていた。私はこんな噂を聞いて、これはいかんと思つた。なんといつてもここはよその国である。

よその国にいて遠い日本のことで日本人同士が相争い、この国に迷惑をかけるということはよくない。これはコロニアの指導者たちがしつかりして頂かねはならぬ時である。特にアサイのごときは代表的な日本人コロニアである。

そのコロニアの指導者たちに会ってみてシツカリ、コロニアに問題が起ころぬよう指導して貰うことが大事だ。アサイに行ってみよう、とやらそうなことを考え、城さんと二人で相談して馬で行くことにした。

「新生」誌をつくる

この辺で少しコロニアと青年会のことを書いておく必要がある。

コロニアの青年会に先立って、生長の家の青年会を作り、毎月一日に日本の興亜奉公日といってコロニアの中心道路の修繕をしたり、私の土地をただで貸して共同作業をしたり、毎日曜の夜は、修養会をしたりしていた。道路修繕の時も、共同作業の時も、道を歩く時は二列に並んで規律正しく、でも途中で外人に会うとすぐ列を乱して歩いた。それは軍隊訓練をしていると密告されてはいけないからであった。そうして仕事を始める時は東方に向い、終わった時は西方に向ってしばらく黙祷（いのり）をすることにした。

仕事に対する感謝、生かされている感謝、働かせて頂

ける感謝の訓練に加えて、はるか祖国の勝利を祈ることにしていたのである。

ひと所に多勢集まると外人に目立っていけないので、勉強小屋を二軒建て、セマナ（毎週）は交替で私と城さん二人で日本語の勉強を団員に教えた。

教科書には生長の家の御本を使った。今度の戦争で日本は勝つ。けれども日本が勝ち、戦争が終わって、自分達が日本に帰るようなことがあった場合、日本語も分らぬ日本人であってはならない。国家をあげてひとつになつて世界を相手に戦っているのに、日本人の一人として生れて来た自分達がなんのご奉公も出来ぬではあまりに情けないし申し訳ない。せめて『生命の実相』をシツカリ勉強して、人間は神の子だということをシツカリ分らせて頂き、無我の心境を極めていれば、それはそのまま忠義になるという考えであつた。

こうした考えを誌友の家庭に、青年や子供達に徹底する必要があるというので、青年会幹部で相談して、青年会の機関誌をつくることになり、青年はもちろん、父兄にも、子供達にも書いて頂き、それを綴って回覧することにした。

父兄の分は別として、青年や少年にはカデルノ（帳面）に清書して、そのまま私のところに出して貰い、それを一つ一つ私が見て多少文章や言葉の使い方をおおしてあげ、足りない所には赤字で書きこんで、最後に賞（ほ）めことばを書いてあげたりした。その皆んなの文章を私が

全部書きうつして一冊の本にまとめ、カデルノ（帳面）は返してあげることにして、生長の家と日本語の両方の勉強に役立つようにして頂いた。冊子の名前は「新生」とした。

それを始めたのが、青年会が出来てから五カ月目の昭和十七年七月七日であつた。

そのような青年会の仕事をしている間に、コロニアにはいろいろな噂がたつて、生長の家のことがいろいろ批判されているということだったが、私に向つて正面から言ってくる人は一人もいなかった。だからある幹部が、「松田さん誰それがこう言つてましたよ」と言つて来るようなことがあつても私は、

「蔭口は取り上げる必要はない。愛の心のある人は私の所に言つて来るだろう。来ないで蔭で言っているのは本当に愛がないからだ。愛のないものは『無』にひとしい」と言つて取り合ひなかつた。そのうち、生長の家でない青年達が植民地の青年会を作る運動を起こしているという噂を聞いた。私はそれは結構だと思つていた。どうせ必要なのだから出来てもよい。けれど私達は信仰に集まる青年会だから、いやな人は来なくてもよい。み教えが素晴らしいから勉強してみようという青年の集まりだから、私達の青年会もあつてよい。コロニアの青年会はコロニアにいる青年達の集まりであり、私達もコロニアの青年だから、青年会が出来たら入らせて貰おうと思つていた。

ところが、そのコロニアの青年会作りに生長の家の青年二人が動いているということが分った。

誌友の家庭ではなかったが、義理に入っている青年で、日本から勉強して来ている青年だった。それが他の二、三人の青年と運動していたらしい。

ある日、その二人の青年が私のところに来て、コロニアの青年会が出来るようになったと知らせてくれた。そこで私は、

「君達が運動して出来るのであれば、どうせ君らが役員になることであろう。そうすると生長の家の青年会の役と両方はやりにくいであろうから、生長の家の方はやめなさい。自分達も結局コロニアの青年だから大いに手伝いましょう」と言うと、彼らは、

「それではそうさせて下さい」と言って喜んで帰って行った。

松田さん頼むよ

昭和十七年十月のある日曜日に、当時日本人会会長をしておられた奥村氏の車庫で発会があるというので、私達生長の家の青年会員も全部行った。私が奥村氏のお宅に行くと、奥村氏が、

「松田さん、どうしてもあんた世話してくれにやいかんよ」と言われるので、

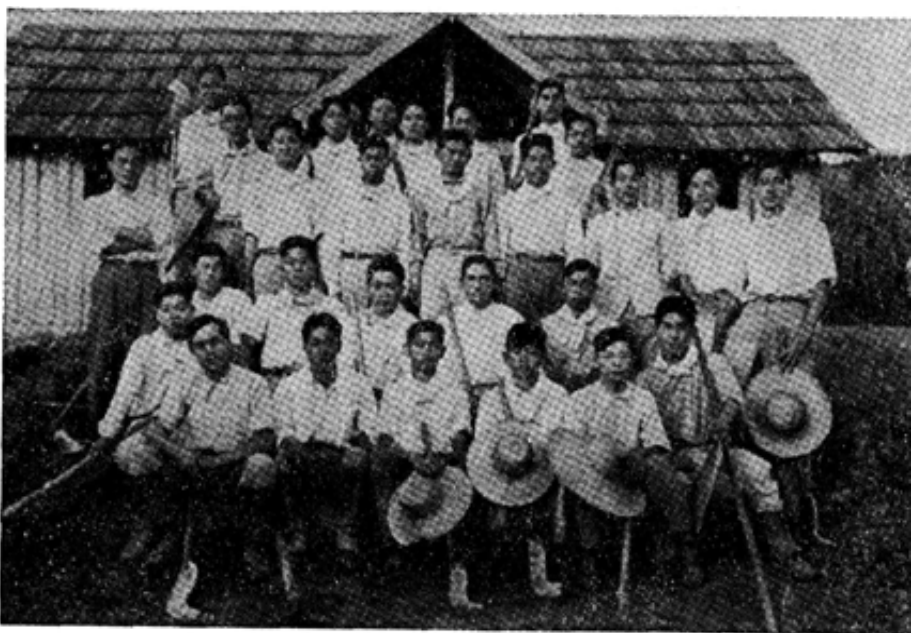
「そりゃいけません。私は生長の家だけで結構です。他に

適当な青年がいてここまで進めて来たんですから、その人達に世話して貰いなさい。なにも心配することはありませんよ」

と言つて私は断わつた。奥村氏は、

「困つたなア……」

と言つておられたが、いよいよ奥村日本人会長の肝入りで発会の運びとなり、役員の選挙となつた。



昭和21年。公共作業に汗を流すイバイチのアウローラ青年会員

開票の結果、私が最高点で会長に、副会長には生長の家でないA君（日本の中学を出て来た青年）が最高点、会計には城さんがこれも最高点で当選し、三役の内二人は生長の家から出た訳であるが、なんのことはない、生長の家の青年達が私達には何も話さないで、彼らだけで相談していた訳で、票がまとまつて

入つたのである。生長の家の青年たちはなかなか賢いなアと思つた。

選挙されたら私も後へは引かない。変な遠慮はしない

で引き受け、就任の挨拶には、私は生長の家の人間だから、私の思想は生長の家であるということをおぼろげに承知しておいて頂きたいと言っておいた。私は両方の会長をやらねばならなくなり、なかなか忙しくなってしまった。

役員会の後では、この二つの青年会のことで、他の役員から喧々囂々（けんけんごうごう）の質問や意見が交わされることもあったが、み教えが立派なので、いつもおだやかにおさまっていった。

そのうち日本の戦争はいよいよ大きくなっていった、昭和十八年の六月にはとうとう日本との連絡はとだえてしまった。

我々日・独・伊の人間は旅行が出来ないとか、三人以上集まってはいかんとか、日本語を話してはいかんということになって、のんびりしていたコロニアにもなにか妙な重苦しい空気がただようようになって来た。従って品物も段々不自由になるという話もあったが、イバイチの町では日本人が来てから町のモビメント（動き・商況・動態）が多くなり、良くなったというので、取引きをしていた店ではブラジル人のカボクロ（土着となった移住者の子孫でインジオの血を混じえた者が多い）より良くしてくれるのであまり不自由はなかったが、ガソリンがなくなり、石油がなくなり、自動車は通わなくなり、ランプもなくなって「新生」誌を編集する時、ビンニョ（ブラジル南部に自生する松の実）のシンを拾ってそれを燃

やしてやったりした。ものすごい黒い煙りの出るピンニヨの赤い光りが、今懐しく思い出される。

その時分、Tというもう故人になられたが、日本人会長さんが青年や子供達に、日本語勉強のためといって懸賞作文を書かせたことがあった。題は「親孝行」というのであった。日本で小学五年以上学んできた人、それ以下の人とブラジルで生れて勉強した人、それに子供と三部に分けて書いた。

さて、その審査の日のことである。私も応募者の一人であったが、会長だということで審査に立合った。書いた人の名前を読んではいけないというので、一つ一つにNo.をつけて、それを私が朗読するのを日本人会の幹部が採点し、その総合点を取るようになった。ところが不思議なことが起きてしまった。というのは私が調子をつけて朗読すると、それを黙って聞きながら審査していた長老達が、シクシク泣き出したのである。それが主に生長の家の青年の作文を読む時に限るのであった。

私には筆者の名前が分るのだが、審査員には分らない。誰の作文だか分らずに作文の内容を聞きながら泣いているのである。そうして審査の結果は、日本で勉強した部も、ここで勉強した部も共に一等から三等まで生長の家の青年が入賞してしまい、辛うじて日本で勉強して来た方に、三等に同点で一人生長の家外から入賞しただけであった。日本人会の審査員の長老達は結局生長の家の青年の作文に泣かされた訳である。

審査を終わった長老達は一樣に、

「これはコロニアの青年はみんな生長の家で指導して貰おうではないか」ということになって、その日本人会の幹部方が先立ってコロニアを廻り、説得して歩いて、ここにコロニア全部の青年が生長の家青年会に入って貰うことになり、青年会は二つありながら一心団体となつてしまつたのである。昭和十九年十一月のことである。

第二次大戦とコロニア

こうして私達のコロニアは案外平和に明け暮れていたけれども、世界の戦争は悪くなるばかりで、昭和十八年八月には北米についていたブラジルは独伊と宣戦布告をした。

同時に北米からどんどんデマ宣伝が耕人コロニアにもなだれ込んできて、我々の日本神国の信念を揺り動かし、くつがえさんばかりの勢いであつた。やがて昭和十九年八月には日伯の国交を断絶されてしまつた。我々の今までの天国のような世界、おそらくブラジルは戦争に巻き込まれないであろうと言う予想もめちやめちやになつて、いよいよ敵国の中に生きねばならぬことになつた。

そこで、前にも述べたように、私は日本の戦勝を信じていたので、今に戦争は済む、済むまで自分達は静かに時期が来るまで隠忍自重しておらねばならぬ。敵国の中にいて日本人同士傷つけ合い、争うことは日本人全部が

一丸となつて世界相手の戦争をしているのに対して申し訳ない。ことにアサイのような邦人大集団地ではよほど気をつけねば大きな事件が起こらぬとも限らぬ。それにはそのコロニアの指導者がしつかりしておらねばならぬのに、なにをしているのか、直接出かけて行つて話してみようというけなげな気持ちを起こして、旅行も出来ぬ時のことなれば、一三〇キロのアサイまで馬で行こうということのを城さんと相談して、昭和十九年七月のある日、野宿の用意を整えて意気揚々と出発した。

コロニアの西方、はるかに高い山が連なつて山脈をなしている。その山脈を越えて行くのだと外人に道を教わりながらテクテクと行くのであるが、近いと思つたその山脈が案外暇がかかつて、頂上に登りついた頃は既に太陽も沈みかけていた。野宿の用意はしているし、日が暮れても山の中で寝るつもりで歩いていると、やがて大きなマット（山林・しげみ）の中に入りこんだ。多少不安になるが、さすが生長の家のみ教えを少しでも知っているの、どこかい所があればジャンタ（夕食）のサンドウィッチでもかじりながら休むとしよう、と二人で語りながらしばらく行くと、鬱蒼とした森が切れて明るい所に出た。パスト（牧場）だ。こんな山の頂上にパストがある。すると人がいるに違いない。妙に元気が出てそのパストの中の道を馬を進めていると、あつた。瓦ぶきの板壁で立派な家である。

「城さん、今夜この家に泊めてもらいましょうや」

「いいですな、そうしましょう」ということになり、その家の前の柵の所まで行つて馬に乗つたまま手を叩くと、夕飯の用意をしていたらしい中年のかなり美しい婦人が出て来て驚いた顔をしている。

生れて初めて見た人間だというような顔付きである。私はそんなことおかまいなしに、アサイに行く者だが日が暮れてしまったから今夜泊めて頂けませんか、ニコニコしながらお願いすると、黙つて聞いていたその婦人は、私達がきれいななりをしていたので悪い人間でないと思つたのか、快く承諾してくれた。二人はうれしくてたまらない。早速馬から鞍を下していると、黒ん坊のカマラーダ（使用人）らしいのがやってきて、ていねいに自分がするからと言う。ツーリヤ（トウモロコシ等を収納する）の中には大きなミーリヨ（トウモロコシ）が一杯入っているのです、馬にもたくさんミーリヨをやつて、私達は家のサーラ（応接間・居間）に入り、

「良かったなア、犬も歩けば棒に当たると言うが、神の子の行く所、立派なお宿が当たるですなア……」などと得意になつていると、コジンニヤ（台所）では婦人がなんのご馳走か、ジージー油揚げの音がする。それにしても、この家には男はいないのかなア、カマラーダがいるからいるだろう等と語っていると、日はもうとつぷり暮れてしまつて、ジャンタの用意が出来たのか、カマラーダの方にも、私達の方にも食事の用意をして下さる。カマラーダの方にはない卵の揚げたのやら出て来た。こんな

時は遠慮しては損だと、勧められるままにたらふくご馳走になっていると、表の戸がカチャリと開いて雲つくような大男が、腰にはピストルを打ちこみ、片手にはシコツチ（ムチ）を持ちながらニコリともせず、ものも言わずに入ってきた。ハハア、この家の主人だなアとすぐ分ったので、「ボア・ノイテ」（こんばんは）「ボア・ノイテ」と言うけれども、返事もせずだしぬけに、「この連中はキンタコルーナ（第五列―スパイ）だ。このままプレーゾ（捕虜）にして明日警察に届けねばならん」と言う。私達はいっこう驚きもしないで、

「まことに結構です。こんないい所だったらいつまでプレーゾにして頂いても結構ですハハア……」と笑っていると、しばらくにらみつけるようにしていたヒゲ男、にわかにはカラカラと笑い出して、

「いやちよつとおどして見ただけなんだが、君らどこに行く」と言うので、アサイまで行くのです。初めての道で暇どつて、とうとう日が暮れてしまったので奥様にお隣いして泊めて頂いたところだと言うと、

「アサイまでは明日一日かかる」と言つて道順など書いてくれ、探切にして泊めて貰った。

旅先でこうした人の深切にふれると、人種を超えて人間の温かさがしみじみ身にしみる。

翌朝は牛乳の入った美味しいコーヒーを頂いて、「君らどうせ帰りも一日では帰れないから、この家へ泊つて帰れ」と温かい言葉を頂いて馬上の人となった。

棄民とは何事ですか

長い旅をしていると馬がかわいそうになって無理に走らせられず、山を抜け、谷を渡り、出逢う外人に道を聞きながらテクテク歩いていると、正午過ぎにロンドリーナからクリチーバに続く大道路に出たので、それから安心して一路アサイに、なるべく明るいうちにと思っていたが、その日もとうとう日が暮れてしまった。どこへ泊るあてもない。すると外人の家が二、三軒ある所に着いたので聞いてみると、そこはトレスバーラスの入り口で、アサイまではまだ十七、八キロあるという。でも少し行った所に、道の左側に日本人がいると深切に教えてくれた。もうとつぷり日は暮れてしまつて西も東も判らない道をしばらく行くと、案の定コーヒー園の中にチラホラ燈が見えた。

てつきりこの家が日本人の家だ、いやでも泊めて貰いましょう、と言いながらその家の前まで馬を進めて、「今晚は、今晚は」と言う、中から戸があいて、ちょうど夕食中だったらしく、

「実はイバイチからアサイに行くのですが、日が暮れてしまいましたから今晚泊めて頂けませんか」と言つても、怪訝（けげん）な顔をして返事もせず、なにか迷惑そうな顔をしておられたけれども、私達は泊めて頂く決心なので、「お願いします」と言つて馬からおり、鞍を下して、

バイオール（ミリーヨなどを山積みした小屋）からミリーヨを持って来、コツシヨ（麻袋）に入れて馬に与え、さて、家に入っていくと、ますます注意深そうな顔をしておられる。後で判ったことだが、これはてつきり養蚕、ハツカの焼打ちをして歩いている青年達だ、えらい青年が舞い込んだものだと思っていられたそうである。

ところが、私達はそんなあやしい青年ではないので、話している内にだんだん判って来られて、快く泊めて頂くことになり、夕飯を用意して下さった。この人は初めアマゾンに入植せられ、あちらで学校を建てて日本語教育をしていたという人で、ものすごく話好きな人だった。

私達ご飯を頂いている間も独りしやべり続けていられる。私達は泊めて頂かねはならぬので相づちをしながら聞いていると今度は時局批判となり、やがて日本政府の非難が始まった。そして、私達日本人の人口が多すぎるからブラジルに移民されたのではなく、棄民されたのだとか、「八紘一字」などというのは政府の都合のよい看板で、そんなことが出来るものではない、などときたので、それまで黙って聞いていた私はもう耐えられなくなって、食べかけていたご飯をそこに置き、「待って下さい。我々を棄民とか、八紘一字の神武天皇の御精神は政治家が都合よくデッチ上げたものだとは何事ですか。誰のお蔭であなたは日本人としてここに生きているのですか。日本のお蔭、日本天皇の大みいづのお蔭ではないのですか」と、いたけ高に喰ってかかっていったので、さ

すがの御主人も驚いて、それでは君達は八絃一字をどう解釈しているのかとおっしゃるので、聞きなさい、と言わんばかりに、谷口雅春先生の天皇絶対論をひとくさりまくし立てると、「あんた方のように言う八絃一字ならよい」と言われるので、「これが本当の八絃一字です。だから生長の家のみ教えでなければ本当の日本精神も、忠ということも分らぬのだ」と再び、ご飯を頂きながら生長の家のみ教えを話し終わると、今度は感心して聞き手になって下さった。

その晩は遅くまで色々な話に花が咲き、夜中頃休ませて頂いた。

次の朝早く馬の用意をして、早くアサイに行かねはと思っていると、この家の主人がまた語り込んでしまい、とうとう朝食の時間となつてしまった。奥さんが、

「あなたお代りをついであげて下さい。私は水を汲んで来ますから」と言つて泉の方に出て行かれた。私はお話を聞きながら御飯を頂き、もう一杯欲しいのでブラツタ（皿）をカチカチ音立てながら食べているけれども、お話に夢中になつた御主人はいっこうに気が付かない。とうとう立ち上つて、「すいませんが、もう一杯頂きます」と言つて鍋の所までつぎに行くと、御主人は恐縮して「やあ、話し込んですみません、どうぞどうぞ」と頭をかいていられる。

城さんも「私もそれじゃもう一杯頂きます」とこれが私達の武者修行の姿であつた。

「今ここはとてもうるさくて、ゆだんすると警察につかまってカデイヤ（留置場）に入れられます。なんでもないので、日本語を話したと言ってカデイヤに入れられた人がたくさんあるから、あなた達も早く視察を済ませてお帰りなさい」と言って注意して下さった。

結局正午になってしまった。赤土の道をこれからまだ十二キロほど行かないとアサイに行けない。

「城さん、どこへ行こうか。まず南銀の支店長や産業組合の理事長の所へ行きましょう」となにしろ最高指導者に逢うというので、最初に南銀支店長榛葉彦平氏に逢うべく南銀支店を訪ねて、支店長に逢いたいと言うと、幸い支店長室に招じて下さった。

しばらくして出て来た支店長も、警戒しているようすが見えた。私達は自分の言うことだけを言って、

「貴方のようなコロニアの中心になる方が、この大きな植民地を騒動させないようにして頂かねばなんのではありませんか」

その答えは、「僕では、もうどうにもならんよ」ということであつた。

支店長が、「君達はなかなか話すが、なにか信仰でももっているのか」と尋ねられたので、ここぞとばかり「生長の家を信仰しているんです」「ほう、生長の家と言えば滝浪君がここでもやっているようだが、大体どういう教えかね、その生長の家は……」

そこで私と城さんは代るがわる天皇信仰、万教帰一の

真理を声を大きく得意になって話していると、突然次の部屋のドアが開いて、リオから派遣されていた監督官が顔を出して、

「榛葉ちよつと」と招じられた。私達は、あまり大きな日本語で話しているので、これは、御迷惑をかけたのではないかと思ひ、しばらくたつて帰つて来られた支店長に、「私達が御迷惑をかけたのではないですか」と尋ねてみた。「いや、ここでは日本語を話してよいことになってゐるから心配ありません」と言いながら、アサイのどうにもならない日本人社会の混乱状態を話して下さり、滝浪君のこともくわしく教えて下さり、「なるべく早く帰りなさい。面倒なことが起こるといかんから」と注意して下さった。

南銀を出た私達は、今度は産組の池田理事長の所に行きましよう、池田氏の経営してゐられる養蚕室の方にかけた。もう太陽は大分西に傾いてゐた。

非生産物には金は使いたくない

私達が池田氏経営の養蚕を見せてもらひに行つたのは、一つには、都合がよければ私達のコロニアにも養蚕を取り入れてもよいがということと、もう一つはこの日本及び日本移民にとって最も重大な時期に、たとえ敵国の中にあるともアサイの旗頭であり、指導者であらわばならぬ理事長はどのような考へてゐるのであるか。話し

てみたい……と考えたからであつた。

養蚕小屋に行つて中に入つてウロウロ見廻しても、声をかけてみても誰も返事する人もない。しばらくして池田氏の父親が来られ、私達の来意を聞かれた。

「息子は今はおりませんから、今夜来て下さい」とのことだつた。私達はちよつとした用事を済ませて、日もとつぷり暮れてから尋ねて行つた。

大分長い間待たされた。確かアチコチでハツカや養蚕小屋の焼打ち事件が起こつていたので、多少用心しておられるのではないかと考えながら、小一時間ほど待つていると体軀（たいく）堂々たる池田氏が寝巻の姿でお出になり、初め私達がいろいろ尋ねても、なかなか用心深く容易に話をせられなかつたが、私達が悪い人間でないというのが分つたのか、しばらくするといろいろ御自分達の入植時代の苦労話や、コロニアの今日の対立等は自分の力ではどうにも出来ない……と語られるのであつた。

私達は氏と逢う前にいろいろな人から、「池田氏は日本のことを言うことや、日本人を嫌う人だから氣を付けなさい」と言われていたのだが、どんな人であつても神の子に変わりはない筈だからと思つて話していると、実に立派な人である。氏は家のことについて、

「こんな家など、非生産物であるものには金を使いたくはないのですが、父親がもう大分年を取りましたので、父親の隠居屋のつもりで建てたのです」と言われる。それまで話に夢中だったので氣が付かなかつたが、まことに

立派な御殿のような家で、床なども光っていた。

日本や日本人を嫌うこの人に対して、非生産物には金を使いたくないが、年取った親を大事にし、喜んで余生を送って頂きたいと、家を建てたというこの人は決して日本人の心を捨てた人でなく、やはり日本人に間違いないのに、何か意見の違いから、つい非日本人のように言いふらして、争いがかもし出されるのではなかったかというような気がした。だから、人間はお互い、心を空うして、真心から話合えば悪い人はいないはずで、争うことはないのにと大変残念に思われてならなかった。

十二時過ぎまで、夜の更けるのも忘れて語り合つて、その夜は池田氏の豪壮なお宅に泊めて貰い、翌日は氏自ら産業組合を、事務所から売店、倉庫までズーツと案内して下さり、説明して下さい、

「見知らぬあなた方がウロウロしていると警察がうるさいから、視察が終わったら早く帰られた方がいいですよ」と、深切に注意して下さい。

私達は好意を謝してアサイ在住の日本人同士の感情のもつれが容易でないことを悲しみながら教えて頂いた滝浪茂氏を訪ねることにした。

色の黒い日本人

滝浪氏のことについては、兄からいつも話を聞いていて、この方面の生長の家の先達で、明るい指導者である

と聞いており、一度逢いたいと思っていたので、この機会に是非逢つて帰ろうと言って、町から六、七キロほど離れたコーヒー園を人に道を開きながら尋ねて行くとすぐ分つた。きれいなコーヒー園を下へおりていくと、間もなく家があつて、ちやうどその住居らしい家の横に外人達が小屋を作っていたので、そこへ行つて、
「ボンジイア、カーザ・デ・セニョール・タキナミ・エー・アキー？」（こんにちは、滝波さんのお宅はここでしょうか）

と聞いてみた。すると屋根の上に登っていた半黒みみたいな人が、

「やあ、僕が滝浪ですが、どなたでしょうか」と日本語で来たので、「コリヤしまった」と思つたがもう仕方がない。それにしてもずいぶん色の黒い人だなアと思いながら、

「松田の弟です」

と自己紹介をしながら来意を告げると、大変な喜びで、それから百年の友達のようにその晩はおそくまで語り合つた。と言つてもその多くは滝浪氏が口角あわをとばして話し、当方はただ「そうですか、そうですか」と聞き手になつたのではあつたが……

次の日は滝浪氏があちこちとアビザ（報告）をして下さつて、夜大園さんという人の所に集まつて頂くことにして下さつた。

私の兄はもう大分こちらにも来て生長の家のお話をし

て歩いていたので、たくさんの誌友が出来ていた。僕はそれまで一度もよそに出たことはなかったが、「松田先生の弟さんが来られた」というので、大園さんのお宅では一杯お集まり下さって、明るいお話で賑わった。私達が話すというより、みなさんがこうして救われた、ああして救われたと、いろいろ救われたお話を喜び一杯代るがわる話されるので、時間の経つのも全然忘れていた。

鶏の鳴き声がしげくなり、家の外がしらじら白みかけてから、皆さんは驚きながらお帰りになったので、私達はそれから床に入って休ませて頂いた。

その時分の生長の家の皆さんが、どんなに喜びに満たされ、求道心に燃えていられたかが思われて本当に楽しかった。

次の夜は、少し離れたアモレイラという区にFさんという人がおられるから、その人の所でお集まりをお願いするから、生長の家の種蒔きをして下さい、とのことだった。滝浪さんの唯雄さんが案内して下さい。ジャント（夕食）を滝浪さんに頂いて行ってみると、まだ二人しかおられなかったが、コジンニヤ（炊事場）の方には女の方が何人か集まっておられたようだった。

生長の家とかの神様のお話があるというので、よほど立派な先生がお出になったのかと思って来てみると、若い青年が二人おるので、この青二才どもが神様の話をするのかと思われたのかどうかは知らないが、お茶の代りにピンガ（原料が砂糖キビで、焼酎と同じ製法の蒸留酒）

が出て、お出になったおやじさん達がチビリチビリ、ピ
ンガを飲みながら顔を真赤にして大きな声で世間話がは
ずむので、

「城さん、私達は休ませて貰いましょうか」と言うと、皆
さんあわてて、せつかくお話があるというので来ている
のにお話もなく寝て貰ってはおかしいと思われたのか、
世間話を止めて、「なにかお話をして下さい」ときた。そ
う来なくては話は出来ない。

「そうですか、それでは……」

と言つて、しばらくの間座談的にお話をさせて頂いた。
種蒔きになったかどうかは分らない。

国のちがい

珍しい、楽しい旅を済ませて帰途についた私達は、途
中の山脈の頂上でまた泊った。この前泊めて頂いた所の
人はどこかへ旅して留守だったので、その人の兄さん
という、牛をたくさん持っている人の大きな硝子窓の立派
な家に泊めて貰った。

ジャンタ（夕食）をご馳走になっていると、この家の
年取った御両親がつれだって、珍しいジャポネース（日
本人）が泊っているというのでお出になって、おそくま
で語って帰られた。子供がこんな立派な家に住んでいる
のだから一緒に住んでもよさそうなのに「ボア・ノイテ」

（おやすみなさい）と言つて、子供さんや嫁さん達に挨拶して行かれるので、別に立派な家があるのかと思つて、その夜は休ませて貰つた。翌朝起きてみると、この人達がこの土地に入られた時作られたのであろうか、大きくはあるが自分で割つた松の板で屋根や壁をしてある、少し傾きかけている家にこの老夫婦は住んでいられるらしかった。

非生産物には金を使いたくないと言いながらも、年老的な父母のため、御殿のような家を作り、老後の御両親を慰めようとする日本人の心と、自分達は立派なホテルのような家に住みながら、古い汚ない家に年取つた両親を住まわせているブラジル人の気持ちと、大きな違いのあるのをまざまざと見せられて、日本人として生れた喜びをまた新しく身にしむように感じたのであつた。

朝まだたくさん乳牛を集めて、きれいな新しい牛乳をご馳走になつた。その美味しかった牛乳のことは今も忘れられないが、国が違えば、人情もこのように違うものかと少々淋しい気持ちがあるのである。でも、私共がこの世に生れて来る大いなる機縁をつくつて頂き、おのれの身もいとわず育てて頂いた父母に対してはやはり、老後をいたわり、孝養を尽すという日本人の生き方がどんなに美しいことであるかと思わざるを得なかつた。

団体の解散

この頃、植民地を売り出されたS氏とK氏が我々のコロニアにT会長を訪問され、世界の風雲いよいよ急を告げているおり、警察より邦人取締まりが厳重になるから自重せよとの忠告があつたから、しばらく団体行動は中止した方がよからうとのお話があつたので、皆んな相談して日本人会も、誌友会も、青年会も一切の団体は解散し、時局が明るくなるまでお互いどんなことがあるうとも自重し合うことになった。「新生」誌もまた中止してしまった。それは淋しい限りであつた。

「新生」誌の編集もその時分はもう私一人ではどうにもならなくなっていたので、幹部交替で手伝いながら編集して貰つて、第三卷第八号まで続けていたのであつた。私はその挨拶に次のように書いている。

「最近聖州御旅行中のS氏とK氏がT日会長を訪問され、日本内閣の更迭による当国の邦人取締まりが嚴重であることと、警察の忠告等のお話があり、集会及び雑誌発行等中止した方がよろしかろうとの御忠告がありましたので、今まで事なく過ごして参りました私共として、御注意を有難く素直に受けて、大日本国民としての襟度（きんど）を護るべく、お互い自重していきたいと思いますので、『新生』誌の発行を暫時中止することに致します。

御父兄並びに男女青年団員、子供のページの皆様様の御協力、御努力によりまして、一路発展の道をたどつて参りました『新生』誌でありまして、それを暫時にしろ中止するということは、まことに残念至極であります。

事情やむを得ないのであります。

しかしながら、奥山に湧き出でた清水は、流れを続けることによつて旅人の渴（かわき）を癒やすことが出来たでありましょうか。汚れた旅人の手足を洗うことが出来たでありましょうか。あるいはそれすら出来得なかったかもしれません。でも水の使命はただ流れることにあります。流れない水は濁り、やがて腐るであります。

愛する団員諸君よ。諸君は常に流れる水であれ、いつまでも流れ続けよ、しかして大海にそそげ。

『新生』誌発行中止は流れる水をせき止め得るであろうか。否、それは、ただ深いふちとなつて一見流れているか、いないか分らないかも知れない。でも常に流れているのである。

近き日において、再び諸君の燃ゆるがとき若き情熱と、美しき大和魂とを乗せて大河は流れるであろう。その日の一日も早かれとひたすら祈りつつ、諸君の不断の御精進を願うばかりである」

この文章が昭和十九年八月九日になっている。

暁の祈願

その後、ほとんど仕事も手につかない私は、ある志を同じくする二、三の同志とひそかに語り合い、植民地の中心に共有地として頂いている小高い丘（ここでお正月や天長節などの式をしていた）の小石の上にサッコ（麻

袋）を敷いて、まだ明けやらぬ東の空を伏し拝み、熱涙を流しながら祖国の戦勝をただ祈るばかりであった。祖国に対する絶対の信は、微動だもしなかったが、満州事変、支那事変と長い戦いのその後で、ほとんど世界の列強国、四十数力国を相手の戦争は容易でないことは簡単に想像される。

盟邦とたのむ独・伊も予想に反して敗戦したと聞く。ああ愛する祖国、天皇まします、我が生みの国の運命やいかに。

はるか広い陸に、海に、はた空に、生命捧げて戦う将兵をおもい、又銃後国民のおのれを捧げて困難に処していられるであろうことを考え、この史上最大の国難に民心を悩ませ給う天皇陛下の御心中を偲んでは、熱涙をもつてただ祈るよりほかになんのすべもない私達であった。

それは明けて昭和二十年の八月であった。

サンパウロ方面に旅行しておられたT氏が帰ってもたらされた。

畏くも、天皇陛下が我ら在外同胞に降し給える御勅語である。

在外同胞互ニ相扶ケ 私利ニ翹ラズ 克ク国難ニ耐ヘ
以テ日本精神ノ美ヲ保有セヨ

昭和二十年七月十二日

御名御璽

とあった。国難多きみ国の政務をしろしめし給う多事多難の御日常にして、なおそのみ心は遠く我ら海外の同胞の上にまでも及ぼし給う廣大無辺の大御心を思う時、この国難になんら、御奉公の出来ぬ身のはがゆく思われるとともに、聖恩の無窮に感泣し、ひたすらみ教えとかしこみ、大御心に応え奉らんと誓うのであった。

しかし、この聖恩の無窮なるにもかかわらず、我らの涙の熱禱にもかかわらず、祖国の軍隊はこの御勅語の出されて間もなくの八月十五日に連合軍に降伏していたのであったが、それを知ったのは大分後のことであつた。

流言蜚語

それは昭和二十年の九月頃のことであつた。あちこちで山焼きが始まつてどんよりとけむつてはいたが、それでも春の太陽がかなり強く照つていたある日の午後であつた。オヤツに元氣をもらかえて一所懸命畑で働いている私たちの所に、子供を背中におんぶした城さんのお母さんが、サンパウロにいる娘が素晴らしいニュースを送つて来ましたから、と言って持つて来て下さつた。それは、戦争が日本の大勝利に終わったという、かちいくさのニュースであつた。連合国の艦隊は全滅、ブラジルのラジオや新聞の報道は全部デマであると、しごく簡単ではあるが、飛び上らんばかりのうれしいニュースであつた。

私はうれしくて思わず飛び上って「万歳」を叫ばずにはいられなかった。祖国日本が勝ったのだ。これが喜びでなくてなんであろう。

ニュースには「日本に対し宣戦布告せる四十六カ国に對して召集状を發し、九月二日より東京において講和談判並びに平和會議開催されると發表ありたり」とか、「天皇陛下大決戦の第一線に御出動御指揮遊ばさる」とかいふことが書かれてあった。

しかしこの輝かしい戦勝の蔭に、幾多のはらからが尊い犠牲になっていて下さったことを思い、勝ったとはいえ、長い戦争で戦地に、銃後にどれほどの同胞の御苦勞が捧げられているであろうか、それはまだはつきりした事は分らないにしても、おおよそは想像が出来る。申し訳ないことである。同じ日本の血を受けた自分でありながら、自分達が真つ先になって戦わねばならない戦争、守らわはならぬ祖国であつたのに、なんらの御奉公も出来ずに終わってしまった。なにか日本の同胞に申し訳なさ一杯で、そのためにもせめてこの人間神の子の真理の普及にわが全生命をかけねば相すまないという氣がするのであった。

どうしたのか、私達の光明植民地に入ってくるニュースは、そのように日本戦勝のニュースばかりであつたので、明くる昭和二十一年のお正月の元日には、共有地の小高い丘の上で、しばらくぶりに新年の拝賀式が感激の

うちにあげられた。集まって来る人々の顔は今まで、三人以上集まってはいけないとか、日本語を話してはいけないとか、敵国の中に生きてきた暗さは消えてしまつて、明るく喜びに輝いていた。

靈氣の満ちているような、植民地の四方を見渡せる丘の上で二列に並んで、はるか東を伏し拝み、君が代を歌い始めると、誰の気持ちもみな一つだったのか歌い出すと同時に、みんな泣き出してしまった。涙の拝賀式、なまじっか外国にいるせいか、かえつて祖国の事が身にしみる。君が代も歌にならず、勅語奉読も読む人も、聞く人も首うなだれてただ涙、ただ涙、民族的な感激の拝賀式だった。

天皇陛下のお蔭、祖国のはらからたちの尊い御努力と犠牲によつて、敵国に生きていた私共が、無事に、何事もなく輝かしい、明るい暮しにもどることが出来たのだ。万感こもごもというが、このような時の心のことを言うのである。

このように私共の植民地には、かちいくさのニュースが入りこんできて、もとの明るい平和が訪れてきたのであつたが……

ところが世界大戦は終わつたらしいが、日本人のコロナには、日本の戦勝と敗戦との二派に分れて、移民史上かつてない同胞同士の争いがかもし出されてしまった。日本は勝っている。あるいは負けているかも知れないが、なにも負けたと言つてそれを宣伝する必要はあるま

い——という勝ち組。日本は本当に負けて食うものもなく、着るものも、住む家もないというみじめな状態にあるのだから、いろいろな物を送ってあげねばならぬ——という負け組とが、常日頃の感情問題をも絡んで争いとなり、それがこうじて勝ち組に臣道連盟とか、特攻隊とかの団体が出来、極端な負け組が殺されるという一方、負け組では身の危険を恐れてブラジルの警察を動かして、勝ち組の目ぼしい人を捕えて島流しにするという悲しむべき同士打ちの争いがかもし出されてしまった。

この問題については私は多くを書かない。それは、ブラジルの有名な新聞記者であるアゴスチンニョ・ロドリゲース・フライヨ氏が、『東洋の拓人』というご本に書いていらつしやるし、私は南パラナのそうした争いから遠く離れた地におかれて、くわしくその内容を知らないからである。

しかし、私の気持ちとしては今日になっても、極端な負け組の行動はあまり喜べないし、勝ち組の行動は、よその国にありながらとはいえ、民族の愛国の魂がしからしむる是非ない行動であつたと思っている。

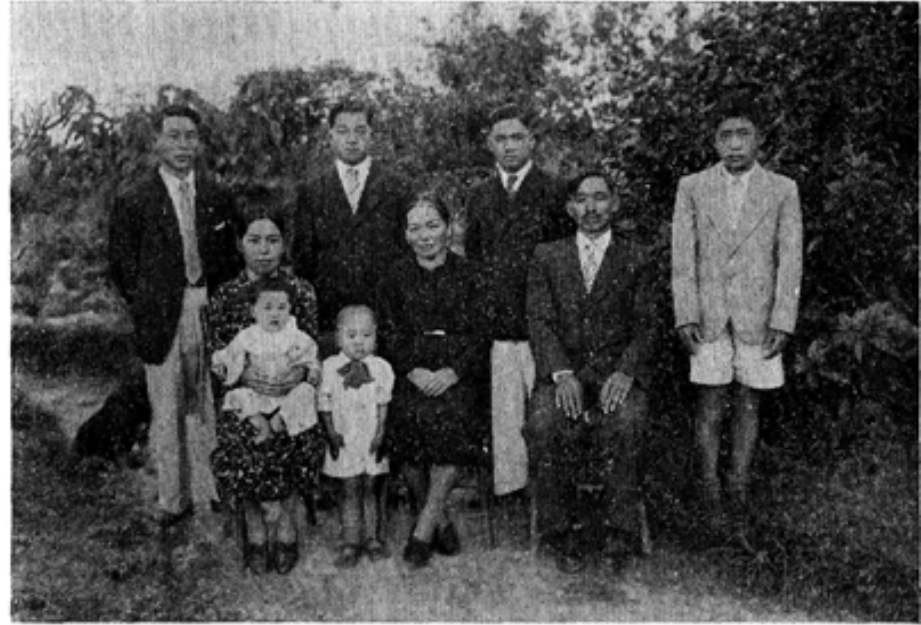
練成道場のはじまり

この辺で私は練成道場のことについて少し書いておきたいと思う。

入信当時の私の希望の一つとして、信仰を語り合う若

き同志たちが相集う道場を作りたい、と希っていた。それは、それまでの私の信仰観が、信仰とは年寄りのもの、若い人にはあまり用のないものと思っていたのが『生命の実相』を読んで、希望に生きる青年たちのその未来への希望が現実に満足し切れずに、永遠なるもの、無限なるものへの憧れが、内に無限性（神）なる本質があるからで、分りやすくいえば、青年の希望は、内なる神のやさやきであり、雄叫びである――と分らせて頂いた。そしてこの信念を強く心に把持して、希望を明らかにして生きていくとき、その人の人生は欲する希望を實現して、生き甲斐ある人生を勝利者として生きることが出来る。従って信仰とは自分自身を信ずること、未来ある青年こそが是非習い求めなければならない重大な問題であると分ったとき、未来ある青年たちがお互いにみ教えを讃え、このみ教えによつて互いの人生を克（か）ちとつてゆくために、共に語り合い喜び合う道場を作りたいという私の希望がハッキリ心に描かれたということは既に書いておいたが、その心に描かれた道場がボツボツと形に現れることが起きてきたのである。

ということとは、戦争が済んで、我々も自由に旅が出来るようになってから、兄は長いこと光明化にも歩いていないので昭和二十年の暮れ、パラナのロンドリーナ方面にいつて帰ったとき、二人の青年を伴ってきた。私の家で修行させてくれということであつた。



松田兄弟が私営の生長の家青年練成道場を開設する糸口となった住込みの二青年(後列中央)と松田兄弟の二家族。

青年の指導というと結局私がするよりほかかないので、私は心の中で、私の希望が段々形に現れてきつつあるのを感じた。心の中でうれしい喜びの声をあげていた。朝夕、この二人の勉強、日本語と生長の家の話をして、昼は仕事をして貰った。働きながら学ぶ—ということが私の指導法であった。

そうしてこの二人が一カ年で帰っていくと、間もなく今度はパウリスタから三人の青年が現れてきた。その一人がトツパンの第一期生として日本・本部へ留学した高保秀雄君である。

これらの人々が来てくれたのがやがて「皇運扶翼生長

の家青年練成道場」の始まりとなったのである。

戦争が終わったコロニアは、勝った・負けたの血なまぐさい同胞同士の争いが毎日の新聞のニュースを賑わしていたが、私たちの光明植民地は戦争前にもました平和がかえってきた。



昭和23年，皇運扶翼青年道場では，松田兄弟を中心に，毎朝日伯両国旗を掲揚し，両国の発展と親善を祈念し続けた。

団体も二つの青年会も、誌友会も復活した。その時分、新しい生長の家の神誌がきていたが、あまりにみすばらしいので、古い神誌を誌友から借り集めてそれを回覧し、戦争前の誌友会そのままでやることにした。

「新生」誌も八月号から再び始めることになった。和やか

な日本らしい雰囲気植民地にただよっていった。

ところが、それは昭和二十三年の十一月二十二日の谷口雅春先生お誕生日のお祝いに青年会で劇をやった。それは「楠公父子の別れ」と「軍神林大八少将の士官学校時代」であつた。日本が世界を相手に戦争した。それに勝った日本人の青年として、たとえ外国で育つていこうとも伝統の美しい精神はこれを力強く受けついで、これをまた、次代の人に伝えねばならぬ大いなる使命が青年には背負わされている、という意味でやってみたのだが、大変植民地の人々に喜ばれたのであつたが、ある日本人会の役員で生長の家反対の人が作り言で問題を起こし、生長の家をつぶそうと考えてやったことが逆に暴露してしまい、反対に日本人会役員が総辞職し、もつと若い人に日本人会をやつて貰おうということになって、ついに私は二つの青年会長をやりながら、日本人会長に選挙されてしまった。

一方、家にはだんだん青年たちが集まつて、十四、五人ほどはいつも出入りするようになり、それまでは私の家のサーラ（居間・応接間）で勉強し、二階に寝て貰つていたのが、どうしても狭くなって、どうにも道場を別に作らねばならなくなってしまい、植民地の同志の方々の手伝いを頂いて、自分の土地の木で材料をとり、コーヒ―乾燥場の近くに道場を建て、「皇運扶翼生長の家青年練成道場」と看板をかけた。無論日本の本部からお許し

を受けてやった訳でなく、自分勝手につけたのであった。それから近所の子供を集めては道場で日本語を教えたり、母親の会を作ったり、植民地の女子青年の指導をしなれたので、私は完全に植民地の教育のことに専念しなければならなくなり、道場の青年の作業面は後に地方講師になり、先年亡くなられた城代義彦氏が担当してくれることになった。

「日本は勝っています！」

それはハッキリした年月も憶えていないが、ある日私たち兄弟に思いもかけない警察の呼び出しがきた。なにも悪いことはした覚えもなし、なんのことかと思いいながら出頭した。

その時分、戦後の日本人コロニアの争いでトマジーナ市の警察本署には陸軍大尉がレジオナルとして来ていた。警察に恐るおそる行ってみると、軍服を着たまだあまり年を取っていない大尉どのがいきなり、「ジャポネース、日本は勝っていると思うか、負けていると思うか」ときかした。あまりだしぬけだったので多少びっくりしたけれども私が、「ハイ、日本は勝っていると思います」と、憶することなく言ってしまった。むろん勝っているか、負けているかは知っている訳はなかったのだけれども、口が切れても日本が負けたと言いたくはなかった。それに生長の家のみ教えを頂いているお蔭で、恐れる心が十分な

くなっていたので、なにも悪いことをして呼び出された訳でもなし、日本が勝ったというようなことで殺されるようなこともあるまいし、日本人が日本が勝ったということは当然のことだと思っていた。日本が勝ったと言ってカデイヤ（留置場）に入れられても決して恥とも思っていないかった。むしろかえって名誉だと思っていたくらいだったので、思いきって胸をはって言い切った。すると大尉どのは、

「どうしてそれが分るか」と、なかなか厳しい。

「それは私には日本が勝ったのか、負けたのか、この目で見ただけではありませんから、知りませんが、私の日本人としての魂が、自分の祖国日本が負けたと考えたくないのです」

私は、私の本心をそのままハッキリ言って、その反響がどうくるかと、大尉の顔をジッと見つめていると、大尉のいかめしい顔が意外にもニコツとした顔に変わり、「それでよろしい。君が考えることは君の自由であるから、君が自分の国が勝ったと信じていることはそれでよいが、日本が勝ったと人に言いふらしてはいけない。なぜなら、日本は戦争に負けているから」

案外物の分った軍人だなアと思ったが、日本が負けているとは情けないことだ。でもそんなことがあるものかと心の中で思っていたが、なにもそのことで軍人さんと争う必要もないので、私は

「ハイ」と言ったきりだった。すると今度は、

「君たちはコロニアで何かやっているそうではないか」

この質問には私は何かあるなアと思った。でも、

「生長の家という信仰をしています」なにも隠しだてをする必要はないと思っていたから、そのまま答えた訳である。

「その生長の家とは何だ」とまたきた。

「生長の家とは一つの宗教で、世界の全人類は悉く神を親とする生命の兄弟だから、お互いに仲良くするようにという平和運動です」

と言つて、ちょうどその時、クリチーバの井藤時雄氏がある学校の講師に頼んで英語の『甘露の法雨』をポルトガル語に翻訳して印刷して出されていたのを持っていたので、それをふところから出してその大尉どのに差し出して見せた。大尉どのはその手を取つてしばらく黙つて読んでいたが、

「君これが分るか」という。失礼な男だなアと思ったが、「分ります。分るから信仰しているのです」

「これが分るなら素晴らしい。自分は東洋哲学がとても好きで、仏陀のことなどもよく知っている。このパンフレット僕にukれないか」

とおっしゃるので、これはブラジルの軍人に生長の家を知らせることだと思つて喜んで差し上げた。大尉は、優しいいくつろいだ態度に変わつて、

「自分は日本人が好きで、君たちに悪い人はないと思つていた。クリチーバの警察が『君たちを調べよ』と言つて

きても放っていたのだが、今度は、リオ・デ・ジャネイロの警察から君たちを調べるように言ってきたので、リオからの命令では仕方なく、呼び出したただけだ」ということだった。

私は思い当たることがあった。植民地内に、もうブラジルに古い人で、日本の軍人で日露戦争に出征してロシヤ人を殺したこともあるという人間がいて、大変生長の家を嫌い、私達を目の上のコブのように思っていた人間がいた。彼は、ブラジルの事情にも明るいので、確かに彼がこの日本人同士の争いを機会に、私達を叩き落してやりたいとたくらんだ仕事であるな、と感ぜずにはいられなかった。大尉は、

「明日、君たちの町に行かねはならぬ事件があったから行くが、自分の車で行かぬか」

と深切に言って頂いたので、ちょうどその晩はその町に泊らねばならなかったし、都合よく翌日警察の車で、護送でなく護衛されて帰ることになった。

「睦」誌と私

いつ頃であつたか、どのような内容であつたかは、今ははっきりした記憶はないが、第二次世界大戦が始まる前ごろだったと思う。私の兄や斉藤繁一氏、宮本由太郎氏、斉藤実正氏、クリチーバの井藤時雄氏等が中心となって、全伯的な組織運動を起こしておられた話も聞い

ていたのであったが、それも戦争のため成立せずに終わっていた。

その後、斉藤繁一氏が、終戦後の勝った、負けたの問題で、日本人同士が血を見るような争いとなり、思想的混乱状態を呈し、親子兄弟の中でさえも、生長の家の同志の中でさえも、勝った負けたの争いが引き起こされてしまったので、一般社会から「生長の家」は調和を説く教えが同志相争うとは何事かというような非難の声があるというので、「睦」という雑誌を発行して、「生長の家」という名前を使わないでなんとかみ教えを伝え、同志のつながりを密にして、そのことが、そのまま同胞のむつみになるようにというようなお気持ちで月々の雑誌を出したいから、あなたも原稿を書いて協力してくれとの便りを頂いた。

私は兄が積極的にみ教え普及に挺身していたので対外的には活動はしていず、前に書いたように、地元のコロニアで多少お役に立たせて頂いていて、時期が来たら、どんな仕事でも、光明化運動のことならなんでもやらせて頂きたい、頂くつもりでいたのではあったが、「生長の家」の名前を使わずに生長の家運動をすることは私は好まなかった。

生長の家が非難され、世相が乱ればみだれるほど、「生長の家」はこのようなみ教えでありこうしてこそ世の中は明るくなるのであると、ハッキリ世の中に「生長の家」がどんなみ教えであるかということを知って頂いて

こそ明るい世界は生れ、人々は仲良く調和するのではないかと思う。

「生長の家」は人間一人一人を「神の子」だと教え、命の兄弟だと教えているのだから、このみ教えほど力強くむつみ合う教えはないのであるから、なにも「生長の家」の名前を遠慮する必要はあるまい。正しい運動は何物をも恐れる必要はないのではないか、自分としては、……自分の今日あるのも、また明日あらんとするのも、ただ「生長の家」のみ教えあればこそであり、み教えのためならば、いつ死んでもいとわぬ覚悟で生長の家を信仰しているのであるから（恐らく死ぬことはないが）「生長の家」の名前を使わないで「生長の家」の運動は私には出来ません——という意味の手紙を書いて送った。

すると、斉藤氏からは「自分の気持ちが分って頂ければ協力して頂かなくても結構だ」という御返事がきたので、私は私の道を行く——という考えで、「睦」誌には一ページの原稿も書かず、一冊も購読しなかった。

後日、ハワイの大村忠経氏から戦争当時ハワイの「生長の家」の人々は堂々と「生長の家」の名称を使い、軍政局の許可を貰って集会をしているという便りを頂き、また谷口雅春先生からの御手紙にも、（講師になつてから）「睦」誌を講演のテキスト等に使ってはならないとお言葉を頂いたので、自分は自分の道を歩いて良かったと思つた。

ある時、誰からだったか憶えていないが、「睦」誌を一冊貰ったことがある。その中に、雅春先生の「知恵の言葉」の中のお文章をそのまま個人の名前で発表してあったので淋しい思いで読んだこともあった。この「睦」誌がいつ頃廃刊されたのか、それも私は知らない。

こうしたことがあったからか、どうしてか知らないが、私達兄弟は「勝ち組」のクチクチと世の中に宣伝されていたらしい。もつとも私は時局が本当にハッキリするまでは、絶対に、口がさけても、日本が負けたということはいいたくなかったので、勝ち組と言われても、負け組と言われるよりは満足していた。

宮川大尉

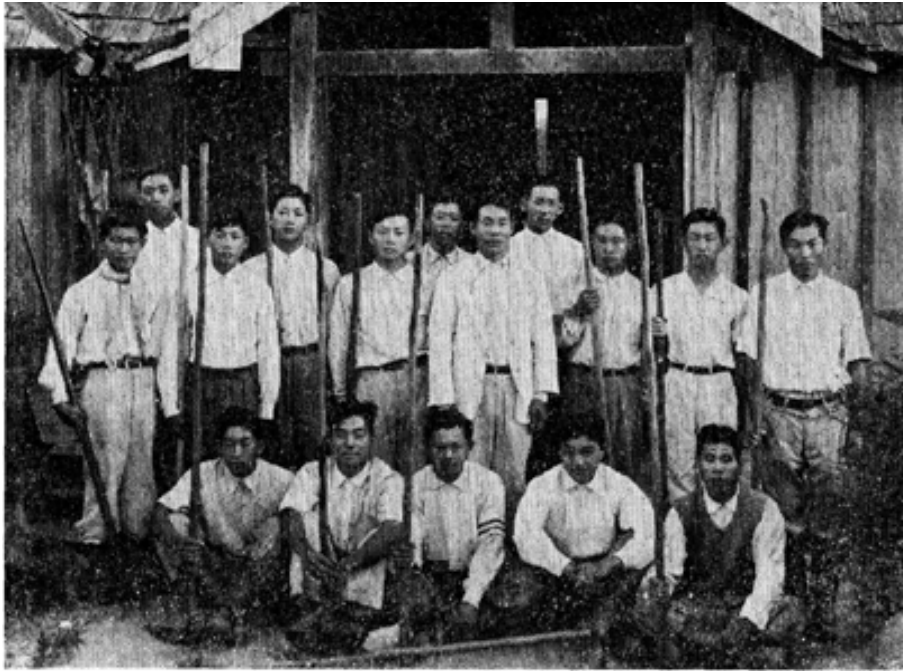
皇軍の戦勝を信じていた私は、練成道場に来る青年達の指導も、コロニアの男女青年会の教育も、自然、全世界を相手にして戦い、それに勝った栄光輝やく日本人、誉れある日本人としての人間教育でなければいけないと思つて、話のテキストには多く『生命の実相』の「信の巻」、「信の力」、「天皇絶対論とその影響」という御本を使った。昔、松下村塾の吉田松陰が、天皇に逆く賊の話をするときには眉をさかだて、眼をいからし、ご皇室の不遇を話す時はハラハラと涙を流しながら弟子達に講義をしたという話を聞いていたので、我れ昭和維新の吉田松陰たらんの意気込みで、「七たび生れて賊を滅さん」と

か、「正成一人だに生きてありと聞召し候ただ陛下の御運必ず開くべし」といった忠臣楠正成公の話や、「そよ吹く春の小風も、垣根にすだく虫の音も、これ悉く天皇の顕現にあらざるはなし」と万古天皇を仰げと子らに『大義』を書き残して長城戦の花と散っていかれた昭和の楠公と称えられた軍神杉本五郎中佐の士官学校時代の物語を泣きながら話したものである。

また、青年は精神を養うと同時に、身体も丈夫にせねばならぬというので、毎週火・木・日の午後五時から相撲をとらせた。幸い私の土地に相撲の先生もいたので、その人に頼んで教えてもらい、青年にやれというには自分がまずやらねばと、私も裸になって若い青年に混じってやったものである。

初め投げられるのがいやだとか何とか言っている者もあったが、全部裸にするので否応なしにとるうちにぐんぐん上手になって、後では喜んでとるようになった。若い人の力は鍛えればぐんぐん伸びるものである。

あまり厳格な家庭に起こりやすい問題とし



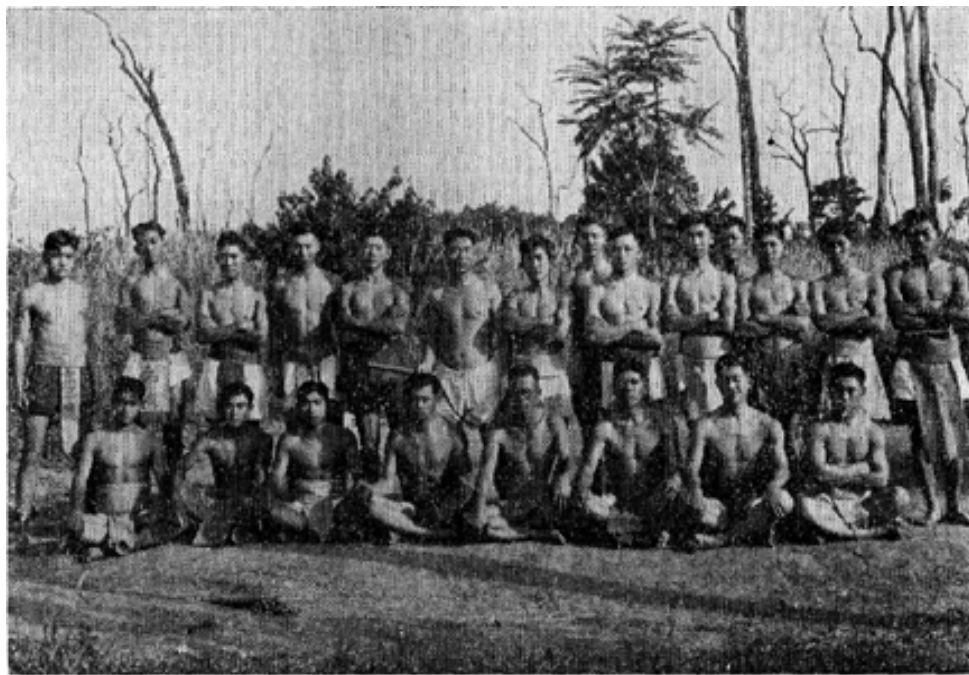
イバイチ皇運扶翼青年練成道場作業に出動する青年達(1949年)

て、年頃の娘さんが脱線するということがあるが、その時分私の道場に宮川〇子さんという年増の娘さんは、あやまって伯人の子をはらんだというので親から勘当されていた人である。道場に来て炊事のお手伝いをしながら『生命の実相』を勉強しておられるうちに、自分が悪かったことが分り親を怨んでいて申し訳なかったと悔いられるようになって大変素直になられたので、兄達がコロニアのある青年と結んであげることにした。そしてこの機会に今までのことを許して頂き、再び縁を結んで頂こうと結婚式を挙げる前に、ソロカバナの奥におられた御両親に来て頂いた。この人が陸軍大尉宮川茂彦氏であった。

いろいろ生長の家

の話をしていろいろうちに大変お喜び下さり、勘当も結婚も心よく許して下さい、みんな涙を流して喜び合ったのであった。

この宮川大尉が、私の家に泊っていられるころ、毎朝道場の庭に日の丸の旗を掲揚、整列した青年達が東方遥拝（ようはい）し、愛国行進



中央、軍配を握っているのが著者

曲、大政翼賛歌、道場の歌を声高らかに唄い、また上半身裸になって訓練をしている姿を見られて、さすが帝国軍人、昔のことが思い出されてとうとう惚れてしまい、ある日私に、

「松田先生、私をここに来させて下さい。そして私にも手伝わせて頂けませんか」とおっしゃるので、この老軍人がその道場で余生を甲斐あるべく生きて下さるならどんなに有難いことかと思い、喜んで来て頂いた。

老大尉は、七月頃の寒い朝も青年と一緒に、裸になって教練を教えたり、かけ足で一キロ二キロと走ったりして本当に喜んで道場の青年教育にお手伝い下さったが、二年目に道場で合掌しながら満足してお亡くなりになった。

本部との連絡

私は、終戦直後日本から来るという手紙や本などを心（しん）から信ずる気にはなれなかった。

ある日、ハワイの下見彦夫氏に日本本部との連絡はどうなっているかをきいて手紙を出してみた。すると、その返事が日本の本部の原六郎氏から左のように届いた。日付は昭和二十五年の二月十七日になっていた。

「拝啓時下益々御清適の段奉大賀候。

陳者只今ハワイ下見様宛の貴信拝見仕候。実は下見様より本部清都理門先生宛書簡の中に同封してあったもので、

それを小生がハワイ大村忠経様とも十年程前から懇（ねんご）ろにしている関係とまた小生がブラジル国内の人々とも文通しているのです、しかもサンパウロ市の宮本由太郎様とは特に懇意として目下も文通していますことからして、御返事を書く光栄に浴した次第に御座候。

貴下におかれては、『神の子』の道義をよく体得し以て多くの青年男女の御指導にあたられていることは誠に感激感佩（ばい）の至りに存上候。御地に於て戦前、戦後派ともいうべき『生長の家』信徒誌友あるを聞くの次第に候。然しこれも時のことにて致し方もなきものと考え、その中に神はよきようにならしめて下さることと信じ居り供。ハワイ地方もその如き様子を呈せしこと有之候も目下は社団法人組織も設立許可なり、誠に有意義な発展にて明後二十日中島興一主管ハワイに巡講のため飛行機出発予定となっている次第に御座候。貴下の光明化運動の挺身誠に有難く御礼申上候。

近日『生長の家』誌の見本数冊お送り申上候間是非御高覧被下御宣伝願上候。

ハワイ下見様よりは当生長の家社会事業団も大変御世話に相成居候者にて候。よろしく願申上候。

サンパウロ市宮本由太郎様のところには本部より多数の書籍お送り致し置き候へば御連絡下されたく候」

手紙にあるように宮本由太郎氏は既に本部と連絡をとり、戦後の御本もたくさん取り寄せられ、大いに宣伝しておられ、また戦争後の物の足りなかった日本にいろいろ

ろな品物を送られるという話を聞いて知っていた。

しかし、そのようなことが結局敗戦組とか認識組という名前をつけられる原因となつて、勝ち組と言われる人たちは段々と遠ざかつていったようである。

私は前にも書いたように、勝ち組でも負け組でもなく超越組のつもりではいたが、認識派というと妙に嫌いで、ある時、私の家に私達がいろいろお世話になつている金持ちのファゼンデイロ（大型農場主）が来られて、日本敗戦の話を盛んに話し出されたので、癪にさわって仕方がなく、とうとう私はその人に、

「○○さん、私の家では日本が負けた話はしないようにして下さい。私達は絶対に日本の敗戦は信じないのですから」

と顔を真赤にして言つたので、その人はびっくりして、「日本が負けたというのじゃないのですよ。こうして戦争は終わったという話ですよ」

とコトバをかわされたので、それ以上争うこともないので、それ以上何も言わなかったが、恩義は恩義だが自分たちの祖国が負けたことを軽々しく言いふらすのを私は好まなかった。

勝つたにしても、負けたにしても、その蔭にどのくらい戦争のため尊い犠牲になつて、外国の土となり、大海の底深く沈んでいる人々がいるか分らない。また家の中心とも柱ともなる親を、夫を失つた人々が、家を失い、衣

食に苦しんで路頭に迷っていることであろうかということ想像すると、私は泣きたい思いがしていたので、もつと世の中がハッキリ明るくなるまでお互いに耐え忍び、祖国の幸いを祈るのでなければならぬと思つてゐた。

そういう訳で私は宮本由太郎氏とはまだ一度も逢つたこともなく、どんな人か知るよしもなかったが、書店をやつていられるというので何度か本を注文したことはあつた。

戦後の本をどんどん取り寄せ、日本敗戦を信じている人というだけで好きな人とは思われず、原六郎氏から手紙が来ても、

「私は日本の敗戦を信じる人と共に協力して人類光明化運動はしたくありません」と、きつい手紙を書いてやつたものである。

二つ目の希望

それからしばらく経つてから戦後の神誌――まことに貧弱な神誌が送られて来たが、読む気はしなかった。でも、教団の組織や、信徒相愛会（戦後はそういつていた）の作り方などのパンフレットが来たのを見ると、相愛会設立申請書を本部に出して本部の許可を受けねほならなくなつており、相愛会には講師の布教者がいることになつていた。

そのことを相愛会の人々に話すと、相愛会の長老たちが、私たちに相談なしに、「松田先生ご兄弟はブラジルにおける生長の家の草分けであり、現に青年道場を作って青年の指導やコロニアの青年男女、相愛会など御指導下さっているのであるから、この際、正式に講師になって頂こうではないか」との相談を進めて何人かの長老たちが私たち兄弟の講師推薦状を書き、コロニアをほとんど廻って全部の人々の署名をして貰って、それを日本本部に提出せられたので昭和二十五年十一月十三日付をもって、ブラジル最初の地方講師任命の辞令が送られて来たのである。

思えば、入信当時の私の三つの希望の内、青年の集まる道場はささやかながら実現していたが、今二つ目の希望である講師がここに実現したのである。

心の底からなる人間の切なる願いは必ずきかれると谷口雅春先生は説いていられるが、それが事実であることを私はまた実証することが出来たのであるが、自分ごときが谷口雅春先生と今、恵まれて師弟の関係を直接結ばせて頂いたのだと思うと、言い知れぬ喜びと感激とに胸踊る思いであった。と同時にまた、今後の使命を成し遂げていく上の大いなる責任を感じずにはいられなかった。

昭和二十五年の三月四日には「フジヤマの飛魚」と言われた日本の水泳選手が遊佐監督の引率で、村山、古橋、橋詰、浜口の五人が胸に日章旗のマークをつけて堂々と来伯？ 大歓迎を受けることなどのこともあって、世の

中がなにかしら明るくなつたような気がするのであつた。そうしてウスウス日本は負けたということが本当ではなからうかとも思うのだが、胸に日の丸のマークをつけ、勝つた国から大歓迎を受ける選手たちの晴れやかな勇姿を見る時、やはり日本は勝っているのだとも思えて仕方がなかつた。

全伯信徒連合会成る

終戦後五カ年を過ごすうちに、あちこちの誌友信徒の間に、元通りの楽しい集会にしたいという願いが盛んになり、この素晴らしいみ教えを、出来る限り全伯的な組織を作り、連絡をし合い、力を合せて大きく運動したいという願いが燃えさかってくるのも無理もないことであつた。

サンパウロ―特にモジ方面の信徒たちの間にその氣勢があがり、昭和二十五年の暮れにそれら信徒有志から、来る昭和二十六年一月八日、東洋ホテルにおいて全伯的な生長の家の組織をつくりたいから是非御参加頂きたいという招待状が兄の許に届いた。

私はうれしくてたまらなかつた。いよいよ素晴らしいことになる。一人一人が個々の働きをするのもよいが、同じ信仰に生きる人々が団結して強力な組織のもとに運動することが理想である。

そうなる、私も出来る限り働かせて頂きたい。今

までは主として兄が活動して来たけれども、私の一生の願いはブラジル各地を歩いて、「人間神の子」の教えを、これから大きな夢を描いて伸びていかねはならぬ若い人達にお伝えして、共々若い人生を力強く、明るく尊く生きていきたいということにあるのだし、既に、それが出来る、その資格を与えられたのであるから私もその会議に行ってみたくて仕方がなかった。

特に気にかかったことは、たとえ全伯的な組織をつくるというその主旨や企ては立派であろうとも、そんな団体が勝ち組にも負け組にも片寄らず、調和を失わない団体でなければ団結は出来ても美しい発展は望まれない。

信徒の中には既に勝ち組、負け組があり、思想が違えば物も言わぬと言われている中で、この会を招集した幹部たちは、どのようにしてこの溝をうずめて、お互いみ教えのとおり大調和を生きていくようにするであろうか。もしいいかげんな団体をつくってゴタゴタするようなことがあつては世の中の物笑いになるばかりでなく、人々にお勧めして同志になって頂く運動は到底望めない。つくるなら立派なもの、そうでなければいいかげんなものは初めからつくらない方がましだと真剣に思ったものだった。

でも、その会議が行われる前の日、道場第二期生のトッパンの高保秀雄君から結婚式の案内状を頂いていたので、私はどうしてもそちらへ行かねばならず、心は二つ、身は一つ、ということ、私はサンパウロ行きを断

念してトツパンに行つた。

めでたい秀雄君の結婚式が済んでもそのことが頭にこびりついて離れない。寝ても眠れない。とうとう意を決してサンパウロに行くことにした。でも汽車で行つては間に合わないの（今のように直行、夜行のバスはなかったの）思い切つて生れて初めて飛行機で飛んだ。初めての体験する機上の旅の快さを喜びながら、生長の家に入信した時分、人間が神の子だったらどんな立派な生活にしてもよい筈だと思い、汽車なども努めて一等車にし、やがて飛行機で旅行することも出来るであろうと思つたりしたことを思い出して、とうとう飛行機に乗つたと思うと感無量のものがあつた。

サンパウロに着いても、どこがどこだか判らぬので（タクシーに乗つたのも初めて、よく思い切つたものだった）中央メルカード近くの東洋ホテルに走つた。

会はまだ始まつていながつたがたくさん集まつていた。私は胸の動悸を静めながら会場の一番後ろに陣取つた。斉藤氏や川崎氏も見えていた。その他の人は誰一人知らない人ばかりだつた。なるべく知つた人にさとられないようにと思つて小さくシャガンでいた。でも心の中ではいいかげんな会なら承知できぬぞと思つていた。

いよいよ会が始まることになつたが、案内状は出したがお顔はどこのどなたか分らない方が多いので、まず自己紹介をして頂いて、うちとけて会議をさせて頂こうということになつて、自己紹介が始まつた。

えらいことになったぞと思ったが、とうとう自分の番が来て、仕方なく呼ばれざる客として名乗りを上げた。すると、

「ヤア、松田先生の弟さんが来ている」

ということとでつれだされてしまった。いろいろ会議は進められ、いよいよ「全伯信徒連合会」という名称で出発することになり、それぞれ役員が決められた。

その時の役員の顔ぶれは次の方々であつた。

顧問 松田 大二郎

齊藤 繁一

川崎 辰男

会長 高木 定一

副会長 宮本 政春

総務 齊藤 実正

常任理事 岡本 繁

会計 庄山 才吉

書記 吉川 清

さて、会は出来たが私が一番気にかかっていた、勝つた負けたの問題はいっこう討議されないのです、どうしてもこの会を立派にしていくには、この問題に対してハッキリしたものがないかならないと思つて、

「全伯的な団体が出来たことは誠に喜ばしいが、現下、邦人間のみでなく、我々信徒の中でさえも勝つた負けたの

争いがあるのに対して、幹部諸氏はどのような態度でぞまれるのであるか。例えばサンパウロ信徒相愛会の宮本由太郎氏はこの席に見えていないがどういう訳か？」

というようなことを質問した。

幹部も、その他の人々も静かに黙ってしまった。もつとも重大な、深刻な問題だったからである。

例えば、幹部の主なる人々が勝ち組であり（大体そうだった）、負け組を排斥するような気持ちがコトバに出なくとも心の中にあつたら、負け組と言われる人は明らかについてこないだろう。幹部が負け組であつても同じことが言えるのである。ついてこないだけならまだしも、心の違う人々は類をもつて集まるといつて別にかたまりが出来たらどうだろう。

信仰に党や派閥があつてはたまるものではないが、しかし、あの戦後の場合そうなるのは明らかであつた。

もしそうなつたら、にせ信仰になり、世間から生長の家に二派あると言われることは火を見るより明らかである。それでは立派な宗教活動とは言えないのだから、この問題を特に幹部になる人が、勝敗を超越して、人間神の子でいけるかどうかということだった。

するとある一人の人が、

「君はどう思うか」

と反問されたので、

「私は勝ち組の人にはあなたの気持ちは分るが、もつと世の中が明るくなるまで耐えしのびましょう。たとえどん

な人でも神の子である以上、天皇の御子ですから、お互いののしり合うことなく手を取り合っていきましょうと涙で説得し、負け組の人にはやはり泣きながら同じように説得していくべきだと思います。とにかくみ教えを中心としていきましょう」と答えた。

みんなは「それがよい」ということになり、万々歳のうちに会は終わった。

ところが、その会議があつてから間もなく、ある新聞紙上に「生長の家お家騒動」という見出しで、サンパウロの宮本由太郎氏が本部から許可を得て信徒相愛会を作っているのにもかかわらず、勝った組の信徒が集まつて、パラナの新松田兄弟がこの頃講師になつたのをかつぎあげて、別に全伯信徒連合会とかいうものを組織した、というようなことを書きたてた。

だが、我々は別になにも宮本氏に対抗するつもりはなかったのだし、そんなことは事実なかったのだが、そういう世の中だった訳である。

実際我々の力ではどうすることも出来ないものであつた。ただ神がすべてをよく導き給うようにと祈るよりほかなかったのである。

尊師にまみゆる

本部からの手紙

さて、全伯信徒連合会というものが発足し、立派な道場をシダーデ・アデマルに借りて、道場主管には宮本政春氏に担当して頂いていたのであったが、まだ内外ともにいろいろな問題があり、常に暗雲ただよい、風あらしという訳で容易に統制はととのわず、組織的な活動は出来そうにもなかった。

一方、私はイバイチの青年練成道場を充実したいと思っていたので、本部にいろいろ指導方針の指示をお願いしておいた。

その前、本部より通信があり、道場の名称から「皇運扶翼」の四字を取るようにとのご指示を頂いていたのであるが、私は「生長の家」からどうして「皇運扶翼」の文字を取らねばならぬのか谷口雅春先生は、天皇陛下の御運を扶翼し奉るべく御生れになり、み教えを伝えていらっしゃるのではないか、だからこそ我らも生命捧げて御奉公が出来ると思つて喜び勇んで信仰させて頂いているのに、その大事な「皇運扶翼」の文字を取ることはない、それはあまり情けないことに思われて私は本部の指示に従わず、そのまま「皇運扶翼生長の家青年練成

道場」の名称を使っていた。

すると、昭和二十六年二月二十七日付で本部から次のような重大な手紙が届いた。その全文を残しておく。

「合掌 益々御健勝にて生長の家教義普及による人類光明化に御尽瘁下され感銘の至りに存じます。先般来度々の御通信を頂き、貴地の事情が判明致し有難く存じております。然る処、貴地の実際活動の面に関しましては重大な問題もありますので、殊に先般貴練成道場についてのお尋ねに対する回答は、吾等教えを奉ずる者として根本問題でありますので、谷口雅春先生にお願い致しまして、先生の親書を以て御返事申し上げます。先生には御教えを奉じる者に対する御教導のみならず国家を生かし、世界人類救済の悲願をもって書簡をしたためられたものと拝察せられるのでありますから、熟読、心読せられ、先生のお心を活動の上に生かして頂きたいのであります。

人間神の子、総感謝、大調和の御教えに生かされている生長の家信徒の間に不調和がある筈は無いのであります。総ては善くなるための相でありまして、互いに拝み合うのが生長の家であります。御教えを実践し、教えを正しく伝えることが信徒の愛行であり、絶対使命であると存じます。

光りをもたらす先生の親書により、最も善き状態になります事を信じております。

右の他、お伝え致したい事を左に記します。

一 生長の家教団の宗教活動は、宗教団体としての組

織的活動でなければならぬのでありますから、総ては教団本部の意図方針のもとに活動して頂きます。

一 宗教活動と政治活動とを分離しておりますから、政治的運動に関与しないこと。（講師及び団体の名に於いて政治に関与することを禁じております）

一 先般、在東京の総司令部宛でブラジルの所謂『勝った組』に関する報告があり、その内の団体名のうちに『生長の家』の名があつたとか聞き及んでおります。そのような事は日本に於ける生長の家教団に対し、好ましくない。（現象界の相に於ては、現在の日本は既に御承知の如く昭和二十年八月十五日、ポツダム宣言を無条件受諾して以来、アメリカの占領下におかれていて未だ完全に独立していません）

△御参考▽

一 『全伯信徒連合会』と銘打つ以上、文字通り在伯の信徒全体を包含したものでなければならぬのであります。この実現を期待しておりますが、これは非常に大きい形態でありますので、頭を先に組織するところに無理が無ければよいと思います。

一 一例を申せば、地方的にその地区の信徒連合会を設け、その連合会が連合して全伯連合会が設けられるというような組織的順序であります。

一 貴国の事情は詳かではありませんが、正しい形態から申しますと、宗教活動の主体は教団に属する支教会

（教化部）の性格のものが至当なのであります。それが各地にある信徒相愛会及び信徒会業務を総括的に世話をすることになるのであります。

一 内地の例を記しますと、

支教会（教化部）信徒相愛会は教団に属する地方組織でありまして、信徒連合会は信徒自ら組織した団体であつて、教団の活動を援助する協力団体であります。正式に許可された信徒相愛会以外に信徒が集まって会合を開いているものを信徒会と申しております。

一 支教会の設立してない地方は、その地方の信徒連合会が支教會的の役割を果しております。

谷口雅春先生の御親書の写を宮本由太郎氏に送付致します。

幹部諸氏によろしくお伝え下さいませ。敬具」

谷口雅春先生の御親書

本部からの御便りと前後して、本部からの便りの中にあるように谷口雅春先生の御親書を頂いた。

内容はともかくとして、谷口雅春先生直々の御便りを頂いたということは、谷口雅春先生を生命の恩人とも不世出の大聖者とも、釈迦・キリストのみ教えを成就する偉大な救世主とも仰ぎ憧れて先生に一命捧げて悔いなく喜びで信仰していた私にとつては、まさに天にも昇るような喜びであり、名誉であつた。そのような思いで開封

し、拝読するお手紙は次のようであつた。

ブラジル 松田巳代志様

谷口雅春

拝復 全伯信徒連合会に関する貴下並びに宮本由太郎氏双方よりの通信を受取りました。

去る昭和二十年八月十五日終戦後、在伯誌友間に戦勝確信派と戦敗派とか別れて相剋して参りました由、その相剋は解消せねばなりません。戦勝派も戦敗派も、あまりに現象の短期間に就いて、一方は現象のみを見て戦敗していると言ひ、他方は現象に既に戦勝があらわれていると言ひますが、吾々、日本の現地に在る者から見れば、どちらも相当の理由があるのでありまして、両者は決して争う理由がないのであります。私は切に和解して一体となることを希うのであります。

「久遠実相の日本」は永遠に勝者であります。現象に於ては、戦いには一勝一敗があるのであります。かの八月十五日の終戦こそは、その一勝一敗のうちの一敗の一時期でありました。秋が来り冬が来るように、日本は、秋の木の葉の散るようにあの時大敗をきしたのであります。吾々は、実相極楽の世界に於て「久遠不滅の春」の存在することを知り、木の葉の散ってしまった冬の樹にも、その散っている間に、一陽来復の春の花の爛漫として咲くための「永遠の春」のいとなみが続けられていることを知らねはなりません。それにしても四季の変化があ

り、冬には樹の葉は葉を落して枯れたように見えるのも現実であります。「永遠の春」を知る者も「冬落葉」のことを知らないのは真実を知らないのとあります。現在、日本の国は「冬落葉」の厳寒期をやつと経過し、春爛漫への緒を見出そうとしつつあるので、かの八月十五日は「冬落葉」の日であつたのであります。それはアメリカの宣伝ではありません。吾々は今「冬落葉」の日を苦しんで来たのであります。宮本由太郎氏は「冬落葉」の日を知つて、冬落葉の日本の人々の復興のため協力して来られた人であつて、決して敗戦派の人として排斥すべきではないのであります。時と場所と人との三相応というところが生長の家の教えでありますが、天皇信仰を説いて日本の氣勢を挙げるのが好い時もありますが、今はその時ではないのであります。しかも一時の敗戦は永遠の敗戦ではないのであります。米国の原子爆弾のために粉碎されたる日本も、今や、米国と友好国となり、米国の好意により、有利な条件に於て講和が結ばれようとしているのであり、その講和が日本に有利となるように結ばれるか否かは、連合諸国が日本に対して好感をもっているかどうかであります。

フィリッピンの如きは、戦争中に日本軍の一部が残虐行為をしたというので、ひどく日本を恨んで日本の帝国主義が再起出来ないように日本から払いきれないほどの賠償を要求していますが、アメリカは寧ろ、唯今、日本を憤らせまいとして、フィリッピンを慰撫しているので

あります。アメリカはソ連邦の共産主義侵略に対して防ぐために、日本をもう一度武装せしめ、日本を強国化したいと思っていますのであります。この際この時、ブラジルにいる日本人たちが旧帝国主義と同じだと見られやすいような天皇信仰を説いて、その青年練成で氣勢を挙げると言うことは、連合国側の日本民族に対する反感又は恐怖心をそそることになり、日本の講和条件に不利な、困難な条件を日本に押しつけようとすることになる恐れになるのであります。そこで、日本民族は血氣にハヤルことなく、隠忍すべき時には隠忍しなければなりません。一尺伸びようとするには一寸縮むことが必要であります。冬落莫の日に新芽を伸ばせば、その若葉が烈日に触れて枯れてしまうほかはないのであります。冬落葉は必ずしも永遠の敗戦ではありませんが、永遠の勝利を完うするためには、冬落葉の時に若芽を保護する方法に出ること知らねばなりません。今やアメリカは日本の味方となり、日本を護つて、ソ連邦の侵略に向つて戦おうとして、日本の強国化を企画しているのでありますから、そのアメリカの感情を害するような運動は、ブラジルに於ても慎しんで頂かねばなりません。天皇信仰や天皇礼拝をやることは、日本の軍国主義を復活するものと誤解せしめて、日本へのアメリカ人の信頼感をうすくし、アメリカをして日本に苛酷な講和条件を押しつけて、長く日本国、祖国の人々を苦しませる結果になるのですから、そんなことを表面だてた運動とする皇運扶翼青年会は、お止め

になさる方が天皇陛下のためでもあり、祖国にいる日本人へのためでもあります。「時」と「場所」と「人」との三相応を知らないと、善も悪に変ずるのであります。冬落葉の時に新芽を出す勿れ。冬落葉の現実を知り、しかも、永遠の春を知る――これが生長の家の人であります。戦勝派は現実を見ずに、実相永遠の勝利のみを見る。戦敗派は実相永遠の勝利のみを見て、面も現実にも弱っている日本の現状を何とかして救いたいと隠忍自重しているであります。いずれも日本を愛し、祖国を愛する熱情から来ているのであります、まことに有難いことです。りますから、この際、宮本由太郎氏とも和解し、天皇信仰のことは今しばらく表面に説かず、日本教文社から戦後に出された本をテキストとして、親米的な方向に生長の家の教えを人に説かれます。それには戦後の「生長の家」「白鳩」等の雑誌は全部フリガナ付になっているのでありますから、それらの読者を出来るだけ増加して「睦」など、本部の検閲をうけないものをテキストにせられないように願います。

昭和二十六年二月二十五日

これで谷口雅春先生の切々たるお手紙は終わっている。私は全文を拝読しながら涙が限りなくあふれ落ちるのであった。先生の深く尊く限りなく切なるみ心が、からだにも心にもしみ通る思いであつたからである。

宮本由太郎氏のこと

私は極端な戦勝派でもなかったし、宮本由太郎氏ともなんら争いをしている訳でもなかった。

むしろ私が谷口雅春先生の『天皇絶対論とその影響』という本を拝読した時、昭和の軍神杉本中佐の事が書かれてあったのに感激して、宮本書店に杉本中佐の『大義』という本はないかと尋ねて手紙を出したことがあるが、その折、宮本氏から「売る本はないが私の蔵書にあるからその本を献呈する」といって、表紙裏に「天皇信仰」と揮毫（きごう）してその『大義』という御本を送って頂いたことがある。『大義』はまことに素晴らしい御本であつたので、その大事な御本を蔵書の中から送って下さつたその好意に対し、尊敬の念こそあれ、その他の何物もなかったのであるから、そういうことでの反省というより、谷口雅春先生のあまりに深く尊い心、無我絶対のお心、絶忠の心、愛国の真心にふれたその感激と喜びであつた。

その昔、南朝の忠臣楠正成公が、陛下の大御心ならばと、みすみす負け戦と知りながら我が志を受け継いで、天皇を守護し給えと、我が子正行公を桜井の駅よりかえし、身は七たび生れて国賊を滅さんと叫びつつ湊川に出征せられた楠公を思い出すのであつた。今楠公に勝るともおくれず、祖国を想い、天皇を想い、民族を愛し、人類を愛し、しかも実相不滅の世界を見つめつつ現状に無

我を生き切っていていられる尊師を思う時、泣かずにはいれなかったのである。

そして、このような尊師を仰ぐことの出来る自分がたまらなくうれしかったのである。

「二時の敗戦は永遠の敗戦ではない」、「久遠実相の日本は永遠の勝者である」、「冬落葉の樹は枯れたのではなく春爛漫の準備である」だから、「冬落葉の時に新芽を出さぬこと」——なんと深いお諭（さと）しであろうか。私は満足であつた。

しかもお手紙の最後の方で、「天皇信仰のことは今しばらくその表面に説かず——」とあるのに私は満足した。というのは「今しばらく」だから、やがて説いてよい時が来るということであり、「表面に説かず」だから、内面には堅持せよとの言外の言があると私は受取つたからである。

日本は負けた——ということはあまりの驚きであり、悲しく淋しいことであつた。でもそれは永遠の敗戦でなく、むしろ永遠の勝利のためであるならば、私はその悲しみ——といっても、祖国の人の受けた苦しみ、悲しみに比ぶれば物の数にもならないかもしれないが——によく耐えて、導師の御言葉のままにそれを信じ、生きていかねばならない。

それから私は道場の名称から「皇運扶翼」の四文字を取ることにした。そして導師とともに絶忠の人たらんと願いつつ時の来るのを待つ思いでいたのである。

尊師のご親書を頂いて喜びと感激と新しい覚悟でいた頃、それは昭和二十六年六月一日、訪日中だった遠藤常一郎御夫妻が帰って来られたのであるが、その遠藤氏に託して本部から、総裁先生御夫妻の署名入りの御写真が全伯同連合会と私達兄弟に贈られた。予期もしないことであり、しかもそれはどんなにか憧れ願っていた導師の御写真であつたであろう。

入信当時、「主婦の友」に載っていたのを思いがけなく伯人の小学校の女教師から頂いて、それを復写し、アミ目の太く映っているお写真を掲げて（このお写真は後で訪日の折、先生に差し上げた）後生大事に、魂の父として、師として拝んでいたのであつたが、この度、予期もしないのに本部から先生のお許しを受けて、先生御夫妻の御署名入りのお写真を頂いたのである。これが悦びでなくてなんであろう。先に先生の御真筆の御親書を頂き、今またこの悦び、なんとという光栄と喜びであろうか。私は言い知れぬ喜びと感激の中に、み教えに生きる身の幸福を満喫したのである。

機上の合掌

昭和二十六年一月九日、全伯信徒連合会が誕生し、本部へ申請していたのがその年五月三十日付の谷口雅春先生のお言葉によって、生長の家ブラジル総支部という名称に替えられて許可された。

かくて、形の上では全伯的な組織が出来上ったが、そして勝敗を超越していこうとの話合いが出来はしたが、信徒間の勝ち負けの相剋問題の解決は誰にも出来そうにもないし、出来なかった。そこで幹部の間で、日本の本部から講師を呼んで解決するよりほかに道なしという話が持ち上り、どの先生がよからうかと協議するのであるが、誰一人本部の先生を知っている訳でなく、仕方がないので、講師の肩書きでこの人がよからうと選んだのが徳久克己先生であった。徳久先生の肩書きは本部理事、青年部長、本部講師、その上に医学博士という素晴らし肩書きがあつた。この肩書きの方ならブラジルの同胞間の争いをきつと解決して下さるに達いないということでお招びすることに決まつた。といつても、名ばかりの組織が出来たばかりで、集まる会場も借屋であり、運動する資金があるわけではなく、徳久先生の招聘（しようへい）の話も難航を続けたが、借金しても、ということと昭和二十七年三月二十二日付で招聘が発送され、同年四月十日付をもつてご来伯の許可が降りた。そしてその年の七月十三日、多くの信徒が大きな期待をかけてお待ちするコンゴニヤス空港にお着きになったのである。

ブラジルに生長の家の炬火が昭和九年に点ぜられてより十八年目、初めて日本の本部から先生がお出になる、という朗報は、ブラジル全信徒の大きな喜びであつた。殊に、一番気にしている戦争の勝敗が明らかにされるといふ期待も大きかつた。また、この同胞相剋の問題が、先

生ご来伯によつて解決するであろうということも大きな望みでもあつた。でも血を見るような争いの中に来て解決して下さる人は相当の年輩者で、威風堂々たる体格も人格も立派なお方でなければならぬ。そういう人が欲しいと思ひ、徳久先生をそのようなお方であつて欲しいと想像して複雑な思ひで待つていた。

ところが、飛行機が着いて、扉が開いてタラップに立たれた先生のお姿は全くの期待はずれだつた。まだ大学を卒業したばかりのような若い美男子なのである。瞬間歓迎の信徒は期待外れの面持ちだつた。大丈夫かしら。鼻ひげは生やしておられたが、ブラジルでは鼻ひげはあまり値打ちはない。というのは、田舎で跣足（せんそく）で働いているカマラーダ（使用人）でも立派な鼻ひげを生やしているからである。

ところが先生のお姿は次の瞬間合掌に変わつていた。それまで生長の家の同志でも合掌を挨拶にはしていなかった。しかも合掌の姿の尊さ、歓迎の一同は先刻の不安は一掃されてしまつて肅々として涙を流しているのである。合掌の姿の偉大さよ。合掌のまま降りて来られた先生も歓迎の花束を抱きながら泣いておられた。そして、「皆さん有難うございます。私は今うれしくて何も話すことが出来ません」と言つて涙を拭いておられるのである。洋々たる大海を遠く渡つて、ちやうど日本の裏側のブラジルにこんなにも多くの人が信仰に生きているのかと、いうことを目の前に見て、うれしかったに違ひないので

ある。

その夜、徳久先生の講演会が旅のお疲れもおいといなく、聖市ドン・ペードロ公園の青年会館において催された。「日本の本部から先生が来られた」、「産婦人科の医学博士」、「日本のことが聞かれる」等々の大きな期待で大変な人気であり、生長の家の信者でない人も押しかけて、定刻には立錐（りつすい）の余地もない盛会で、たくさんの人が入れず帰って行った。



心尽しの歓迎会。総支部の会館もない時である。イスもリンゴ箱に板を渡した。

不滅の実相

どんなお話があるか、大変な興味をもって私は一番前の席で固唾（かたず）を吞んでいた。ところが、予想もしない産婦人科の話である。勿論産婦人科のお医者さんだから一寸も間違いではないが我らの期待とは遠い話である。先生は明るく笑いながらお話になるが誰一人笑う人はいない。

呆然としてどうなるものかと不安顔であった。有難いみ教えの話や、戦争の結果の話が聞きたいのに産婦人科とは何事だろう。

その上、宗教の講演会にゲラゲラ笑うのもおかしい。

戦争後の勝ち負けの争いで笑うことを忘れている聴衆である。でも十分も経つと誰となく笑い出して、とうとう腹を抱えて笑っている。でも、私は笑うまいと努力していた。これで勝ち負けの和解



サンパウロ市オデオン座での来伯第一声に笑いと感動が渦巻いた

が出来るのであるのか、と思うと簡単に笑えなかったが、あまりにもみんながころげて笑っているのに、自分だけ笑わずにいるのがおかしくなつて、どうなるのか分らぬ、笑えという氣になつて一緒に笑い出してしまった。笑っているのと心のこだわりが消えて、心が澄んで来る思いがして気持ちが良いのである。

聴衆を思う存分心の底から笑わせて、腹の底から空っぽにならせた先生は、やがて話の本題に入り、産婦人科の事から精神身体医学、人間神の子無病、罪なしの話からいよいよ『生命の実相』の人間神の子、実相円満完全の話へと移つていった。まことに雄弁そのものである。そうして、「皆さんは今度の戦争で日本が勝ったか、その話を聞きたいと思つておられると思うが、私はそんな戦争に勝ったとか負けたとかいうことは、移り変わる現象のことであつて、現象がいかに移り変わろうともその奥に永遠に変わらぬ不滅の実相を説くのが『生長の家』であつて、私はその実相を説きに來たのであります」と語られるのである。

先ほどの爆笑とは違つた真剣そのものである。ある時は腹を抱えて笑い、またある時は涙をしばらく、時の過ぎるのも忘れて聞き入っていた。聴衆はいよいよ最後になつて、ものすごい反省をうながされるのであつた。我々は今まで、移り変わる現象のみを見つめて争つてい

たのだった。

「現象なし」「実相のみがある」と、あれほど教えて頂いているのに、それを忘れていた愚かな我らであつたと、勝った組も負けた組も共に反省の涙を流すのであつた。こうして先生のお言葉で勝ち組、負け組の争いは見事に解消されていった。それはまことにも神業とも思われる偉大なる導きであつた。

徳久先生の素晴らしい人格と、巧妙な話術に完全に魅せられた私は、「この先生がお帰りのとき、一緒について日本に行きたい」衝動にかられてジィツとしておられなくなつた。『生命の実相』には機會の神様は前頭にだけ髪があつて後頭部には生えていないから、機會の神を掴みなければ会つた時、直ちに前髪を掴むにある——と機會の生かし方が書いてある。私は日本に行くということをおきな希望の一つに抱いている。日本に行く絶好の機會がこの先生のお帰りにお供することだ。機會はこの時だ、と思つて私は直ちに実行に移した。先生が自動車でお宿の遠藤四郎氏宅にお帰りになつたその後を追つて遠藤氏宅に行き、先生のお部屋をノックすると向うから「誰ですか、お入りなさい」とおっしゃる。「松田です」「何か用かね」「先生私は日本に行きたいのです」とまで言つて、連れて行つて下さいとまではよう言わなかつた。すると先生が、「そう。日本に行きたければ神想觀をしなさい」「ハイ、分りました。神想觀をします」

初めてお逢いし、初めて第一回の講話を聞いたばかり

の私と先生である。よう思い切つて言えたものと後になつて自分でも感心していた。でも神想観よりお金の方がよいのだがとも思つた。というのは、広い肥えた土地は持つていたが、日本に行くだけの金は持つていなかったからである。それから神想観というより、どうして金を作ろうかという金想観が毎日続けられた。

徳久先生ご巡講三カ月の内、最後の一カ月はパラナ地方になつていた。パラナに在住していた関係でその一カ月は私は随行させて頂いた。随行中も日本行きのことばかりが脳裏を去来するのであつたが、先生はなに一つそのような話はされなかつた。

青年の練成

徳久先生の御講演は、生長の家の信徒間は言うまでもなく、邦人社会へもものすごい旋風を巻き起こして三カ月の長い御巡講は終わった。いよいよ退伯も間近に迫まつた九月の末、先生のご指導を受けて幹部会が行われたが、その席上で先生はブラジルにおける日系移民の努力を讃えられた後で、「この日本移民の尊い信用を第二世に伝えて、いつまでも日本移民の誇りを伝えておかねはならぬ。そのためには若い青年にこのみ教えを伝えておく必要がある。そのために私は青年練成道場をブラジルに作りたいと総裁先生にお願いしたが、君は日本に必要な人間だから、道場は現地の人に作ってもらうようにと

のお言葉を頂いたから、皆さんで青年道場を作して下さい。私を呼ぶのに集めた皆さんのお金が二百コント残っておるといことだから、この金を道場を作るため使うよう総裁先生のお許しを頂いているから、この金を元にして皆さんの協力で道場を作り、次代の青年を養成して下さい。これをしなければ一世の苦勞と努力と成功は水泡に終わってしまう。そのような事があってはならないから、道場が出来たら、松田君が田舎で個人で青年道場を作って指導していたので、よろしかったら松田君に担当してやってもらったらよい」というお言葉があったので、満場一致で道場を作ることが決定し、その担当を私がすることになり、その場で私は青年部長に推薦された。

その時分、私はパラナの自分の土地に青年練成道場を作り、自分の大きな希望の一つであった青年道場が出来たことを喜んでいたのだ。パラナでは地理上よくない、生長の家の大運動の中心拠点やはりサンパウロでなければならぬと考えて、富樫氏がオザスコに十アルケールほど土地をもっていらいっしやるのを二アルケールくらい分けて貰って、そこに移す考えで、その話を進めていたのだが、話が生長の家で青年道場を作るとなれば自分の計画は必要なしと、その方は断わってしまった。

この練成道場建設の話が決まると、私は考えた。私が青年練成道場の責任者となるならば、まず自分自身が指導を受けておく必要がある。指導者となる者は指導された人間でなくてはならない。

「私は日本に行く」と決心し、その決心は不動のものとなったが、日本に行く旅費の金はいつ、どこからも現れそうもなかった。

決意したら金が出る

九月二十九日から五日間、カーザ・ベルデの瀬尾武左エ門氏の広い会場を借りて、先生最後のご指導による幹部練成会が行われた。最初の日私はなにかと一所懸命お手伝いをしていると、「徳久先生が呼びです」とのことです、急いで行つて「先生何かご用でしょうか」とお伺いすると、「君、今度の練成会に私の助手をなさい」とおっしゃるのでびっくりして「先生、私はなにも分りません」「分らないから分るように勉強するのです」私は隣りの部屋で柱に寄りかかつて泣いた。それまで日本行きのこともなに一つおっしゃらなかったのに、にわかに「私の助手をせよ」と。やはり先生は私のことを考えて下さっていたのだと思うとうれしくて仕方がなかった。

先生のご退伯前に道場を建てる土地を探そうというところである日、サンパウロ市からあまり遠くない中央線に良い土地があるというので、先生と高木幹事長と世話役の勝又講師と私と四人で視察に出かけた。国道のすぐそばに五域と八域の二つの良い土地があつた。その八域の方がよいということで、その土地を買うことに決定して帰る車の後ろの座席から、いきなり先生が「松田君、日

本に行くのかどうするのか」と初めて日本行きの話が先生の口から飛び出した。私はうれしくもあり、またあえて、「日本には行きたいのですけれども」と答えてしまった。

すると先生の声が叱りつけるように、「そのけれどもをやめよ、決意せよ。決意したら金は出てくる」と力強いお言葉であつた。私は「ハイ、決意します」。それで話は終わりである。

先生がご着伯第一日の夜、「日本に行きたければ神想観をせよ」のお言葉に、神想観はしていたつもりであつたが、金は容易に現れてはこなかった。そうして先生は明日にも北米に向つて御発ちになるのである。私は先生のお言葉で再度固い決意をした。「俺は日本に行く」と。

サンパウロに着くや否や、兄の所を訪れて兄の許しを受けた。「金はなんとかなるだろう、行つて来い」。兄の許しを受けて早速旅行社に行つて日本行きの手続きをしてみた。決意したら金は出て来る。でも一円も金はないのである。まさに背水の陣とはこのことであらうか。

「死んでも帰らない！」

徳久先生は十月の初めブラジルをお発ちになり、北米、カナダからハワイとご巡講になり、次の年の二月の末、日本にお帰りになるご日程になっていた。先生のお帰りに一緒に同行したいとの私の願いは果たされず、十月十

日に先生は北米にお発ちになり、私はパラナの土地に帰って銀行からなんとか出来ないものかと努力してみたが、金に縁遠い私には現れてきそうもなかった。そこで、サンパウロに少し持っている土地を売り飛ばせば日本行きの金はある——とあって、十一月三日に植民地の人々から送別の宴を開いて頂き、意を決して出聖した。サンパウロに、「農業のブラジル」を書いている義兄がいるので、その人に頼んで土地を売ることにしたが、もう年の暮れも間近でもあった故か、全然売れそうもない。

十一月も過ぎて十二月に入って、まだ北米におられる筈の徳久先生がハワイから総支部宛前後二回、「この十二月二十七日に日本へ帰るから、それまでにハワイに来るように松田君に伝えるよう」と手紙が来た。総支部に人を介してお金を借りに行ったが、「公金は私用には借せない」と断わられた。私の神想観は金想観になってしまっていた。

途方にくれている時、田舎の家内から手紙が届いて、「もう日本に行かれたのかと思っていたのに、まだサンパウロにいるのですか。金が出来ねばもう一度田舎に帰って、田舎でなんとか作るようにしてはどうですか」と書いてあった。私は直ちに返事を書いた。「男が一度意を決して日本に行くと家を出たからには、例え十年経っても百年経っても、たとえ死んでも帰らない」。まことに悲愴な心意気である。でも私は本当にそう決心していたのであった。その手紙を読んだ家内は義姉や、親類の坂口夫

人等のお力にお願いして、ようやく旅費だけのお金を作ってサンパウロまで持って来てくれたのには頭の下がる思いだった。早速旅行社に行って旅費を支払い、出発したのが、十二月二十二日であった。

二十七日には徳久先生はハワイから日本にお帰りになるので、きわどいところでようやく間に合うことが出来て、うれしく機上の人となった。

事業も家庭も道場も妻も子も、すべてのものを捨て切つての日本行きであつた。道場やカマラーダ（使用人）の事は城代氏に依頼してあるものの、発育盛りの子供のことを思うと胸しぼらるる思いもなくはなかったが、み教えに一生を捧げた自分の行動、これでよいのだと思ひ直すのである。

祈っていたぞ

昭和九年九月、日本と別れて以来二十一年目に懐しい祖国日本へ行ける。母待つふるさとの日本へ、そして私を神にして頂いた尊師に逢える。生長の家の修行が出来る等と考えると、喜びが全身にかけめぐるのであつた。でもその反面ブラジルの事が気にもかかるのである。コーヒー園のこと、カマラーダのこと、道場のこと、小さい子供達や家内のことが瞼（まぶた）に浮かび、涙のにじむ思いもするが、だが、人間神の子の偉大な真理にふれ、我が一生をこのみ教えに捧げると決意した私の心

は全然動揺することはなかった。

大きな希望の一つであった青年練成道場は実現している。今第二の希望である”日本に行く”という事が実現しつつあるのだ。釈迦は王城や妻子を棄てて道を求めた。キリストは人類を救わんがために十字架に生きながら釘付けにされたのだ。俺はこの二大聖者には遠く及ばないが、必ず真理への道を生き抜いてみる――と繰返し自分に言いきかせた。

ニューヨークからサン・フランシスコを経てハワイのホノルルに着いたのが二十五日午後八時だった。小林旅館に宿をとって、ふとしたことから手紙を貰ったことのある、下見という誌友の方に電話をすると、徳久先生は他の島に講演に行かれていて明日お帰りになるということであった。

翌日、下見さんのご案内で予定の時間に空港にお出迎えに行っていると、やがて飛行機が着いて扉があくと、出ておいでになった徳久先生がすぐ私を見つけて、「おお松田君、来たか、僕は君が間に合うよう祈っていたぞ」とおっしゃるのである。そして我が事のように喜んで下さるのであった。先生の暖かい愛情が痛いほど感じられて泣きたい思いだった。そして、その夜はホノルルで最後の講演が行われることになっていたので、その前講をするようにとのお言葉があった。私は喜び一杯であった。

講演会の時が来て私が演壇に立つと、先生が御自ら私を紹介して下さるのだが、それがまた変わった紹介で

あつた。

「この青年はブラジルの松田君といって、今回日本の本部で一カ年の修行を決意して僕と一緒に行くのですが、ブラジルの勝ち組の大将で、今でも日本が負けたと言わぬ男ですが、お金が嫌いな男で、土地はたくさん持っているのですが、お金を持たない男です」という変わった紹介をして頂いた。多少恥ずかしかったが事実だから仕方がない。そこでハワイの信徒たちがどこか徳久先生に似たところもあると言つてたくさんお餞別を集めて下さった。旅費だけで出発して、日本での費用は働くつもりでいたが、たくさんのお小遣いを頂いて無限供給とはこの事かと合掌させられた。「決意しろ！ 決意したら金は出てくる」とのお言葉が思い出されて、ただただ有難い思いで一杯だった。

ああ、谷口雅春先生

翌二十七日はホノルルの会館で早朝神想観を実修し、誌友のご愛念でハワイ島を一巡し、午前十時ホノルル空港を出発した。尊師谷口雅春先生のご高弟である徳久先生のお供をして日本に行くのである。なんという恵まれた人間であろうかと自分を称えずにはおられなかった。二十九日羽田空港に着いた。生長の家で初めて世界を一周して伝道の旅に出られた徳久先生がお帰りになるといふので、空港には誌友信徒の方や本部の先生方がたく

さんお出迎えに来ておられた。徳久先生が海外部長の田口精亮先生をご紹介して下さった。田口先生とはズーツと文通をしていたので初対面とは思われぬ懐しさを感じた。その田口先生が「君が松田君か、よう来てくれた。

君が総裁先生に差しあげた修行願いをご覧になった総裁先生が大変お喜びになって、君の一カ年の修行費用は本部で負担するようにとのお言葉が理事会にあったので、そうすることに理事会で決まったから、総裁先生にお逢いしたらお礼を申し上げなさい」という想像もしなかった御愛念を頂いたのであった。総裁先生の御愛念をしみじみ感じながら、『生命の実相』の中にある、決意！ 決意の前には一切の障礙はない——のお言葉を思い出して涙がにじむのであった。

一カ年修行に旅費だけで出発し、滞日の雑費や修行費は十日間の練成を受けた残りの二十日で働いて払う覚悟で来たのであったが、ハワイの信徒のご愛念と今また谷口雅春先生の尊いご愛念を頂いて、一カ年の費用はなにも心配することなく、専心修行が出来るのである。なんという恵まれた私なのであろう。徳久先生が「決意すれば金は出てくる」とおっしゃったお言葉そのままが実現したのである。

徳久先生はその足で谷口雅春先生に帰朝報告のご挨拶に行かれることになっていたので、私も一緒にお供させて頂いた。

お屋敷に着き、やがて門を入れば小さな池があり、い

ろんな木が茂っている細い坂道を登って小高い丘の上にお住まいはあった。女中さんに案内され、お座敷に通された。やがて四先生がお出になった。なんという感激であらうか。私の一生を捧げた尊師と逢えたのである。

やがては年老いて滅びゆく肉体を我れだ、人間だと迷い、人生に希望を失い、劣等感の虜（とりこ）になっていた哀れな青年を、久遠不滅の世界に導いて下さった大恩ある偉大なる師に、今、描いた夢が実現して、そのお膝元に、間近にそのお姿に接することが出来たのである。大粒の涙が次から次に流れ落ちてコトバさえ出ないのであった。

徳久先生も先生のご前に泣き伏して世界ご巡講の感激を報告され、「今私の喜びは、ようこそ日本人に生れたということと、ようこそ先生のお弟子にして頂いたという喜びで一杯でございます」と泣いておられる。お山の先生方もともども泣いて喜んでおられた。

徳久先生の後からお山を辞して帰るとき、私は「朝（あした）に道を聞かば夕べに死すとも可也」というコトバを想いながら、いい知れぬ生き甲斐を感じていた。でも死んではいけない。コレからだ！

それはちょうど都合だ

『生命の実相』を読んで私の心に強く描かれた第三の希

望「必ず日本に行つて谷口雅春先生にお礼を申し上げ、お弟子にさせて頂く」という希望がこのようにして実現したのである。これからこの一カ年、懸命に修行させて頂くばかりである。

本部では、徳久先生の帰朝報告講演会が全国で行われるよう計画され、一月から十一月まで決定済みであつた。私は飛田給の練成道場の長期生として一室を頂き、ここで神性開発の大修行をすることになったのだが、徳久先生の全国講演会に随行したい思いが一杯だった。でも資格もない修行者の身で、そんなことをお願いすることも出来ず、だからといって諦めることも出来ないでいた。

やがて年が明けて、正月早々二日から乃木坂の仮本部講堂で谷口雅春先生ご指導の「指導者研修会」が行われた。徳久先生から「松田君体験談を申し込んでおきなさい」と言われたので、「徳久先生をブラジルにお迎えして」という題で申し込んでおいた。谷口雅春先生の午前のご法話が終わり体験談の時間になると、私が第一番に呼び出された。尊師のご前で体験談を語る、それを尊師が聞いて下さると思うと光榮に満たされるのである。私はおじけず、恐れず、ブラジルにみ教えが伝えられ、どのような運動が行われているか、最後の戦争の勝ち負けの争いから、徳久先生の旋風を巻き起こされた話をした。拍手を頂いた。

時間が経つて昼食となり、先生方は総裁室に行かれた。すると、私の所へ各地の幹部の方々が名刺をもつてお出

になって、「徳久先生が○月○日に我らの所へお出になるから、君も一緒に来てブラジルの話をしてくれ」とおっしゃるのである。私は「しめた」と思ったが自分で決める訳にはいけない。どうしたらよいかと思案に暮れていると、「そうだ、谷口雅春先生にお願いしてみよう」という気になり、矢も楯もたまらなくなつて総裁先生のお許しを頂くべく、お部屋に行くのを中林先生がご案内して下さった。先生はまだお坐りにもならないで二、三の幹部の先生と立ち話をしておられた。突然私が入って行つたのでお話をお止めになつて「なにか用ですか」とお聞きになるので、「先生、さっきの私の体験を聞いて下さつた各地の幹部の方々が、徳久先生について来てブラジルの話をしてくれとおっしゃるのです。徳久先生の随行を許して下さい」直立不動の姿勢である。すると先生は「そうかね、それはちようどよかった。今度の徳久さんの旅行は荷物がたくさんあると聞いていたからちようど好都合だ、ついて行きなさい」「ハイ、有難うございます」

後で静かに考えてみると、よくも思い切つた行動を、と我れながら感心するのである。こんな人間ではなかった。だがなんという見事な行動なのか、お許しが頂けた。良かった。徳久先生の随行で日本全国を歩くのだ。全身に喜びがうずく。こんな人間にして下さつたのも『生命の実相』であり、谷口雅春先生のお蔭である。私はなんと恵まれた人間であることよ。

母待つ故郷へ

飛田給の練成会は毎月一日から十日まで行われていた。その後で徳久先生の地方巡講が始まるのである。私は考えた。というのは、私には年老いた母が故郷におるのである。別れて二十二年目にブラジルから帰って来たのだから逢いたくて仕方がなかった。先生の随行が始まる前にどうにかして母に逢いたいので先生のお許しを頂いて故郷へ出発した。懐しい母や兄姉に逢えると思うと子供のように心ははしゃぐ。でも、その日の急行列車ののろいこと――

熊本駅で乗換えて三角へ行き、そこから汽船で御所浦へ、そこからまた小型発動船で故郷の村へ。東京から熊本の本の天草までは遠かったが、翌日の夕方によく生れ故郷に着いた。鎮守の森、生れた家、村、学校等、目に見えるものすべてが懐しく、小学校時代の童心にかえってしまふのである。

ちようど夕方だったので、舟の着いた岸边の道を学校帰りの子供達が三々五々帰って行くけれども私の友達は一人もいない。いる筈がないのである。二十二年もいなかったのだから――舟を降りて、はやる心を押し静めながら生家の前に立った。生れてから青年時代までを過ごした懐しい家である。それにしてもお母さんはどうしているかしら。家の入口にカバンを置いて家の中をのぞいてみた。庭の隅で火を焚いている老婆がいる。母なのだ。飛

んで行きたい心を押えて小さい声で「母さん、帰ったよ」と言ってみた。どんな顔をするかしら、どんなに驚くだろうと思ひながら――。すると、その老婆がこちらを見た。スーッと起ち上つてこちらへ歩き始めたが、腰は弓のよう曲つて頭髮は真白に、顔はしわだらけである。「ああ俺がブラジルへ行く時は走り出した汽車を追いかけて泣きながら見送つてくれた母、その母が二十二年間のうちにこんな姿になつてしまつたのか、なんの親孝行も出来ないで」と思うと眼の底から大粒の涙が止めどもなくこみ上げてくるのである。

泣きながら門口に立つている私のところまで来た母は、ヒョツと顔をあげて私を見るや、曲つていた腰がスーッと伸びて、「お前は巳代志ではないか、生きて帰つて来たのか」と言うや否や私に飛びついて来て、大きな声で「よかった、よかった、生きて逢えてよかった」と言つて、しがみついて泣くのである。私もコトバもなく泣いた。母子はしばらくの間抱き合つて泣いた。泣くよりほか仕方がなかつたのである。

俺が勝つたぞ

あの世界大戦でブラジルは日本の敵国になつたそうだから、外国にいる日本人は皆んな殺されたという噂があつたし、戦争が済んでも手紙も来ないから、ブラジル

の子供たちは皆んな殺されたのであろうと思って、毎晩仏前で冥福は祈ってはいてもやはり諦め切れず、今日は来るか、明日は帰るか土手の先に出て、毎日毎日入つて来る舟を見つめていたという母親の心の尊さ、母なればこそと新しい涙は次々とあふれるのである。しばらくすると、兄達も畑から帰つて来てともに泣き合つて喜んだ。二十二年間とは長かつたのである。

やがてお座敷にあがつて仏前に坐ると、大きな父の写真が仏壇の横においてある。父はもうこの世の人ではなくなつていた。

ズーツと前に、「もう今度は駄目だろう」という兄からの手紙が来た時、せつかくブラジルまで親孝行するつもりで来たのに、なんの親孝行も出来ずにいるが、父がたとえ死んでも生きてもよい、親孝行は生長の家の人間神の子の真理を伝えてあげるよりほかない、と家族で相談して日本の本部に本代を送金し、本部から『生命の実相』を送つて頂くよう手続きしたのであったが、その『生命の実相』が父の元へ届く前に、ある晩、夢の中に白髪自髯の老翁が現れて祈つて貰つた夢を見て、その夢でさしもの重病もそのまま治つてしまつて、それから十年間ほど若者にも似た健康を取り戻したという体験を得ていた父であつたが、寿命はどうすることも出来ず、既に霊界の人となつていたのである。好きな父であつた。でも、その父はもうこの世にいないとジィツと写真を見つめてみると、先刻母と流した涙とは違ふ涙がまたあふれ落ちる

のである。ひと言でよい、「よう帰って来てくれた」と言つて欲しいのに、と思うとやるせない淋しさである。どこか心の隅では父は死んでいない、という声もしているが、現実の父の姿に逢いたかった。だから人間はやはり出来得るかぎりお互い健康のうちに、親を喜ばせておくべきだとしみじみ教えられるのであった。

翌朝義姉と共にご先祖の墓参りに行つた。父はこの石碑の下に眠つていいると思うけど、どうにもならないのである。

その墓の近くに、ブラジルに行く前に一番仲良くしていた友達の立派な墓碑が建てられていた。

「近衛歩兵伍長松田富士義之墓」と彫られている。私がブラジルに発つ時、二人で泣きながら「十年経ったら帰つて来い」「帰つて来る。その時誰が出世するか競争しよう」と誓い合つて別れた友だった。日支の戦いは発展して行くので、彼が近衛兵に入隊した報（しら）せを受け、た時、なにか負けたような気がしてイライラしたものであったが、『生命の実相』にふれてそのイライラはなくなった。

戦争が終わり日本が勝つて日本に帰る日が来て、彼が胸間に勲章をブラ下げていても、『生命の実相』はそれ以上のものだと思つたからである。国家が国を挙げて他国と戦う時、戦いのためには国民は全力を上げねばならぬのは当然であるが、さて戦いによつて果たして世界の平和とか、人類の幸福が招来されるであらうか。世界の平

和も人類の真の幸福も、人間が肉体だという迷いから目覚めて、神の生命であるという人間観に立ち返った時初めて自ら現れてくるであろう。そうすると、戦いによって手柄を立てる以上に『生命の実相』の運動は尊い。まして今日、世界大戦は日本の敗戦で終わった。悲しい限りである。しかし、ブラジルにおける『生命の実相』は多くの日伯人の間に喜びと調和と生き甲斐を蒔きつつ広がっている。私は友の墓前に合掌しながら、「オイ俺が勝ったぞ。でもお前は日本のために勇ましく戦った。それはそれでよい。お前らが生命を捧げて出来なかったことを俺らがやるから安心してくれ」

生ける人に言うごとく、友の石碑に向って言い聞かせるごとく叫ぶと、涙がまた流れ出るのであった。

二十二年ぶりの母子の対面に喜びを満喫し、ご先祖や父の墓参を済ませて東京に帰り、それから飛田給練成道場の修行が始まるのである。

先ず最初に、十日間の練成会をシツカリ受講するのである。徳久先生のご愛念で長期生の部屋を頂き、練成中は必ず一時間の時間を頂いてブラジルの話をする機会を与えて頂いたが、練成が終わると、徳久先生の随行をして地方に出張、地方でも必ず一時間、前講の時間を頂いてブラジルの話をさせて頂くことになった。

付記・青年道場ことはじめ

私は青年指導ということの責任の重大なるを思い、指導する者は結局指導を受けた者でなければならぬと考え、入信以来の宿願でもあり、徳久博士のお勧めを頂き、機会を掴（つか）めの生長の家のみ教えを生かすはこの時と意を決して一カ年の本部修行を決行した訳であります。

私の出発後総支部幹部は私の帰るまでに道場を作るべく敷地の物色、その他種々御心配頂いたとの事でありましたが、なかなか都合の好いところがなく、そのままになつていたのであります。

一カ年恵まれた修行を終えて帰りますと、せっかく総支部では「総支部会館建設」の話が具体化しつつありましたので、青年道場の建設と重複して複雑化する恐れもあり、徳久博士の御心である青年道場はともかく急いで建設せねばならぬので、幹部の皆様と相談の結果、建設一切の責任を私におまかせ頂く事になつたのであります。折よく私が渡伯以来いろいろなお世話になつてゐるバウル市在住当時の富樫通雄氏が土地を世話して下さい、というので、結局イビウーナの土地をお世話頂き、道場を建てることになつたのであります。

この地はサンパウロ市より六十七キロ、サンパウロ、パラナ両州の首都を繋ぐ国道に位置するイビウーナ市の効外にあり（当時、国道一一六号線の開通前）、ソロカバ

ナ線でブドウの名産地として名高いサンロッケ市に通ずる道路に沿うて三キロの地点で、標高一千二百メートル、眺望まことに美しい所であります。

まず二十アルケールを購入、その内五アルケールを道場の敷地として道場を建て、総支部に渡す事にし、その土地代の支払いと道場建築費用を捻出するため、十五アルケールを分割し、これを一シャカラ（小農園）四十コントスに売却し、初回の払込みを十コントス、残り三十コントスを十年払いにして払い込んで頂く事にしたのであります。

初年度払い込みの総額で道場を建設し、その後の収入は道場の維持費、拡張費等々に使わせて頂きたいという計画を立てたのであります。

それから道場敷地の五アルケールには、その二、三アルケールに果樹を植える計画でありました。果樹は四、五年頃から収入がありますから道場の経営も、お集まりになる青年にあまり負担をかけず、楽に練成に参加して頂く事が出来るという考えでありました。

大体私の過去の経験から申しますと、青年をもつ家庭では、道場に出して青年を練成して頂く事はまことに有難いが、半年なり一カ年なり、家業の手伝いが出来ないのです。え不都合なのに、その上たくさんのお金がかかるようでは、善い事だけでもという事になって、せっかく道場は建てても集まりが少なければ初期の目的が達せられないような事になってはいけません、とにかくお集ま

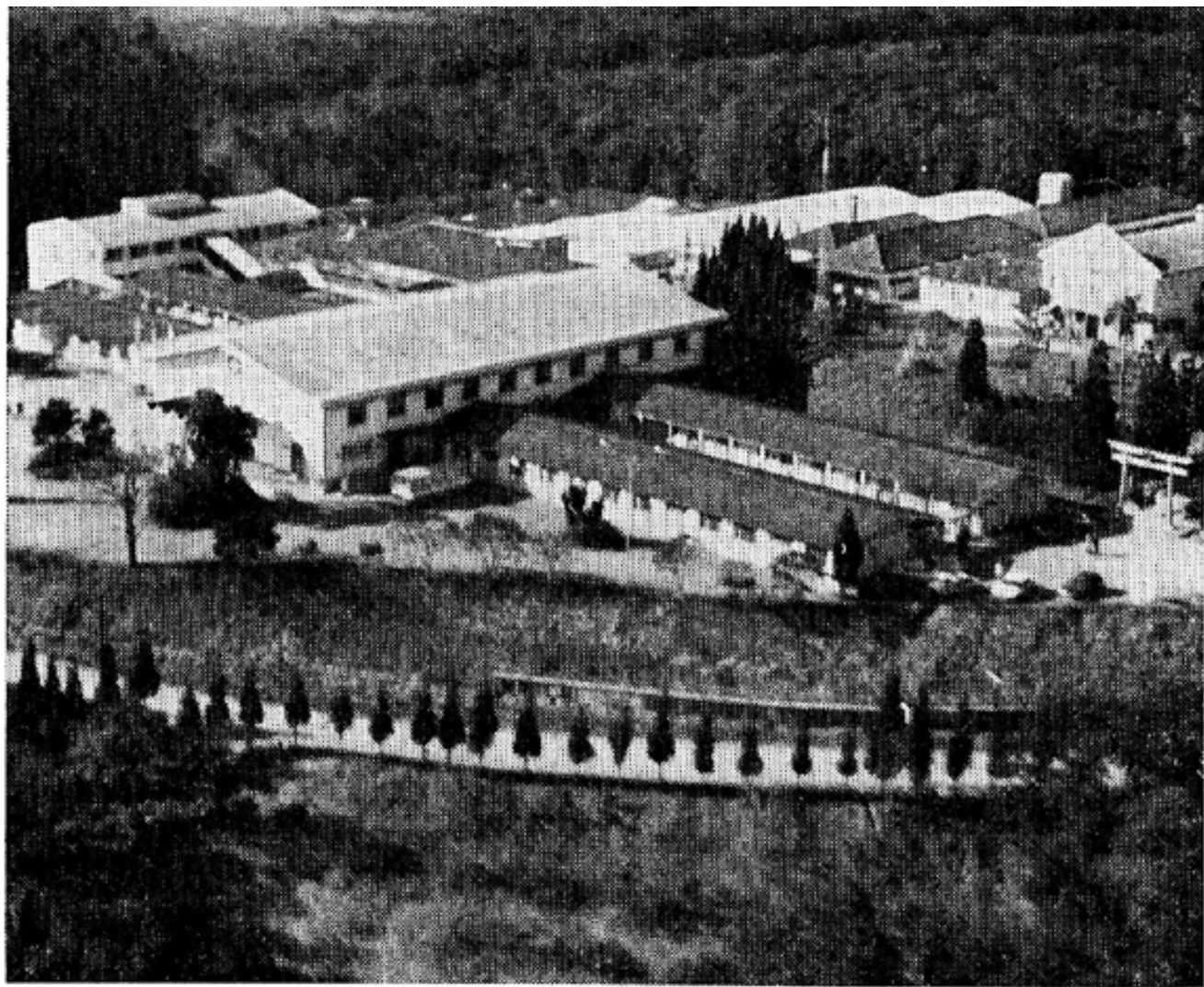
り下さる青年達にあまり負担をかけず、道場の維持費は、お集まり下さる青年が一日僅（わず）か二時間ほどの労働の奉仕によつて果樹園が手入れされ、道場自身で経費を生み出す方法がよい。また一方、青年にとつても、一日二時間の労働をする事は必ず必要でもあります。百姓に限った事ではないが、学んだ教えを直（ただ）ちに生かして見る。生かして自から生活の中に真理を会得する、それを道場生活中で体験して、道場を出ていかなる方面の生業に就こうとも、直ちに社会のお役に立つように訓育する事が最善の方法と考えていたのであります。

一方シヤカラ売却の方は、聖市（サンパウロ市）中央、ノロエステ、パウリスタ、ソロカバナ、パラナとそれぞれ各地方でみ教えのため献身的に御活動下さつておられる方々に私より御願い申し上げて御依頼したのであります。

聖市及び近効、中央線方面を勝又孝三氏、浅野目吉蔵氏、ノロエステ方面千田源吾氏、亀井静江さん、パウリスタ方面を高保義元氏、ソロカバナ方面、佐々木繁雄氏、具志堅古致氏、パラナ地方を滝浪茂氏に御願いしました。

道場建築及び土地測量、登記その他現地の方は勝又孝三氏、工大生、長橋齊両氏にお願いして進めて頂きました。各地の責任者の方々も、現地の責任者の方々も素晴らしい御協力下さり、現地でも色々な困難とみえるような事が生じてきましたけれども、勝又、長橋両氏の真剣

な御努力によって次々と解決し、また地方でも亀井夫人のごときは女の身で二十のシヤカラを売り尽して下さる等、皆々様の涙ぐましいほどの御協力を頂き、シヤカラは全部売り尽されたのであります。



南米練成道場全景(1987年)中央の建物が端座して1,000人収容出来る大講堂

分譲地御購入の方々も、青年道場を深く御理解下さり、土地を視察することもなく御購入頂いたものでありました。現場の方々も、建築請負師との契約を交わし、次々と煉瓦は積み上げられて、青年道場は着々進行して行きました。

建築工事の責任者の方々、分譲地購入の方々の絶大な御支援、御協力によつて、今にして思えば不可能な状況の中で進行していったのであります。

幸い建築請負師も非常に明るい、万教帰一的な信仰家で、生長の家の“真”をよく理解してくれる方でありまして、“神は常に我らを護り給いてより善き人を選び、道場の建築に当たらせて下さる”と感謝したのであります。

「私の二つの希望の一つであるこの青年道場のもつ使命は、移民が青雲の志を抱いて祖国の岸を解纜し、この地に足を止めて以来、あらゆる流汗奮闘を続けてきたのであります。今までの努力がようやく報いられて経済的にも余裕をみるようになり、その上み教えによつて明るい人生観、人間観を克ち得て、明るい家庭の創造に成功し、とにかく物心両面よりまことに恵まれた生活を送ることが出来るようになったのであります。この恩恵を永遠にこの歡喜をいつまでも保持し、生きることの勝利を謳歌していくためにはなんとしても私共の後継者である二世、青年諸君に明るい希望と信念をもたせ、人間神の子の誇りをもつてブラジル人社会に伍し、日系人とし

ての社会活動をして頂く事にあるとの信念から、そのために青年を練成し育てることが、青年道場のもつ使命の一つであります。次には、一歩進んでこのみ教えによって自己内在の神性を自覚し、生きる歓喜に満たされた青年諸君が、み教えのもつ世界的大使命、いわゆる人類光明化、地上天国建設運動の選ばれたる靈の選士としての自覚に目醒め、自己に具有するところの日系ブラジル人として自国語であるポルトガル語を縦横に駆使し、ブラジル人社会に光明思想の炬火を点じ、日伯両国民の、延いては南米全土の光明化に生き甲斐ある偉大なる活動を展開して頂きたいと言うのが青年道場のもつ究極ともいふべき使命であります」

この部分は一九五四年十二月二十五日発行の「円環」十九号に寄せた一文の抜粋であります。年も若く気負いもあり、燃えておりました。今、毎月、毎週練成に集まっていたいております誌友、信徒の八〇パーセントがブラジル人と様変わりしましたが、毎回千人から時には千数百人ということもありますが、私は「如來說法菩薩雲集」の尊師谷口雅春先生の御揮毫の下で大講堂一杯の善男善女を前にしてみ教えを伝えております。

尊師への手紙

【谷口雅春先生御文章】

ブラジルの松田巳代志氏は本部で一年数ヶ月の訓練を受けて後、ブラジルへ帰国され、私が本年一月、生長の家本部にて講習した際の講義の録音テープをブラジル各地に持参され「録音再生講習会」を継続しておられました。最近「録音講習会」が一巡終わりましたので、その報告書を送って来られました。録音の講習会でも無数の奇蹟的事実が現れているのでありまして、次にその報告の一部を転載させて頂きます。

【手紙】

思えば昨年一カ年恵み多き修行をさせて頂き、光明化運動に微力を捧げる悦びと覚悟で、雀躍せんばかりの思いで帰伯したのでございました。帰伯後直ちに一日より四日まで帰伯報告講演会を全伯的に行いましたが、五月よりは本部からの指令で教祖先生の録音講習会を担当させて頂く光栄を頂き、恵まれた身の幸福に涙しつつ全伯的に先生のお供をさせて頂きました。本当に私にとりましては先生のお供なのでございまして、開講に当たっては私は常に「先生のお供をして参りました」と申し上げたのでありますが、実に素晴らしい講習会で、受講して頂

きました方々は今先生を限りなく鑽仰（さんぎよう）し、み教えにふれ得た悦びに満たされていらっしゃるのでございます。

開催箇所二十四ヶ所、受講人数約千二百名。初めての催しでもあり、宣伝不足あるいは豪雨のためもあったりしましたので、受講人員はまだ微々たるもので誠に申し訳ない状態ではありますが、しかし受講して頂いた方々の悦びと光りとが大きな宣伝となつて、今後み教えを讃える方々が益々増加するものと信じております。

録音器の調子も非常によろしいございましたが、それにもまして、光明の真理・深遠なるみ教えを判りやすく明るく、しかも力強く笑いの中にお説き下さる先生の尊い雰囲気、今眼の前に先生に接する悦びを味わわせて頂いたのであります。

ある受講生の方など、先生の肉声そのままのごとき御声に只々うれしく首うなだれておられたそうですが、フト頭を上げて見ると先生がいらつしやらないので、「オヤ、先生は」と思ったほどでしたと語っておられました。先生のみ教えに導かれた同信の方々は肉声ならぬ器械から流れ出る先生のお声に接するだけでうれしいのであります。有難いのであります。

パラナ地方は講習会用のテープが間に合わず、放送用のテープで講習して参りましたが、神想観は私が指導させて頂いたのでありますが、不思議に思われますのはズーツと如意宝珠観（によいほうじゆかん）をして参つ

た事であります。講習用のテープが参りまして神想観の御指導を頂いてみますと、それが如意宝珠観であったのでうれしくもびっくり致したのであります。パラナ地方でも神想観中に録音器上に紫雲がたなびいたのが見えたという方々が幾人もあったのでございますが、その後各地でそのようにおっしゃる方々がありました。確かに先生の御愛念であると思われるのであります。

ジョセ・ドス・カンポスで講習致しました時は、二日目にある婦人が立って体験を語って下さったのであります。その奥様は十数年鼻茸（はなたけ）で苦しんでおられたのでありますが、先生の録音御講話を聞いている中に、「アア自分は主人や子供の悪いところばかり見ていて申し訳なかった。先生のおっしゃるように善いところを見れば、本当に良い主人であり、良い子供達であるのに、不平や小言ばかり思って申し訳なかった」と思うと、涙が出て来て仕方がなく、目汁、鼻汁を流しながら心の中で、一所懸命主人や子供にお詫びをせられたというのであります。その日はハンドバッグに六枚のハンカチを用意していたのが、六枚で間に合わぬほど目汁、鼻汁を流して家に帰られたのでした。その翌日も六枚のハンカチを用意して会場に来て、ハンドバッグを開いてみると六枚入れた筈のハンカチがただ二枚しかないというのであります。どうした事かと思って気が付いてみると、もう鼻汁が治ってしまったと言って「神様がお前の鼻の病気は治っているからというので、六枚入れた筈のハンカチ

を二枚にして下さったのでしよう」と言つて、泣きながら御話し下さったのであります。

又グアララペスという所では、半身不随のお方が治り、片方の眼がほとんど見えなかつたのが完全に治つてしまつたとおっしゃつておられました。

このグアララペスには松尾一見とおっしゃつて、ブラジル唯一の鴛鴦（おしどり）講師がおられます。（奥様は講師ではありませんが、主人と共にいつも歩いてお話しでいられるのです）。この松尾講師の奥様が実に素晴らしい方であつて、徳久博士御来伯以来、心境とみに開け、あらゆる病人を指導し、素晴らしい体験をしていらつしやるのであります。その特異な例を申し上げますと、三十五歳になるまで癩（らい）病で苦しみ、家から一步も出たことがないというお嬢さん（既に兄二人が癩病で死んでいる）があつたのであります。その方のお母さんに、御主人と調和なさるよう指導してあげられたところ、お母さんは、あんな汚ないよその女から女に歩いている夫と調和は出来ないとおっしゃられるのでありましたが、神は夫婦調和の中に現れることを説き、貴方のそのけがらわしい、汚ない主人を寄せつけない心が、可愛い子供を誰も寄せつけないような病気にしているのですよ、病気は本来ないのだから、貴女が御主人に感謝する心になればどんな病気でも治るんです、と長時間にわたつて御指導になり、その母なる人に悔恨の情が現れ、主人に感謝なさるようにしたら、娘さんの難病が完全に癒され、三

十五歳で結婚されるようになったというのです。結婚の日は、親も子も一生結婚など夢にも思っていなかったのにと泣きくずれてお喜びになり、披露の宴では、喜びの唄の代りに松尾講師夫婦に生長の家の話をしてくれというので、披露宴が講演会場に代ったという素晴らしいお話があるのであります。先生なんという輝かしい光明であります。この話を聞いて私は、救われたお嬢さんお母さんの御悦びを思いますとき、もつともつとみ教えのために生き貫く覚悟を新たにさせられたのであります。

こうしたお方のいらっしやる所だからでもあるのでしようが、講習会最初の日には耳が遠くて一番前に来て聞いていた御老人が、二日目には一番後ろから三つ目の席で、よく聞える聞えると聞いておられ治ってしまった方もあります。又、講習を受けて、先生のお笑いになる声がとても気に入ったらしく、そればかり思つて帰って行かれたところ、その日から喰ふように吸つていた煙草が全然嫌いになったという方もありました。

リンスという町で講習しました時はものすごいヒステリーであつた老婦人が立つて、受講中の体験を聞かせて下さつたのであります。私の帰伯講演で笑いの功德を知り、それまで少しも笑つた事がなく、人の笑う事がおかしくて、子供などが笑うと、黙つて笑えと叱りつけていたのが、心から笑う事が出来るようになり、ヒステリーは治つたが、臭い耳だれは治らずにいたのであります。

それが最初の講習を受けて家へ戻ってみると、さしも苦しんだ耳だれが治ってしまったと言つて、この婦人も泣いてお話下さいました。先生、先生のみ教えは光り遍（あまね）く、その行く所かくのごとく光明化して進軍しております。徳久博士が先生の御前で帰朝の報告をされたあの感激の場面は、おそらく私の脳裡から永遠に忘れる事はないと思うのであります。あの時博士は、二つの喜びとして、

「ようこそ日本人と生れた喜びと、もう一つは、ようこそ先生のお弟子にさせて頂いた喜びのこの二つです」とおっしゃいましたが、この博士の悦びは結局私の喜びであり、同信の方々の喜びであらねばならぬと存じます。

パウルー市の講習の日には、神想觀中天の一角より光明さし来り、光明とともに自鳩三羽飛び下りて、録音器上、豆をついばむ姿を見たという人あり、ツバン市に於いては、同市の自鳩会長の大熊夫人（この方は全身悉く病氣ならざるなしの状態で苦しんでおられたのが、『人生読本』で救われた方）が、同じ神想觀中録音器の上に、先生の尊きお姿が現れ、ニコヤカに笑み給う姿が見えたと言つて悦んでおられました。この方の御主人は、ものすごい喧（やかま）し屋で、長年苦しんで来たということでありますが、今では小言一言言わず、共に生長の家のみ教えに精進して下さるようになり、たまに奥様が起きるのが遅れて床の上で神想觀をしておられると、その御主人が神想觀中の奥様のところに朝の挨拶に来て下さる

というので、奥様はもったいなさにベッドから飛び下りて主人に合掌されるそうです。本当にこれこそ、今こそが谷口先生のお説き下さる「今此（こ）処（こ）極楽浄土」の生活でございますと話して、聴衆を感動させたのであります。録音講習受講後は、なんとかしてみ教えて人を救い報恩の一端を果たしたいと思つて、御自身の悦びを話して歩かれると、病人が次から次へ起ち上つて下さるといつて悦んでおられるのであります。

また先ほどの耳だれの治つた御夫人は初日の講習会の神想観中に、観世音の姿を拝されたそうですが、誰かよく似た、見た事のある方だと思つておられたところ、それは先生の奥様のお姿だったと話していられました。その翌日も光明燦然たるニコヤカな観世音の姿が現れたそうであります。

先生、まだこの他にもあります。しかしもう枚数がありません。こうした素晴らしいみ光りが、全伯に伸びていきます。否全南米に、全世界に。私は少なくとも全南米を光明浄土たらしめる大きな夢を描いております。海外の地にみ教えが遍く照り輝いていきつつある事を日本の方々も悦んで頂きとう存じます。（「生長の家」昭和二十九年十二月号「明窓浄机」所収）

【谷口清超先生御文章】

はやいもので、もう総裁先生御夫妻は、ペルーを終わって、ブラジルにお入りになる頃である。と思つていると、ブラジル教化総長松田巳代志さんから、次のような、事前御準備の模様を報じた手紙が来た。

【手紙】

合掌有難うございます。

祖国は青葉の薫（かお）る初夏の候と存じますが、総裁先生御留守後御山御一家様はいかが御暮しでございましょうか、御挨拶（あいさつ）も申し上げずまことに失礼のみ致しております。

総裁先生世界浄化のため御出発下さいましてより既に早二カ月を過ぎてしましまして、ブラジルにおきまして只今喜びに手の舞い足の踏むところを知らずの状態です。歓迎準備の方も神意のままに次々と驚くばかりのすがたで調（ととの）っていきつつあります。リオ州、サンパウロ州、パラナ州の三州では州賓（しゅうひん）としてお迎え頂く事に相成りました。サンパウロ州議員京野四郎氏、パラナ州議員上野アントニオ君、連邦下院議員田村幸重氏、宮本三郎氏等の御尽力目覚ましいものがあります。共に昨年の選挙に応援させて頂き、優秀の成績で当選せられた人達です。大統領御面接、総裁先生の御講演のポルトガル語通訳は、代議士田村幸重氏が引受けてくれました。まことに何から何まで都合好く展開してい

くのを見ましても総裁先生の御徳のいと高き事と思ひまして有難い極みであります。

総支部におきましても万全を期して御歓迎を 整えねばならぬというので本年二月より総裁先生御歓迎準備一日練成会を企画し、私が担当して歩きましてつい一週間ほど前に終わりました。どこもものすごい喜びで総裁先生御一行をお待ち申しております。きつと先生もお喜び下さるでありましょうし、信徒御一同の喜び、それらの事どもを神想観を済まして夜床について考えてみますとうれしくてうれしくて涙が出て参ります。

道場ではせつかく七カ月もの長い不馴れの外国御旅行の先生奥様にせめて高原の聖地で御くつろぎ頂けますようにと、純日本式の八畳の御住居を作らせて頂いております。最近日本からお出になった大工さんを一人頼んで他は各地の誌友の中のヒノキシ式に御手伝いを願っております。御庭も築山や噴水をこしらえていて下さいますが、とても立派に出来ております。先生も御存知のあの静かな祖国の自然を思わせる道場で畳の上で御原稿を御書き下さるならどんなに幸せかと皆、張り切っております。御風呂も作り込んでそれも先生が御風呂が御好きとお聞きしてお。ますから、日本式に立派な厚い板でこしらえました。道場の方も先生が御出の時とは丸で面目を一新しておりますして新宿舎も出来ましたし、講堂も少し大きくなりました。事務所や小講堂の上を二階にして正面まで出しましたのでとても立派です。先生の御食事

の方もお山で御女中をしておられた方がブラジルに縁付いて来ていらっしやいますので、その御方に道場に来て頂いて御手伝いして頂くよう御願いしてあります。

ブラジル各地でのお宿も努めてそのような中心を先生に置いて準備を進めておりますからどうか御安心下さいませ。でも特に先生が御気づきのものがございましたら御垂示御願い申します。

神誌五月号の「明窓浄机」欄に私の書いたものを御発表下さいましてうれしく思います、有難うございました。

あれは昨年の暮れから今年の正月にかけて高原の聖地で神想観をして今回の大聖業の大任をどうして果たしたらよいものかと祈り続けておりました時、まず神に祈れ—というような啓示を受けて作り、全伯に流して一人洩れなく祈って頂くうと思ひまして印刷したもので、私が作ったものであるのでおこがましく思ひまして御送りしなかつたものでありますが、御発表頂きましたのでブラジルや日本で気の付かない方々にも解って頂けて一所懸命御祈りして頂けると思ひまして大変うれしく思っております。私は来る三十日午前十時発の飛行機でペルー国までお迎えに参ります。ペルー国やブラジルの同信の方々の要望でもあります。もつと早く行くつもりでしたが（歓迎準備の御手伝いに）でも私の一日練成会が、随分長くかかりましたので終わって手続に参りました時は既に早い分は予約済みで席がなくなっていましたので仕方がなかつたのであります。

総裁先生の世界御巡錫は神業でございますのでなんら心配はありませんが、私共も神界の心に心を協（あわ）せて、総裁先生の大使命を全うして頂くために懸命の御奉公をさせて頂きます。どうか御安心下さいませ。

もう後数日かと思うと、只胸躍るばかりです。次々と御通信申したいと思っておりますが、とても忙しいのではないかと考えますので充分の事は出来かねると思います。総支部の方から係の人に種々御報告するよう頼んでおきます。

では先生今日はこれで失礼させて頂きます。日頃の御無沙汰をお詫び申し上げ、先生の御健康にて御活動下さいます事を御祈り申し上げます。（「生長の家」昭和三十三年八月「明窓浄机」所収）

【谷口雅春先生御文章】

コロンビアに徳久氏を出迎えてその後徳久氏の随行として南米を共に巡錫（じゅんしやく）中（ちゆう）の松田己代志氏から、その後の動静の報告が来ている。チリー国の講演会の成功はたった一人の鈴木貴子さんという御婦人の熱心な運動にまつところが多かったのである。松田氏の報告は次の通りである。

【手紙】

チリー国には全国に散在する全同胞は百二十人位の少

数であり、サンチャゴ市にも商社関係、大使館関係の方々を除いてはいくらもおらず、鈴木貴子講師のお集まりにもさして熱心な誌友はほとんどなく徳久博士のスペイン語御講演でも、大使から日本人、日智文化協会等こぞって反対であつたとの事であります。でも貴子様は失望することなく、勇敢に執拗に、強烈に大使を説き、日智文化協会長を動かして御自分がチリ大学で生花教授をしていらつしやるのを利して、チリ大学文化部にお願いして、日本哲学講演として新聞紙上に宣伝しておられたのであります。会場も皆んなそんな講演には人は集まらんから大学の小さい二十人位の講堂でよかろうというのを少なくとも三百人位入る堂々たる講堂が欲しいと言つてゆずらず、とうとう大学最高の間（栄光の間）で御講演して頂くよう許可を取り、さて通訳はといつて二世の娘さんを頼んでおられたところ二三日前になつて他に会議があるからとの理由で断わつて参りました。でも鈴木講師は失望せず、最後の手段として大使にお願いし大使館員に通訳して頂こうと私も一緒に大使館を訪ねたのであります。大使は大変困惑のようでしたが、「それでは館員にやらせてみるがよい、やるかやらぬか」とお許しがありました。がその館員は鈴木講師から何度も話があつても断わつていたのであります。でもそれよりほかに適当な人間がおらぬ。大使の御言葉だからあるいはやるかも知れぬという。まことに心細い事でありましたが、書記官がふと大使館で働いているリッチャーという

娘にやらせてみてはという事になり、大使もそれをお許しになったので、鈴木講師が逢ってみると、只朗読するだけならと、快く引き受けて頂いて、それでは一応「心で運命を支配しよう」という徳久先生講演のスペイン語訳を読んで頂いておくという事になり、スペイン語の原稿を渡して帰りました。（これは講演日の前日の午後の事であります。それにこの女性も鈴木さんのする事に到底多くの人は集まらぬ、鈴木さんあんたは大変な強情者だと言っていたという事です）。

講演日の日、時間は午後七時からでしたが、通訳婦人と打ち合せのため六時に大学の会場に行きました。六時二十分頃から立派な貴婦人や紳士がぼつぼつ集まり始めました。今日は盛会であるという予感がして参ります。その間控室で通訳婦人と打ち合せをしておりますと、予定の時間には一杯ぎっしりお集まり頂きました。うれしくてうれしくて涙のにじみ出るのをようやくこらえておりました。鈴木講師の御努力、博士のお祈りと、その奥に先生の尊い御愛念と大神の御旨（みむね）が光っております。徳久先生は五分間ほど日本語でお話になりました（開会の挨拶は日智文化協会会長マヌエルオゾリオガアリイ氏です）。その後ミス・リッチャーが腰かけたまま朗読を始めました。彼女は読みいくに従って目の色を輝かせ、手を振って朗読しております。場内はしわぶきひとつありません。一時間の朗読が終わると万場にとどろく万雷の拍手です。うれしくてうれしくて仕方ありま

せんでした。しかし先生、喜びはその後に続きました。ほとんど半数の人が場内を芸らず、博士を囲んで感激の面持ちでスペイン語や英語で話しかけております。取り囲まれたのは徳久先生だけでなく、日智（につち）文化協会会長夫妻、通訳のミス・リッチャー、鈴木講師しまいには私のところまで来まして、話しておりますが言葉が充分判らぬのが残念でした。後で開きますと、「こんな素晴らしい話は初めて聞いた」「もう一回やって欲しい」「今夜のお話を本にしたのはないか」「新開に連載発表して欲しい」「素晴らしい素晴らしい」等であつたという事であります。キリスト教の信者だと名乗ってくる人、握手して欲しいと言ってくる女、祝福して欲しいと言う老夫人、まことに感激の大るつぼであります。側で大使が驚いていました。

先生私共はこの素晴らしいみ教えを伯人間にどうして普及するか、日伯両語の出来る、しかも真理を悟った通訳が欲しいとそのような人のみ物色し、その人材のなさを嘆いていたのであります。

ところが日本語をひと言も知らず、真理を全然知らない一チリ女性が堂々と徳久先生の大講演の通訳に成功したのです。神はそのような簡単な方法を知つていらつしやつたのであります。祈りの足りない自分を本当に恥ずかしく思います。と同時に、博士五カ月間にブラジル人向の講演をいかにすべきかという事と、鈴木講師只御一人でしかも女性の身であらゆる反対を押し切つて堂々

と戦いとられたたくましい御姿とに多くを教えて頂きました事を感謝せずにはられません。今後ブラジルにもこのような催しが各地で催され必ずブラジル人社会に大光明を点ずる事を信じます。有難うございます。その夜は日智文化協会主催の送別の宴が催されましたが、大使も、日智文化協会会長夫妻も、ミス・リッチャーも、在留邦人の方々も大変御喜び下さり、生長の家のみ教えが素晴らしいという事が判った。今後大いに鈴木様に協力すると誓って頂きました。そしてその夜は大使の車で大使の公邸に泊めて頂き、翌十五日は大使の車で空港まで送って頂きますことにすべて御心のままに喜びの中に予定通りブラジルにお供する事が出来ました。これから五カ月寸暇もないスケジュールで御指導頂きます。(「生長の家」昭和四十一年九月「明窓浄机」所収)

【谷口雅春先生御文章】

私の靈魂は時々、ブラジルまでも治病活動に出かけることがあるらしいのである。それはすでに八年前ブラジルへ巡教に出かけて往ったとき、多くのブラジルの信徒たちから、私の靈姿に救われたというような体験談を聴かせられたのであり、その一端は、その時同行した家内の著書『世界を旅して』の中に旅行記として載せられているのであるが、最近ブラジル駐在の本部講師松田巳代志氏から次のような神秘的な体験報告が来たので、その

一部分を次に転載させて頂く。(註。手紙の日付は五月二十五日。ポ語とはポルトガル語でブラジル人一般の言語である。「アッセンデドール」というのはブラジル語の月刊神誌である)

【手紙】

この土・日(二十二、二十三日)と、イビウーナの練成道場で、ポ語幹部養成の練成会を初めて催させて頂きました。指導者は、私と、相部ドクトル、松尾みさき講師、村原講師の四人でありました。初日は九十人、二日目が百三十人ほどでありましたが、まことに素晴らしい雰囲気で終始致しました。あの道場は、先生が、「聖地だ」とおっしゃって下さいましたように、初めてあの道場に来た人が、「こんな素晴らしいところは初めてだ」といつて泣き出した人もありました。

道場の事務長をしております長友講師から聞いたのでありますが、日本移民援護協会というのがあり、かわいそうな人々の世話をしておりますが、その援護協会から頼まれて何人も道場でお世話しております。ごく最近、援護協会の役員が例によつてある人を依頼すべく道場に参りますと、道場の建物の上に(空中に)先生のお姿が大きく浮いて見えたという事を長友君に話して非常に感激してお帰りになったという事であります。その方は信者ではありませんが、生長の家に最近大変興味をもっておられる方だそうであります。

ところが、今回の練成会で二日目、村原講師が、神想観の練習の時、総裁先生の録音テープで指導していたのでありますが、伝道員をしておりますドナ・マルガリーダさんの霊眼に総裁先生が演壇正面にお立ちになり、その周囲には無数の人類が雲集しているのが映ったということです。そして先生は、それこそ人類を必ず救うという強い信念に満ちたようなお声で招神歌を歌っていらっしやり、無数の人間は、それに和して招神歌を唱えていたそのお姿を見たとき、彼女は感激に満たされてワツと泣き出しました。ちょうどその時、録音テープから、先生の「生きとし生けるものを……」のお声が朗々と響き出しました。すると時を同じうして十数年間、脚が曲がらずにいた六十五歳のクレメンチーナ・ダ・シルバ（サンパウロ市マリアーナ区にお住まい）さんが「脚が自由になった。曲がった、曲がった」と言って大きな声で泣き出してしまい、神想観どころではありません。後でくわしく聞きますと、村原講師がいろいろ説明して「肉体は人間ではないこと、人間の道具であること」を話したのを聞いて、「曲がらない筈はない」と思っ、ある伝道員の手伝いで坐ってみようと考えて、「人間は神だ、神だ、神だ」と叫びたい衝動にかられ、一所懸命心の中で唱えていると、先生の荘厳な招神歌が聞えてきた途端に、脚が自由に曲がって坐れたというのであります。同時にピニエイロス区に住んでいられるレオニセ・ドス・サントスという御婦人も長い間の卵巣の痛みが治ってしまっ

たと言つて今日報告して参りました。総裁先生の限りない御愛念はかくのごとく、ブラジルの天地に満ち満ちております。徳久先生が始めて頂きました総支部のブラジル人への個人指導も私一人ではどうにもならない現在では、毎日講師が交代してやっておりますが、毎日一杯来ております。

今日は松尾みさき講師の日ですが、百五十人ほど大講堂に集まつて来ております。そして体験談を発表しますが、泣いて話しているのが別室にいる私たちにスピーカーから聞えて来ています。

「アッセンデドール」(ブラジル神誌)がまたいろんな奇蹟を現しています。それは限りないほどあるらしいのであります。さきの幹部養成の練成会でも「ある神学校の牧師が「アッセンデドール」をテキストに使っている」という話がありました。去る四月十八日には初めての物語による青年一日光明講座を行いましたところ、四百十名も集まるといふ盛会で、その内大学生が百名もいたといふ事を知りまして、ブラジルの将来を頼もしく思つたことでございました。また州議会に初出馬を致しました下本八郎君は今回州議会の教育委員会の副委員長に就任致しました。ブラジル国が「人作り」を唱導しております時、吾々の選良が、そうした役に就くことを考えまして、その背後にはかり難き神智を感じます。(「自鳩」昭和四十六年八月「箴言」所収)

【谷口雅春先生御文章】

次に掲げるのは、ブラジルの松田巳代志氏からの七月二十日付の手紙であるが、この手紙にも、私の靈魂が随分忙しい人間で、ブラジル人の腹に按手したり、バスの中で姿を現して、ドナ・エレナさんに信仰を激励する言葉をかけたりしているのである。僕が時々ひどく疲れる感じがするのは、こんな事のためであるかもしれない。

【手紙】

神誌八月号（「自鳩」誌）を拝見させて頂きました。八月の「箴言」の中に私の手紙を御発表頂きましてまことに光栄の至りに存じ衷（ちゆう）心感謝申し上げます。ちようと神誌を受手致しました土曜日（十日）は総支部大講堂におきましてポルトガル語婦人一日光明講座が催されておりましたが、その日の体験談にまた素晴らしい事が発表されましたので、総裁先生にお喜び頂きたく御報告申し上げます。

一、サンパウロ市ペルプライラド街七〇番にお住まいのドナ・フロリツペ・マリヤダシルバさん（三十三歳）は結婚後五、六年になるのであります。医者は絶対妊娠不可能と診断しましたので大変失望落胆していたのであります。最近生長の家のみ教えを頂き喜んでおります。と、ついこの頃、総裁先生の夢を見たのであります。その夢は総裁先生がドナ・フロリツペさんの腹に手をおいて「あなたは神の子ですから必ず赤ちゃんを頂きます」

とおっしゃって頂いたというのであったそうであります
が、その後その御婦人は現在妊娠していると言つて泣い
て体験談をしていました。

また同じサンパウロ市ソアレス・デ・ファリヤー〇〇
番にお住まいのドナ・エレナ・プレオーズさん（四十歳）
は生長の家の集会に行つての帰り、バスの中で総裁先生
の幻をハッキリ（私と話しているようにハッキリ見たと
言います）見せて頂き「生長の家の種子（たね）はすで
に蒔かれてあるからこれから育てるのは、貴女方のお仕
事です」とおっしゃられたと言つて非常な感激でありま
した。

また、「アッセンデドール」の編輯（へんしゅう）をし
ている城憲昭君からの報告によりますと、サンパウロ市
イピランガ区のある小学校では「愛国と道徳」の時間に
（ブラジル政府が本年からこの「愛国と道徳」の時間を小
学校にもつよう制定したとのことであります）全生徒に
「アッセンデドール」を持たせて教える学校があるという
事を言つて彼自信（城君）ものすごく感激しております
た。総支部でも政府関係、学校関係にたくさんこの「アッ
センデドール」を献本する事にしておりますので想像も
つかぬすがたでみ教えがブラジル全土に拡がつていく事
と信じております。

毎土曜の午後二時間、村原講師の通訳で「生命の謎」の
講義をしておりますが、これは良い幹部になるような人
の集まりですが、大体五十名ほど集まり、大変喜ぶと同

時に生長の家のみ教えの深さに驚いているようであります。

その他サンパウロ州各都市のみでなく、各州の主要都市に「アッセンデドール」が大きな役目を果たして光明化運動を促進しております。只々有難いばかりでございます。

どうか総裁先生にはいつまでも御健康にて、この伯人達の喜びを是非一度御覧になって頂くべく御来伯頂きます日を祈っております。

総裁先生始めお山御一家様の御多幸御健康を祈ります。

（「生長の家」昭和四十六年十月「明窓浄机」所収）

【谷口雅春先生御文章】

ブラジルでは、最近とみに外人信者が殖（ふ）えつつある様子で、その伝道機関新聞である「円環」紙は、今まで、片面が日本語記事、その裏面がポルトガル語記事になっていたのであるが、最近ではポルトガル語の「円環」が独立して、日本語「円環」とは切り離して発行されることになった。ブラジルでは生長の家の教えがブラジル国の繁栄と民生の安定に非常な功績を挙げているというので、その代表講師たる松田巳代志氏はサンパウロ市議会議長からメダリヤ・アンセッター章と感謝状とを授けられたという朗報が届いたので、その手紙を次に引

用させて頂く。

【手紙】

いよいよ本年も後二日と相なりました。日本は唯今寒気厳しい毎日と存じております。

総裁先生には大変な御忙しい中にもいよいよ御健勝にて御指導賜わりますことをうれしく有難く感謝申しております。

さて、今日は更（あら）ためて先生に喜びの報告とお礼を申し上げさせて頂きます。と申しますのは、去る二十七日州議員議員下本八郎君の斡旋によりまして、私の今日までのささやかな人類光明化への御手伝いが大サンパウロ市の認めるところになりました。市議会議長より誉れあるメダリヤ・アンセッター章と感謝状を頂く事になりました。市庁栄光の間におきまして市高官、日系諸団体の代表、日伯生長の家信徒二百名の御列席のもとにその授与式がございました。まことに身にあまる光栄でございます。

私としましては総裁先生の尊い『生命の実相』に二十歳の時ふれまして、このみ教えこそ人間永遠の生き甲斐なりと信じ、このみ教えに我が人生を捧げ、かつ全ブラジルにお伝えしたいと明るい希望と固い決意を持って歩いてきたに過ぎません。私としてはこの光栄と名誉を受けるなんらの資格も実力もございません。唯々総裁先生の偉大なるみ教えと尊い御徳よりほかないのでござい

ます。従つてこの光栄と名誉は、先生に捧げられるべきものでありますものを私が代理として受取る光栄を頂いたと存じております。

先生誠に有難うございます。唯感涙あるばかりでございます。

唯今、私共のブラジルは“国造り” “人造り”のスローガンのもとに力強き発展をしつつあります時、眞の人間作りは結局『生命の真相』よりほかにないのでございますから、今後益々私の生命の限りを捧げてブラジルの人作りにみ教えを通して協力し今日までの（今後もでございますが）総裁先生の限りない御愛念に、そしてブラジル国家の御恩に報いる決意を新たにしております。

伯人信徒達も大変喜んでくまして、自分達がみ教えを宣伝するのにこれ以上の力はないと言って喜んでくれます。ブラジル人の救われた体験談はものすごいものがあります。あるユダヤ婦人はキリスト誕生の地で、戦いがあるということは悲しいことだが、これは人間を肉体だと思つてゐるからでこの悲しい戦いをなくするのは谷口先生のみ教えよりほかにないから明年先生がお出の時は、もっとこの運動を世界に拡げて欲しいとお願いすると言つております。

その他いろいろの素晴らしい体験があります。伯人の喜んでゐる姿は本当に言葉には現わせないほどです。

では先生今日はこの喜びの報告とお礼だけにさせて頂きます。日伯信徒喜びに満たされて明年をお待ち申して

おります。有難うございます。（「生長の家」昭和四十八年四月「明窓浄机」所収）

【谷口雅春先生御文章】

ブラジル駐在の南米教化総長・松田巳代志氏から私たちの南米巡錫についての受容れ態勢進行の状況を次のごとく報じて来られた。この報道は先に徳久副理事長宛に来た手紙と重複の点もあるが一層くわしいので紹介することにした。

【手紙】

総裁先生にはお変わりもなく御壮健にて御指導賜わりますこと誠に感謝の至りでございます。祖国日本の現状を遠くより眺めて総裁先生の尊い御存在をしみじみ神に感謝しております。

さて、大変御多忙の事と存じますが、少しばかり御報告させて頂きます。総裁先生、御奥様御二方様のブラジル御入国については既に手続済みと相なりました。御世話下さる丸井先生のお話では御着伯と同時にサンパウロ州賓、サンパウロ市賓としての御待遇を受けられるとの事でございます。

ポルトガル語付きの御講習でございますので広く伯人に伝道する必要がありますので、まず御講習開催地を中心に周辺の衛星都市に伯人の伝道員を送り地元誌友会で

色々お世話してそれを助け、その後ポ語の出来る講師、光明実践委員を総動員しまして一斉に各地でポ語講演会、一日見真会を催しておりますが、これが大変好評を博してブラジル人間に喜ばれているようです。ブラジル人は巧妙なポルトガル語でブラジル人から指導されるよりも未熟なポルトガル語でも日本人から指導されることを喜んでいくようです。それからポ語神誌が到る所で大変活動しておりますして現在約五万部出ております。先生がお出下さったら十万にはすぐなると思います。体験談は驚くほど出ております。

中でもこの頃アマゾン州選出の上院議院ジョゼ・エステーベス氏が奇病（手足が硬直したまま動かなかった）から救われました、つい「一週間ほど前上院議会において救われた体験を発表し、その驚くべき哲学「生長の家」とはいかなるみ教えであるか、その創始者谷口雅春先生とはいかなるお方かとその大演説を行いました事が官報三ページに掲載されました。徳久先生の方へその官報を送って留学生に翻訳して頂き総裁先生にお目にかけて頂くようお願いしてあります。

総裁先生がお出下さるという事は住吉大神の宇宙浄めのお姿と存じておりますが、私どもが予想もせぬ事がこのようにして現れます。三日ほど前サンパウロ郊外のタウバテ市の生長の家教会の落慶式に行きますと、市長が式から祝宴まで三日間に二時間しか寝なかったという御多忙なお体で、終始ニコニコ御列席頂いたのであります

が、祝辞を述べて下さる時日本が世界を相手に戦ってしかも原子爆弾で灰になった苦しい立場から今日の素晴らしい発展を見ることは誠に素晴らしい民族であると讃えて下さって、涙を流して話しておられました。その民族が人間は神の子という素晴らしい思想をこのタウバテにおいて皆んなの幸福のため広めて頂く事は感謝に耐えないというような意味のお言葉でありました。この伝道本部でも毎週最後の火曜日は婦人一日見真会が行われておりますが、今日は一千名の婦人達がお集まりになって先生を讃えて喜んでいて下さいます。

日本人の方への活動は三人組戸別訪問を徹底するように呼びかけております。また誌友会、自鳩会と青年会との中間の人々に呼びかける方法として、若い婦人の集まりと、栄える会のことを力強く運動するようにしております。三人組戸別訪問は素晴らしい結果を生んでいるようです。うでございます。

とにかく先生がお出下さるということとはまことに素晴らしい事でございますのでこの機会に教勢を伸展させるべくあらゆる方法を講じてお喜び頂けますような態勢を調（ととの）えようと考えております。

なおまたペルー国に派遣駐在せしめました八尋講師からの報告によりますとペルー人、青年層にかなり喜ばれておるようでございまして、集まりにもペルー人の知識人が集まっているそうですありますが、一日ペルー国新聞協会とテレビカナルコの会長を兼ねている報道界の大物

が八尋講師を訪れ、二時間にわたって対談をしたのだそうですが、この人は前に肺の一部を切り取った時、生長の家のみ教えにふれ、それ以来健康を取り戻し現在も多忙な生活を健康に生きていると語られたそうであります。

この人がペルーの日系青年幹部に「谷口先生がリマ市に来られたら大新聞の一ページのトップに写真入りの大宣伝をしてリマ市唯一の二万人収容可能の大会場を満員にしよう、その記事は自分が書く」と言って帰ったそうである、と伝えて来ました。またその後の報告には生長の家の信者でクリスチャン・サイエンスの方で大学教授であるゼジュス・エスペランサ女史が「自分は生長の家の講師になってペルー人にみ教えを伝えたい」と言って八尋講師を自家用車であちこち案内し、御自分の家を開放して生長の家のお集まりをしたいとも言っておられたということであります。

昨年米国では先生の御講演を聞かれた牧師の中にこういう方がおられたという話ですが、ペルーでは、お出でになる前にこのような事が現れて参った訳であります。総裁先生の世界御巡錫はまことに世界浄めの壮挙であり、神業であるということをしみじみ感じております。

祖国においては共産党は天皇制廃止を目指し、社会党は自民党打倒を叫んでいるという事でございますが、これらの国難を防ぎ天皇制を永遠に護持し奉り、祖国をして宇宙の中心としてその実相を開顕し給う先生の御使命は尊くまた御多忙であります。どうか御健康にて世界

浄めの六月の御出発に神の守護と栄光豊かならん事をお祈り申します。

御貴重の時間を省みず、ブラジル、ペルーの近況の一部御報告申し上げます。有難うございます。（「生長の家」昭和四十八年六月「明窓浄机」所収）

【手紙】

合掌有難うございます。

昭和四十九年十一月二十二日。総裁先生第八十二回目の御誕生日をはるかにお祝い申し上げます。

いついまでも御健康にて御長生下さいまして人類永遠の救いの成就のために御指導下さいますようお願い申し上げます。

本日私共も伝道本部大講堂におきまして、日伯信徒一同、堂を埋めてこのめでたい日をお祝いさせて頂きました。喜びと感激が堂に満ちておりました。聖者御生存中にみ教えが世界に拡がるという事はいまだかつてなかった事でございます。しかもその聖者は八十二歳の御高齢にもかかわらず長崎に住吉神社を建立して生長の家大神のみ社（やしろ）として祭祀して、そこを生長の家本山とし、そこより更に全世界にみ光りを急速に発展せしめんとの大いなる理想に生きていらつしやるまことに莊嚴な御姿を拝し、襟を正してこの聖者と生を共にし、共に人類永遠の救いに参加し得る自らの幸福を限りなく讃えさせて頂くのであります。

先生先日私はお祝いの言葉を差し上げておきましたのに、今日またこの手紙を書かせて頂きますのは、このめでたき日に、重なる私の光栄と喜びを頂きましたので、ここにその喜びと光栄とを報告申し上げ、その一切が総裁先生の御高德とみ教えの故でございますので、謹んで御礼を申し上げさせて頂きたいのであります。

その一つは、ついこの十五日にブラジルの上下両院の選挙がありました。ふたたび下院に立候補せられた私共の同志野村文吾氏が見事な成績で当選されたのであります。招待申しておきましたところ、御多忙の中からお出頂き祝辞を頂いたのであります。祝辞の最後に、私がみ教えを通じてブラジルの文化向上のために尽したその功績を国家が認めて、本日グランデ・オフィシャル勲章を授与される事になりましたとおっしゃって御発表があり、野村代議士より授与して頂いたのであります。先に、サンパウロ市議会よりアンセツタ章、又日本からのS・T・Sの御一行と同行して首都ブラジリアを訪れました時、同じく下院議会議長よりメダルを頂き、今日また先生のおめでたいお誕生日にブラジルでも最高に近い勲章を頂きました。これらの榮譽は何一つとして私のものではなく、唯々総裁先生の限らない御徳とみ教えのみあるのでございます。もしみ教えなくば、先生いままさずば、到底望むべくもないのでございます。先生の御名代として、私が代りに頂くのでございます。その代理をさせて頂くだけでもまた無上の光栄でございます。

それから午前祝賀の式が終わりました、午後は「何
人を救うか」の演題で記念講演会をさせて頂きました。
『生命の実相』第三十六巻の中の「回心の原理」をテキス
トにさせて頂き、大変御喜び頂きました。日伯信徒九百
名位の集まりでございました。二時間の講演会が終わり
ますと、そこにまたひとつの喜びが待っていたのであり
ます。妊娠しておりました長男雅生の妻が産気づいたよ
うだというので九時に病院に行きましたが、十時四十五
分に超無痛安産で男の子を分娩して下さったのでありま
す。母子ともものすごい健康です。何という幸せな私で
ございましたよう、いつ生れてもよい神の子が、しかもま
だ予定日は後一週間もあると言っておりましたのに、
ちようど選り選んで総裁先生の御誕生日祝賀祭に私の孫
として生れて下さったのであります。三代目の後継ぎの
神の子の誕生、重なるこの喜び、何に例えようもござい
ません。唯々先生のお蔭でございます。お礼の申し上げます
ようもございません。

今後はこの恩恵、この榮譽の御恩返しとしていよいよ
益々自らの自覚を高め、ブラジル及び南米全土光明化の
ためいよいよ活動させて頂きます。

先生にはあの風光美しく、靈氣清き九州別格本山に御
移り下さり、いよいよ御健康に御長生下さいまして御指
導給わりますようお祈り申し上げます。

先生の御繁忙の時間に、私用の長文の手紙まことに失
礼とは思いましたが、あまりの喜びに失礼致しました。

どうか御宥（ゆる）し下さいませ。

お山の御一家様の御多幸を祈ります。（「生長の家」昭和五十年二月「明窓浄机」所収）

【谷口雅春先生御文章】

ブラジルの生長の家は益々旺（さか）んに伸びている。最近来た松田己代志氏からの報告の手紙を次に転載する。

【手紙】

合掌有難うございます。

謹んで総裁先生第八十三回の御誕生日をはるか大洋の彼方より、日伯人信徒を代表致しましてお祝い申し上げます。おめでとうございます。先生にはいついまでも御健やかにしまして、人類の最後の救いのため御指導賜わりますよう、お祈り申し上げます。

今日の佳（よ）き日をブラジルにおきましても、日伯信徒一同、伝道本部大講堂を埋める盛況をもって、お祝いさせて頂きました。

壇上は、伯人信徒の捧げる花で一杯に飾られました。実相礼拝後、信徒一同起立して、五分間先生の御健康と御多幸を御祈りさせて頂きました。最後に、私がみ教えの偉大さ、先生の輝かしき御存在、先日訪日して先生の御姿に接した報告を申し上げ、第三回目の御来伯実現のため祈りましようと、そのため一人でも多くの人に喜び

を伝え、「アッセンデドール」誌を頒布しましょう、と結びますと、日伯信徒総立ちの大拍手でした。本当にお待ち申しております。

さて、先生が神誌十二月号の「明窓浄机」欄にお書き下さいましたように、ブラジルの伯人間への普及は驚くばかりでございます。現在サンパウロ市では、四つのTVから申し込みが来ています。無論無料です。そのTV放映がものすごい反響を呼んでいるようでございます。また「フオリヤ・ダ・タルデ」紙は日本の大阪毎日、大阪朝日に匹敵する大新聞であります、その新聞社から、週二回生長の家の記事を一頁ほど書きたいと言って来ております。大体の話し合いが出来たもののコピーを、TVと新聞社の分を同封してお目にかけてさせて頂きます。このようにマスコミが―大いなる宣伝力をもつもの―無料で協賛してくれる事、しかもこちらから願い出て交渉が始まったのではなく、先方から申し込んできて、無料で取扱ってくれるということは驚くべき事で、ここにも神意の展開をみる思いが致します。

なお、伝道本部における神癒祈願の申し込みは、一日八百名になりました。聖使命会加入者が月に一千名ほどになりました。人間が誕生した時、役所に登録するけれども、人間が神の生命として新生した記録は、聖使命会に入会して神のみに前に登録すべきであるという宣伝と、その誠魂奉安式を、伝道本部で荘厳に行事しましたら、急激に殖（ふ）えて来たのであります。まことに有難い

極（きわ）みであります。

先般私が在京中、副総裁先生より、ブラジルの光明化について積極的な御指示を頂きましたのでブラジルの伯人光明化も画期的な大改革をすべきだと考え決意して帰りましたが、以心伝心、ブラジルでも教化総局、青年局で同じような事を考えておりまして、立派な態勢の新構想が出来上がり、昨日の全伯代表者会議で満場一致の御承認を頂きましたので、直ちにその新構想の実施に取りかかる事に致します。

サンパウロ市と近郊だけでも、ポルトガル語を解する青年講師、光実が五十名ほどおりますので、これらの人々のリストを作り、総動員して活躍をして貰うよう、青年局では考えております。

講師試験も本部から試験問題を送って頂き、指導者研修会の最後の日に試験して、若い指導者作りをしたいと思っております。

ブラジルはまだ日語の判る二世三世がいることが、現在のところ大きな力であります。

次に、お名前を頂きました村原新一君では、去る十一月七日男子出生致しました。大変喜んでおります。有難うございました。

先生の御健康御多幸をお祈り申し上げます。（「生長の家」昭和五十一年二月「明窓浄机」所収）

【谷口雅春先生御文章】

昭和五十二年四月二十二日付で生長の家ラテン・アメリカ伝道本部駐在の南米教化総長、松田巳代志氏から次のような報告が来た。愈々益々教勢が発展しつつあるのが手にとるようにうかがうことができる。

【手紙】

合掌有難うございます。

新緑薫（かお）る祖国日本のこの頃かと存じます。総裁先生、御奥様には御変わりもあらせられず、御壮健にて御指導賜わりますことを、神誌で承知致しまして、御高齢の先生がかくも人類の救いのために捨身の御指導を頂きますことが、あまりにもつたいなく、申し訳なく、またその半面唯々有難くはるかにブラジルの地より合掌の祈りを捧げるばかりでございます。

当ラテン・アメリカ伝道本部におきましても、伯人社会へのみ教えの浸透は私共の想像もつかないほどで、日本の二十三倍の広大な世界にぐんぐん伸びております。各地から指導者派遣の要求がありますが、指導者が少なく、それに応じられないのが残念に思っております。でも先生がお開き下さいました文書伝道という方法によって指導者の不足を補っております。

最近ブラジル最南端のリオ・グランデ・ド・スール州に大変拡がりまして、そこからアルゼンチン国へも拡がりまして、唯今政府に登録すべく定款作りの最中であ

ります。

パラグアイ国ではペルー国から定款を取り寄せ、それを基準に定款を作り、政府の許可を得たという報(しら)せがありましたので、コピーを取り寄せさせて当伝道本部で調べております。

メキシコではここでも林特務講師が私共の知らぬ間に政府に登録し許可されているようであります。さらに、ボリビヤ国から十三人ほどの団体で練成会に参加したい旨の通信が来ているようなことで、ラテン・アメリカ全土にぐんぐん伸びていきつつありますことは、まことに喜ばしい限りであります。懸命にこの指導と組織化に取り組まねばと存じております。

幸い、来る七月副総裁先生御夫妻様の三度目の御巡錫をお許し頂きましたので、その折種々御指導を頂くつもりでおります。(「生長の家」昭和五十二年七月「明窓浄机」所収)

唯合掌！ 唯感謝―― 尊師に捧ぐる文

久遠の生命(いのち)のみおやとお慕い申し上げておりました谷口雅春先生！ 先生の現身(うつしみ)は再びかえらぬ世界に神去り給いました。

あの日、私はサンパウロから五〇〇キロほど離れているパラナ州のロンドリーナ市での日本語の一般練成会に行っておりまして。帰りは月曜日になっていて既に飛行

機の切符も用意してあったのですが、どうしても終了日当日の日曜日に帰りたくて飛行機会社に交渉して貰いますと、日曜日の飛行機は満席で駄目だという返事でした。でも私はどうしたものか、帰りたくて仕方がなく、荷物を持って空港に行き最終便の時間を待っていました。すると幸い空席が出来て、その日に帰ることが出来たのであります。その夜に悲しい電話が国際局（日本）から入ったのです。私は一時呆然自失しておりましたけれども、早速、友理事長や二、三の理事に急ぎ電話をして翌日集まって頂きました。相談の結果、十七日月曜日に旅行社に無理にお願いし、その日のうちに手続きを済ませて友理事長と二人で日本に飛びました。せめて最後のお別れにひと目なりとも思いましたが、それが出来なくとも、またたとえお葬式に間に合わなくともよい、とにかく飛んで行かずにはられませんでした。

長崎の総本山の総裁公邸で最初雅宜先生とお会いしても、輝子先生、恵美子先生にご握手を頂いても挨拶も出来ず、泣くより仕方がない私でした。祭壇の高い所に置かれてある先生のお写真の前に坐っても、涙があふれて来るばかりです。でもその涙は悲しいのでも、口惜しいのでもありませんでした。むしろ先生のみ教えと先生の生命が私の内に強く生きるのを感じながらの涙でした。応接間で輝子先生から総裁先生の尊いご臨終のお話を承わり、祭壇のご前で『甘露の法雨』を拝誦させて頂き、なにか力強いものを感じました。先生の御生前にはとも

すれば現象の先生のみを見て、先生は長崎の総本山にのみ在すとの考えがちでしたが、今はそれが力強く碎かれて全大宇宙に満ちてまします先生、常に私の魂の中に生きます先生を感じ、いや増して人類光明化運動のために前進せんとの堅い決意が湧いて参ります。

思えば五十年前、二十三歳の青年の時でした。二年前に渡伯しておりました兄（大二郎氏）に呼ばれてブラジルに來た私でした。広いコーヒー園で朝から晩まで汗みどろになって働く生活が始まりました。だが日本人は周辺に唯三家族のみ、なんらの娯樂もなく、恋愛の対象となる若い女性もいず、ただ働くだけの單調な生活に若い魂はやる瀬なく人生の哀れを感じていました。そんな時のことです。新しく日本から來た移民の方から『生命の実相』を借り、先ず最初に、当時アメーバで瀕死の状態にあつた兄がその本を読んで三日目には病床から立ち上るといふ奇蹟が現れました。本（レ）を（レ）読（レ）ん（レ）で（レ）病（レ）氣（レ）が（レ）治（1）る（レ）！

とても簡単には信ずることは出来ませんでした、目の前に自分の兄が治っている姿を見ては信ぜざるを得ませんでした。この本の中には一体どんなことが書いてあるのか―私はものすごい好奇心をもつて読み始めました。読み進むうちに私の若い魂は感激に疼くようになりました。そして読み終わった時、私の人生觀は完全に革命されておりました。私の魂は打ち震えながら、"私の一生をこのみ教えて生きる。私の一生を谷口先生に捧げて生

きる」という堅い決意をしてしまっていました。誰一人の同志も、先輩も指導者もいたわけではありません。異国の見渡す限りの広野に立って、私はこのような輝かしい決意を天に向って叫びました。そしてその決意を私は完全に生き抜いてきました。

今、私は永遠の勝利者としての喜びと誇りをもつて生きています。私にこの決意をさせ、人生觀に光りを与え、今日の私の生き甲斐を作つて下さったのが谷口雅春先生！ 先生だったのでございます。先生！ 先生いまさずば今日の私の喜びも、生き甲斐も、地位も名誉も何もなかったのです。

この限らないご恩に、どうして私はお報いしたらよいのでしょうか。

『生命の実相』によって病床から立ち上った兄のその後は、事業も、生活も顧みる余裕もないまま次から次へと伝道と教化の生活に変わってしまいました。私も同様です。新聞紙上に載った肺結核患者の哀れな青年兄弟の記事を読んだ私は、祈りながら『生命の実相』の真理を手紙でお伝えしました。そのことによってその兄弟は二人とも結核を克服し立ち上つてみ教えの使徒となり、数多くの奇蹟を産み出していったのです。かくしてみ教えは、サンパウロ州の南北両端から日系社会へ、燎原（りょうげん）の火を見るように拡がっていったのでした。

その輝かしい出発の年が昭和九年ですから、日本で昭和五年に誕生したみ教えが四年目にして既に日本から一

番遠い、しかも日本と真反対のブラジルに恐しいほどの勢いで伸びていったということになるわけです。なんと
いう奇しき神意のはからいでありましょうか。

それから五十年、生長の家のみ教えは、日本の二十三倍もの広さをもつ大陸ブラジルの全土に、しかも日系の世界から伯人の世界へと堂々と伸びていっております。キリストに縋（すが）らねば人間は救われぬ——と言っていたキリスト教国のキリスト教信者の間になんの矛盾もなく、抵抗もなく、むしろキリストの教えた真理がよりよく判ると言つて、キリストの愛を称（たた）え、より一層キリスト教を信じつつ発展しているのです。自らを十字架に捧げたキリストの愛の偉大さ、分らなかった創世記の謎も明るく理解されて、キリスト教信者たちが先生を限りなく称え、お慕い申しております。

この頃私は、光明講座を担当して各地を廻っておりますが、いずれの開催地でも会場に溢れるほどお集まりになります。日本人があまりいない地方でも一杯です。ものすごい拍手でお迎え下さり、送って頂きます。涙を流しながら話を聞いて下さいます。いろいろな体験も現れます。とにかく“罪の子人間”から“神の子人間”への転生の喜びが大きいのです。その喜びがブラジルの天地に満ち溢れ、拡がっております。先生いませばこそ、その喜びです。

先生！ 先生の現身（うつしみ）は帰らぬ世界に神去りました。でも先生のみ生命（いのち）は、今私ども信

徒一人ひとりの生命となつて生きていらつしやいます。先生！ ブラジルの信徒は一致団結して、二十一世紀を生長の家の時代となすべく全力を捧げます。そのためブラジルを世界最高の拠点の一つに作り上げる決心でおります。だつて先生！ 世界の人類は今、滅亡の瀬戸際に來ていているといいます。その原因は結局“人間は肉体なり”とみる唯物的人間觀の所産でありますから、人類を全滅の危機から救うものは“唯神実相の神の子の大真理”を全世界に紡げる以外に何も方法はないのです。それには“人間神の子”も心の表層で知つた、分つただけではいけないと思います。人間神の子の前に、否同時かもしれません。が、「現象無し」の觀の大転換が必要と先生は教えて下さっています。あの『生命の実相』第20巻の中の、先生の見神のご体験に出てくる「物質無し」「現象無し」の莊嚴さよ、です。五官の世界に生きる人間に「現象無し」と五官的存在の大否定！ これで神の子が生きてくるのです。

でも先生！ その人間神の子の大自然に続いて、もう一つ大事なものがございますね。それは“中心帰一”ということではないでしょうか。神の創造の特徴は必ず“中心”があると先生は説いていらつしやいます。またこれも先生のあまりにも偉大なお仕事の一つですが、五十年の長きにわたつて靈感によるご執筆が続けられたことによつて、先生のご著書を開けは、随所に“人間神の子”の真理が充ち溢れていますから、人類は再び罪の子

て人類救済の永遠の完成が出来たわけです。そのお蔭で「真理」が間違ふことなく、全世界のコトバに翻訳されていくことでしよう。ブラジルでも出来得る限り、多くの国語への翻訳のお手伝い出来るようにと考えております。ブラジルは移民国ですから全世界の国々を祖国にもっている人達がたくさんおります。その人々の中には祖国語を優秀に話す人たちがいるはずですから、ポルトガル語に翻訳された御本から更にそれらの国々のコトバに翻訳することは難しいことはありません。この翻訳のお仕事のお手伝いがブラジルで出来ると信じております。またブラジルの信徒の中には、日本語の分る優秀な二世、三世がおりますので、この点でも誠に素晴らしいことだと思っています。

かくてみ教えは世界各国語に翻訳され、人類は唯神実相哲学によって完全に救われる時代―即ち二十一世紀は生長の家の時代となると信ずるのであります。そしてその時の最後の決め手となるのが「莊嚴極まりなき」中心帰一」のみ教えであり、そのみ教えが花開く時こそ神意が見事に樹立される時だと信じます。この事は必ず現れると思います。先生は、この事をも完全に説き明かされ、ただ単に個々の人間の魂が救われるだけでなく、全世界がみ心の天になるがごとく地上にならしめ給う神意現成、地上天国実現の大真理を私共にお示し下さり、この莊嚴なる大運動の誉れある選士として私共を選んで下さったのであります。

なんという光栄、なんという喜び、なんという生き甲斐でございました。

谷口雅春先生！ 先生は永遠に生きていらっしゃいます。そしてご生前にも増して私共と偕にましまし、私共をご指導下さいますことを信じます。ブラジルの信徒一同、否全世界の信徒一同、心を同じうして先生のみ霊と俱（とも）に光明化運動に挺身致しますことを誓いまして、先生のみ霊に捧げます。

どうぞ先生！ 私共の光明化運動を天翔けりお守りお導き下さいませ。（「生長の家」昭和六十年十月）

1986	61	11月15日, 生長の家総裁法燈継承祭並びに新総裁襲任生長の家秋季記念式典に全伯信徒代表で記念式典参列のためラ・米教化総長松田巳代志駐在本部講師訪日。 7月18日, 本部理事・総本山練成部長・谷口貴康講師局次長来伯, 第一回相白合同全伯大会並びに青年会全伯大会指導。 10月7日, 藤原敏之本部講師来伯, ブラジル栄える大会並びに繁栄特別ゼミナール, 講師, 伝道員, 幹部を指導。
1987	62	2月5日, ロイ・ユージン・デービス生長の家名誉講師来伯, 各地で講演。 7月14日, 生長の家本部理事・総本山練成部長・荒地浩靖本部講師来伯, 第二回相白合同大会並びに青年全伯大会, 祭祀作法研修会指導。 8月20日, バイア州サンタ・フェ練成道場建設敷地 地鎮祭執行, 建設着工。(道場敷地面積, 653,400m²) 8月14日, 生長の家理事・講師部長・渋谷晴雄本部講師並びに青年会副会長高山寶本部講師, 西谷輝男国際部員, 来伯, 地方講師, 光明実践委員特別研修会を南米練成道場及びフオルタレーザの二ヶ所で指導。 9月19日, 生長の家長老徳久克己特命全国講師来伯, 栄える会全伯大会, 繁栄特別ゼミナール, 日語・ポ語相白青幹部, 講師, 光明実践委員, 伝道員勉強会指導。 10月23日, 講師部講師課長・三浦晃太郎本部講師, 国際部事務課長伊藤八郎本部講師補来伯。地方講師試験, 講師昇格試験, 並びに光明実践委員試験を指導。レシフェ, ブラジリア, ペロ・オリゾンテで講演。(通訳付)

1980	55	8月4日、第1回栄える会全伯大会を挙行。
		7月15日、日本本部より青年会長・理事、森田征史氏来伯。 7月17日—白鳩会全伯大会、22日—23日—青年会全伯大会に臨席。当年度における組織概況—相愛会〜345、白鳩会〜306、青年会〜129、光明白鳩会〜140、組織会員総数〜29,890名。
1982	57	1月、スペイン語「生長の家」誌第1号を発刊。 6月24日〜7月14日、谷口清超先生御夫妻、第4回御巡錫、随一行寺内耕司、鶴田昌世本部講師。 7月2日、サンタ・テクラ道場(リオ・グランデ・ド・スール)竣工。
		7月19日、日本本部理事・青年会会長—宮本瑞樹氏、7月25日、日本本部副理事長・相愛会総務実行委員長—岩田安雄氏、7月25日、日本本部理事・白鳩会会長—法貴雪子氏来伯、それぞれ全伯大会—青年大会(7月23日〜24日)男子大会(7月30日)白鳩大会(7月31日)を指導。 当年度における組織概況—相愛会〜318、光明相愛会〜384、白鳩会〜312、青年会〜147、組織会員総数〜41,943名。
1984	59	7月7日、日本本部理事長・徳久克己本部講師来伯、栄える一般講演会はじめラ・米諸国代表者会議、サルバドル、ボルト・アレグレの両会場における講演会、14日、白鳩大会、15日、相愛会男子大会、22日、青年大会を指導。 11月15日、本部隣接ベッケル工場跡地の改修工事完工。大講堂、(1千人収容)、小講堂、宿泊室、事務室、倉庫施設等。改修面積3,305㎡。
		2月3日、南米練成道場30周年記念祭を執行。 5月11日、リオ・グランデ・ド・スール州サンタ・テクラ練成道場宿舎落成。(道場敷地面積、104,628㎡) 6月2日、南米練成道場前庭に「流産児供養塔」建立、第1回供養祭を執行。 6月17日、谷口雅春尊師御昇天、ラ・米教化総長松田巳代志駐在本部講師、友広三郎・米伝道本部理事長同道訪日。 7月、谷口輝子奥様の卒寿を記念して「ボンバ・ブランカ」誌(ポ語白鳩誌)を発刊。 7月26日、生長の家非常任理事、青年会長宮本瑞樹本部講師来伯、青年全伯大会並びにノルデステ青年大会を指導。 10月11日、生長の家理事・渋谷晴雄国際局長、栗原之夫理事・総務局長、伊藤八郎国際局事務部長来伯。伝道本部の運営等について視察。

1967	42	6月、相部良雄氏によるポ語訳『生命の真相』出版される。 9月7日、光明書籍直輸入開始。 10月28日、徳久副理事長夫妻、長期駐在指導のため来伯。 11月19日、総支部新会館落慶。
		3月11日、御神像安着。 3月23日、第1回訪日団出発。 7月28日、イビランガ独立記念塔前に第1回ブラジル国発展と世界平和の祈りを3,000人で祈願。
1969	44	2月22日、第2回奉祝立教40周年訪日団—101名空路出発。 10月2日、伯人問への布教の基礎を築いた徳久先生帰国の途に。
		2月14日〜15日、初のポ語練成会。 4月5日、第1回伯人光明講座。 7月22日〜9月1日、第2回谷口清超先生御夫妻御巡錫、雅宜様、徳久克己副理事長随行。 11月22日、伯国栄える会結成。 当年度における組織概況—相愛会〜319、白鳩会〜237、青年会〜135、組織会員総数〜18,619名。
1971	46	1月、第1回ポ語青年練成会。
		6月21日〜7月20日、谷口雅春先生御夫妻第2回御巡錫。この御巡錫を機に伯人幹部、信徒白熱的活動を開始。随一行—徳久克己副理事長、吉田本部講師(教務局長) 6月21日『生長の家ブラジル総支部20年史』発刊。
1974	49	イビウーナ練成道場、新大講堂、食堂、炊事場、宿舎、及び運動場造成竣工。 8月〜9月7日、徳久克己副理事長来伯。
		4月新体制成り、伯人組織が軌道に乗る。
1975	50	4月9日、伝道本部理事制施行。 8月14日、本部理事長初の来伯、山口悌治理事長、ブラジリア別格本山竣工式へ。
		3月7日、谷口清超先生の御指示で光明(ポ語)白鳩会、光明(ポ語)相愛会発足。 7月17日〜8月15日、谷口清超先生御夫妻、第3回御巡錫。
1978	53	3月、初の伯人講師誕生。
		7月27日、和田英雄本部理事長、栄える会訪伯団と共に来伯。

		混乱を鎮める一大開眼の業を成し遂げると共に、全伯誌友の総支部に対する認識も、ブラジルの中央拠点として統一され、横の結びつきも密となり、次々と各地に連合会が結成される。 8月1日、ブラジル政府より、宗教法人の認可下りる。 9月29日、徳久講師指導で初の中央練成会—220名参加。
1953	28	2月28日、39名の地方講師誕生。 9月、ポ語訳『甘露の法雨』発刊。
1954	29	1月4日、松田巳代志氏、本部1カ年の研修を終え、初代ブラジル駐在本部講師を拝命し帰伯。 5月20日、ポ語訳「生長の家」発行。 8月2日、イビウーナの丘25アルケール購入、地鎮祭執行。 10月27日、ブラジル総支部会館建設用地(シネマ館跡地)買収、面積—249,400㎡ 11月21日、聖使命会発足。
1955	30	3月2日、イビウーナ青年練成道場竣工。 7月9日、第1回全伯青年大会。
1956	31	3月3日、総支部会館第1次改築工事竣工。 7月1日～9月4日、谷口清超先生第1回御巡錫。 7月12日、谷口清超先生御臨席の下、初の全伯白鳩大会が開催される。本部理事徳久克己全国青年会長随行。
1957	32	1月17日、日本本部留学生派遣制度始まる。 4月1日、イビウーナ練成道場に宝蔵神社落慶。
1960	35	7月9日、第1回全伯信徒大会。 11月1日、松田巳代志氏、初代南米教化総長拝命。 12月31日、伊勢神宮復興奉仕練成団18名、船便で日本へ向かう。
1962	37	7月24日、松田大二郎氏昇天される。
1963	38	6月7日～9月4日、谷口雅春先生御夫妻第1回御巡錫。徳久克己、仙頭泰兩本部講師随行。 8月29日、イビウーナ練成道場「拓人の聖塔」除幕式。
1964	39	イビウーナ道場、工事竣工落慶。 2月1日、総支部第1次5ヶ年計画を発表。
1965	40	7月17日、「アッセンデドール」誌創刊さる。 11月24日、神癒祈願部開設される。
1966	41	6月15日、徳久克己博士本部講師、第4回目の来伯。

1939	14	リンス・プロミッソン合同誌友会の指導者、岩城富士作氏、ブラジル初の地方講師拝命。パウリスタ支部認可受く。
1940	15	サンパウロ市(聖市)及びサンパウロ市郊外各地でも誌友会が行われる。
1941 1945	16 20	大戦下で連合国側の伯国(ブラジル)は日本と国交断絶、日本人三人以上の集会、日本語の使用禁止等厳しい監視と弾圧が加えられたが信徒達は神を信じ、生長の家こそ伯国の発展と世界平和に貢献するものと信じ、官憲の誤解を少なくするため深夜密かに聖典神誌を頒布し、少人数の集会も継続した。一方取締りの厳しい聖市にあって、谷垣光枝さんは日本人の良さを生かしつつ伯国の発展に貢献出来る日系二・三世の育成を願って、自宅に60人の子供を預かり『生命の寶相』をテキストに日本語教育を続けた。
1946 1950	21 25	戦後から総支部結成まで邦人のほとんどが予期せぬ日本の敗戦の結果、邦人社会は混乱。そんな中でも誌友たちは各都市で戦後初の誌友会を開くなど活動を開始した。一方日本移民のほとんどが故郷に錦を飾る夢を失い永住を決意し、子弟教育等今後の活路を考え、続々と集団的に聖市及びその近郊に移転を開始。誌友の大半もこの動きに同調、多くの人材がここに集中。しかし、この時、邦人社会は不幸にも確かな情報のないまま「勝ち組」「負け組」に分れて、祖国を愛するが故に同胞相争う結果を招き血で血を洗う凄惨な様相を呈するに至る。この不幸な状態を救い得るのは生長の家のみ教えのみと、聖市近郊の誌友達、特に斎藤実正、宮本政春氏らは相はかり、高木定二氏を推し、全信徒の結集をはかると共に、本部より勝ち負け両組を説得し得る有徳な重要人物を長期招聘し、日系社会に大調和をもち来たそうと奔走、幾多の障害を乗り越え赤貧洗うがごとき中から、1950年(昭和25年)11月26日、聖市近郊誌友連合会を結成し、全伯信徒連合会結成へと運んだのであった。
1951	26	1月8日全伯代表者会議開催。 3月1日全伯信徒連合会結成。 5月30日「生長の家ブラジル総支部」認可証が谷口雅春先生より届けられここに全伯規模の組織運動が緒についた。初代幹事長高木定二氏。顧問に松田大二郎、斎藤繁一、川崎辰男の三氏。 7月末日、本尊「寶相」軸届く。
1952	27	3月4日、機関紙「円環」創刊。 7月13日、徳久克己本部講師来伯。混乱の日系人社会に明るく笑いと呼び戻し、永遠不滅の真相哲学をもって現下の日本を説き、人類の調和、人間神の子の真理を説き、邦人社会の啓蒙と

ブラジル伝道の半生記

発行———昭和63年3月1日 初版発行

定価———1100円 <検印省略>

著者———松田已代志

発行人———中島省治

発行所———株式会社日本教文社
〒107-91 東京都港区赤坂9-6-44
電話 03 (401) 9111 (代)

頒布所———財団法人世界聖典普及協会
〒107-91 東京都港区赤坂9-6-33
振替 東京1-120549番

装画———木暮光孝

カバーデザイン———丸山邦彦

印刷———飯島印刷

製本———笠原製本

©Miyoshi Matsuda, 1988 Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-531-06180-2

「ブラジル生長の家」沿革年表

西暦	年 号	主 なる 記 録 事 項
1930	昭和 5	リンス市の谷垣勝蔵氏の許に「生長の家」誌第1輯第4号届く。以後全出版物を取寄せる。
1931	6	7月、谷垣氏感謝の手紙を谷口雅春先生に送る。同手紙「生長の家」誌、『生命の真相』にも掲載。
1932	7	『生命の真相』初版、崎山比佐衛氏と共に渡伯アマゾン奥地で同著研究グループを結成。
1933	8	大城榮治郎氏の許に、ブラジル光明化運動の原点となる神佑の『生命の真相』と神誌届く。
1934	9	松田大二郎氏『生命の真相』を一読、瀕死の床より起ち上がり松田兄弟の熱烈な伝道始まる。松田大二郎氏の個人指導は神業のごとく奇蹟続出、名声を博す。同年暮れ、松田已代志氏は瀕死の肺結核に伏す大前勝、潔、兄弟に激励の手紙に添え「生長の家」誌と大調和の神示等を書き写して送る。大前兄弟は数日にして起ち上がり、白熱的な伝道を開始し、ノロエステ線の町々に伝える。奇蹟を現わす個人指導を求め遠くから集まる人々で大前氏宅は門前市をなす。
1935	10	「主婦の友」に生長の家が紹介されたのを機に、ビラッキの伊藤達馬氏本格的伝道を開始。
1936	11	グアララベスの寺前、山本、於保、大原氏ら、大前兄弟を責任者に誌友会を結成。11月本部より「ブラジル支部」認可を得る。寺前親守氏夫妻、生長の家の出版物の直輸入を開始。大戦に至るまで実に数万部の図書を取扱う。松田、大前兄弟による個人指導と寺前夫妻の文書伝道により、み教えは急速に普及、各地で誌友会が開かれた。松田大二郎氏の個人指導で、夫妻と家族の重患を癒された齊藤繁一氏は一家で松田家に住み込み松田氏に師事、一生を真理の普及に捧げることを決意。以後松田大二郎氏と共にパウリスタ沿線を初めとする布教活動に大きな足跡を残す。
1937	12	パラナ州の滝浪忠作氏『生命の真相』を知り、全巻を読破し、同州全域への布教の拠点を築く。12月、初の白鳩会がグアララベスに誕生、初代会長一寺前文恵氏。日本人の最も多いノロエステ線、パウリスタ線沿線各地で次々に誌友会開催。川崎辰男氏『大聖典』を携え渡伯、ノロエステ線沿線布教の貢献。